石川啄木をめぐる人々考

貞光　威

はじめに

石川啄木の生涯は二六年二か月と短かったが、その短い生涯においてきわめて多くの人々とかかわりを持った。その中には喧嘩別れをした人とか、啄木が相手から絶交されたという人もないではないが、どうしてこんなに互いに深い交友が持てたのかと驚くような深いかかわりのある人物もたくさんいる。

本稿は、そのような啄木の幅の広い人間関係を把握する一つの手がかりとして、啄木と交渉のあった人物について、そのかかわりを調べたものである。それは、文学の関係にとどまらず、家族や身の周りの人々、恩師、学友、職場の上司や同僚、歌集などの刊行にかかわった人々等も含めて考えることにする。

その人物の啄木とのつながりの深さを判定する基準を立てることはなかなか困難であるが、啄木が書簡をしたためている回数、彼の歌集『一握の砂』『悲しき玩具』や小説などに登場しているか否か、啄木についてのいろいろの伝記や年譜に登場する度合いなどによって総合的に判定することにする。書簡などは実際には啄木が書き送っていても、いろいろな事情で残っていなかったり、たとえ残っていても都合があって全集に収められない場合もあって、右の基準は必ずしも絶対的なものとはいえないが、今回はとりあえず以上のようにして、取り上げる人物を決めることにする。

体裁としては、〔概括〕と〔人物〕の二つに分けて、まず〔概括〕の項では、その人と啄木のつながりを簡潔に要約して示し、〔人物〕の項で、経歴を紹介したあとで、啄木とのつながりをできるだけ詳細に記すことにする。そして、その人物にかかわりの深い詩歌も示す。歌のあとに『一握の砂』は〔握〕、『悲しき玩具』は〔悲〕と記

し、岩城之徳編『定本石川啄木歌集』につけられた歌の配列番号を記す。なお、人名の配列は五十音順とする。

そして、最後に、その人物に啄木が書簡を出しており、『石川啄木全集　第七巻』（筑摩書房　昭和五四・九）に収められている場合には、その数を記すことにする。

なお、全体の最後に石川啄木の略年譜を付した。

この調査には次のような文献を参照させてもらった。著者と書名を記して、ここに謝意を表する次第である。

吉田孤羊『石川啄木を繞る人々』（改造社　昭和四・五）
岩城之徳編『定本石川啄木歌集』（学燈社　昭和三九・三）
岩城之徳編『石川啄木必携』（学燈社　昭和四二・一二）
今井泰子注『日本近代文学大系二三　石川啄木集』（角川書店　昭和四四・一二）
司代隆三編『石川啄木事典』（改訂版）（明治書院　昭和五一・九）
国文学編集部編『石川啄木の手帖』（学燈社　昭和五三・一一）
国際啄木学会編『石川啄木事典』（おうふう　平成一三・九）

姉崎嘲風（あねざき　ちょうふう）

〔概括〕浪漫主義的な啄木の詩に影響を与え、啄木の評論「ワグネルの思想」にも影響を与えた文芸評論家。

〔人物〕評論家。宗教学者。明治六年（一八七三）七月二五日、士族姉崎正盛の長男として京都府に生まれた。本名、正治。京都の第三高等学校を経て、東京帝国大学哲学科を卒業、大学院に進み、宗教学を研究した。また東京帝国大学在学中に高山樗牛、上田敏らと雑誌「帝国文学」を創刊して評論活動を始めた。大学院修了後、東大で講師として宗教学を講じ、明治三三年（一九〇〇）から三年間、ドイツ・イギリス・インドに留学し、帰国後に東大の宗教学講座の初代主任教授となって後進を指導し、研究者を育てるかたわら、ヒンズー教および仏教を研究した。ハルトマン、ショウペンハエルの翻訳もある。昭和九年（一九三四）に東大を定年で退職、昭和一四年には貴族院議員に推された。

彼は浪漫派の文人として樗牛なきあとの言論界で筆を揮い、思想雑誌「時代思潮」を創刊し、また文芸評論集『復活の曙光』（明治三七）を刊行するなど、当時の浪漫主義思潮に大きな影響を与えた。

ヨーロッパ留学中に、「高山樗牛に答ふる書」（「太陽」明治三五年二月・三月）・「高山樗牛に贈る」（「太陽」明治三五年三月・四月）・「再び樗牛に与ふる書」（「太陽」明治三五・八）の樗牛との書簡体の評論を発表、そこでショウペンハウエルとニーチェを止揚したものとしてワグネルを賞揚したことは、啄木に深い感銘を与えた。嘲

風の「ワグネルに於ける恋」（「明星」明治三六・一二）を読んだ啄木は、これに感激し、まだ見ぬ嘲風に、同三七年一月一三日付で、「今、先生の御高晦を仰がんとするの書を奉るに当たり、先ず年来憧憬の記念にして、悪作数篇を録したる一詩綴『いのちの舟』遥に先生の御膝下捧げまゐらせ候ふ。御笑覧被下候ハバ、あゝ小生が欣びこれに過ぎ不申候よ。」という手紙を送った。その返事が嘲風から届き、啄木は再び感謝の手紙を書いた。こうして二人の交流が始まった。嘲風も啄木の詩才を愛して、主宰する雑誌「時代思潮」に詩を発表する場を与えた。

この雑誌に掲載された啄木の詩には、「鶴飼橋・おもひで・風弦揺曳」（明治三七年四月）、「沈める鐘」（明治三七年三月）、「我なりき・閑古鳥」（明治三七年六月）以下、三八年四月号までつづき、合計二五編に及んでいる。彼の第一歌集『あこがれ』が刊行されたのが明治三八年六月で、「時代思潮」に盛んに投稿したのはその直前の時期にあたり、浪漫主義的な思想や芸術観、韻律などにおいて嘲風から多くの影響を受けている。

しかし、やがて啄木が詩から離れ、浪漫主義を清算して自然主義に近づいてゆくにしたがって両者の交渉は自然と消滅した。

一方、嘲風の活動も文学、美術、芸術論から次第に宗教・日本文化の研究に力点が移っていった。アメリカのハーバード大学の日本文明講座をはじめ、欧米の諸大学で講義を行ない、国際連盟学芸協力委員会の日本委員などを歴任し、東西の文化交流に貢献した。代表作に『切支丹宗教文学』（昭和七）、『聖徳太子の大士理想』（昭一九）、『我が生涯』（昭和二六）などがある。

嘲風は昭和二十四年（一九四九）七月二三日、七六歳で亡くなった。

『石川啄木全集』には啄木が嘲風に宛てた書簡四通が収められている。

阿部修一郎（あべ　しゅういちろう）

〔概括〕啄木の盛岡中学時代の友人。

〔人物〕尼ケ崎製鋼役員。明治一七年（一八八四）四月二一日に父豊吉、母竜子の長男として盛岡に生まれた。同三〇年、盛岡中学校の受験に失敗、市内の予備校、江南義塾に通い、ここで啄木を知った。翌三一年、二人はともに盛岡中学校に入学した。中学三年に進級したころ、同級生のである阿部、伊東敬一郎、小沢恒一、小野弘吉に啄木を加えた五名で親睦の会を作り、それが発展して英語学習を目的とする会となった。この会は英語の教科書の『ユニオンリーダー』を自習したところからユニオン会と名づけられ、毎週土曜日の夜、順番にメンバーの家に集まり、『ユニオンリーダー』を訳読、

その後で政治や社会、文学などの議論に花を咲かせた。

明治三四年二月、生徒たちによって学校刷新のストライキが起こった時には阿部は三年丁組の級長としてストライキ合流を指示し、啄木、佐藤二郎とともに具申書を起草し、校長多田綱宏に提出した。

阿部について啄木は明治三五年一一月八日の日記に、

郷の田鎖徹郎くん端書して阿部君の肋膜炎にかゝり岩手病院に入れるを報じ来る。写真を取り出てその凛々しき面影を見想ひは想ひを駆りて吾は遂にはかなくも懐郷の念にうたれぬ。この夜阿部兄にあてたる長き長き手紙認む。

と書いている。

阿部は明治三六年（一九〇三）に盛岡中学校を卒業し、東京高等工業学校（現、東京工業大学）に進学、卒業後は、日光製銅所、本所伸銅所、尼ヶ崎製鋼株式会社、富士電機株式会社に勤務し、技術畑で一生を貫いた。

啄木は明治三五年一〇月に盛岡中学を退学し、文学で身を立てるために渋民から上京した。その前には、盛岡でユニオン会の仲間が送別会を催し、記念写真を撮って送った。ところが、節子と結婚する前後に、啄木が多くの人々から借金を重ね、自身の結婚式に欠席するなど非常識な行動を重ねた上に、彼等の忠告を受け入れず、かえって啄木は絶交状を送った。このため八月、ユニオン会の仲間は啄木の同会からの除名を申し合わせた。

その後に我を捨てし友も
あの頃はともに書読み
ともに遊びき〔握・一六六〕

の「友」は、ユニオン会の阿部ら四人の仲間を指している。

池辺三山（いけべ　さんざん）

〔概括〕啄木が校正係として勤めたころの東京朝日新聞社主筆。

〔人物〕明治時代のジャーナリスト。慶応元年（一八六五）二月五日、熊本藩士池辺吉十郎の長男として生まれた。本名、吉太郎。父の吉十郎は鉄崑崙とも号し、西南戦争で熊本隊の隊長として参加し、乱後に斬られた。三山は父の私塾や慶応義塾に学び、東海散士とともに雑誌「経世評論」の編集を行ない、主筆をつとめた。明治二五年（一八九二）から三年間、熊本藩の旧藩主、細川護成の守役としてフランスに遊学、新聞「日本」に寄稿した「巴里通信」で文名を高めた。同二九年に「大阪朝日新聞」の主筆となり、三十年には「東京朝日新聞」の主筆も兼任し、翌年には東京の専任となった。彼の論説の筆力は、「国民新聞」の徳富蘇峰、「時事新報」の石河幹

明とともに「三名主筆」と称せられ、従来手薄であった「朝日新聞」の論説面を強化し、海外報道を充実させ、読物中心であったそれまでの紙面の近代化を進めた。

その間、大阪朝日新聞の社員だった二葉亭四迷を小説家として評価し、「其面影」（明治三九）、「平凡」（明治四〇）を執筆させて掲載、二葉亭の没後には『二葉亭全集』を刊行した。また、四〇年には夏目漱石を朝日新聞専属作家として入社させた。啄木の

大いなる彼の身体が
憎かりき
その前にゆきて物を言ふ時（握・五五）

おれが若しこの新聞の主筆ならば
やらむ――と思ひし
いろいろの事！（悲・五八）

の短歌は三山を意識して詠んだ歌である。

啄木は明治四二年一一月から三山のもとで『二葉亭全集』の校正を行なっている。そして、翌四三年四月には、編集主任であった西村酔夢（真次）の退任の後をうけて、三山の意向でその後任となり、五月一〇日にその第一巻を発行した。四月一二日付の宮崎郁雨宛書簡には、

池辺主筆が不思議に僕を信用してくれるんで誠に都合が好い。売捌方法の方針でも何でもずんずん僕の意見を採用してくれる。

と書いている。

しかし、啄木は四四年二月に、東京帝国大学医科大学付属病院青山内科に慢性腹膜炎のため入院、退院後も自宅療養に入り、それからは勤務復帰ができなかったから、全集の仕事は中断した。一方、三山も四四年九月に東京朝日新聞社を退社、啄木の死の直前、四五年（一九一二）二月二八日に四七歳で病没した。

『二葉亭全集』第三巻には「池辺三山及び石川啄木両氏の永眠に対し深く哀悼して止まざる也。」と哀悼の辞が記されている。

石川一禎（いしかわ　いってい）

〔概括〕啄木の父。

〔人物〕僧侶。嘉永三年（一八五〇）四月八日、陸中国岩手郡平館村（現、岩手県岩手郡西根町）に、農民であった父、石川与左衛門とその後妻、ゑつの五男として生まれた。四男までは先妻の子である。安政七年（一八六〇）一一歳のときから石川家の菩提寺、大泉院

に預けられて成長し、一七歳のとき仏門に入り、住職葛原対月の指導を受けた。明治四年（一八七一）一月、盛岡の龍谷寺の住職に転じた対月とともに龍谷寺に移り、ここで対月の妹で、一禎より三歳年上の工藤カツと結婚した。兄の対月の姓が葛原で妹のカツの姓が工藤と異なるのは、出家していた対月が、僧侶も一般人と同じく姓を名乗ることになって、明治五年に新しく葛原と名乗ったためである。

一禎は、二五歳であった明治七年（一八七四）の暮に北岩手郡日戸村（現、岩手郡玉山村日戸）の日照山常光寺の住職となった。ここで妻カツとの間に明治九年に長女のサダ、同一一年には次女のトラ、同一九年には長男の啄木が生まれた。

同二〇年に隣村、渋民村の万年山宝徳寺の住職に転じたが、この転任は前の住職が急逝し、後継者がいなかったため、その遺族を退去させる形で行なわれたため、村人から反発を受けた。

一禎は明治三七年一二月二六日、宗費一一三円を滞納したかどで曹洞宗宗務局より住職罷免の処分を受けた。

この時の滞納の原因は確定できないが、啄木が明治三五年には盛岡中学を中退して一〇月に上京、病気となり、父一禎に連れられて翌年二月二七日に帰郷している。また三七年二月三日には堀合節子との縁組のため結納を持参した。そのはかに、三七年九月二八日から一〇月一九日にかけて啄木は詩集刊行の費用を調達しようと、次姉トラの家を北海道小樽市に訪ねたが、うまくゆかなかった。この頃の啄木は収入がほとんどなかったから、宗費の滞納事件に、啄木の上京、結納、北海道行き、その他のことがからんでいたと見て間違いないであろう。

石川一家は明治三八年三月二日、宝徳寺を退去し、同じ渋民村内の大字芋田に転居、四月二五日には盛岡市仁王第三地割字帷子に移ったが、一家は生活困難となり、三九年一月、一禎は青森県上北郡野辺地にある常光寺の葛原対月のもとに身を寄せた。

その後、三月一四日付で懲戒赦免の通知があって、一旦は渋民村に帰ったが、住職再任の前提である滞納した宗費の弁済の見通しが立たなかったことや、また宝徳寺には代務住職中村義寛がいて、住職跡目願を提出しており、義寛支持派と一禎支持派に分かれて抗争がつづいたので一禎は再任をあきらめ、四〇年三月五日、無断で家出して対月のもとに去った。

目さまして直ぐの心よ！
年よりの家出の記事にも
涙出でたり。〔悲・六三〕

の歌は、啄木が後々までも、その日の衝撃を忘れられなかったことを示している。

四二年六月に啄木が家族を東京に迎えて本郷区本郷弓町の床屋、喜之床の二階を間借りして生活を始めると、一禎は一〇月二〇日に上京して同居した。それからの一禎は、かつての強気や頑固さを示すことなく無為の日々を送ったようで、啄木の日記や短歌にはその姿がしばしば登場する。明治四三年四月一日の啄木の日記には、啄木が一禎、節子、京子を伴って浅草に遊びに行ったことを記したあとで、

父が野辺地から出て来てから百日になる。今迄に一度若竹へ義太夫を聞きに連れて行つたきりだ。今夜は嘸面白かつたことだらう――悲しい事には。人間が自分の時代が過ぎてかうまで生き残つてゐるといふことは、決して幸福な事ぢやない。殊にも文化の推移の激甚な明治の老人達の運命は悲惨だ。親も悲惨だが子も悲惨だ。子の感ずることを感じない親と、親の感ずることを可笑しがる子と、何方が悲惨だか一寸わからない。

と書かれている。

よく怒る人にてありしわが父の
日ごろ怒らず
怒れと思ふ〔握・四九〇〕

かなしきは我が父！
今日も新聞を読みあきて、
庭に蟻と遊べり。〔悲・一八二〕

しかしこのような生活も長くは続かず、四四年九月三日、啄木をはじめとする家族の病気や貧窮、感情の行き違いから一禎は再び家出をし、すでに師僧の葛原対月は亡くなっていたので、北海道にいた次女トラの家を頼った。トラの夫の山本千三郎は当時、小樽の手宮駅の駅長をしていた。四五年三月七日に妻のカツが亡くなったときには上京しなかった。

しかし、啄木危篤の知らせを受けたときに一禎は、山本の転任で室蘭にいたが、四月五日に上京、重態の啄木をみとり、臨終に立ち会った。

啄木の死後は再び室蘭にもどり、鉄道に勤務する山本の転任に従って各地を転々としたが、娘夫婦のもとで比較的安らかな晩年を送り、昭和二年（一九二七）二月二〇日に高知の駅長官舎で七八歳で世を去った。

石川カツ（いしかわ　かつ）

〔概括〕啄木の母。

〔人物〕弘化四年（一八四七）二月四日、南部藩士工藤条作常房の三女として陸中国南岩手郡仙北町（現、盛岡市）に生まれた。母はチヤといった。啄木は明治四二年四月一三日の日記に、母のカツが「幼かつた時はかの盛岡仙北の町の寺子屋で一番の秀才だつたといふ。」と記し、工藤家について、「小身ではあつたが南部初代の殿様が甲斐の国から三戸に移つた、其時からの家臣なさうで」（『刑余の叔父』）と記しており、貧農の出であった父方よりも、母方の血筋を意識していたらしい。

カツは一三歳で父を失い、その後は長兄の工藤三作の世話を受けて育った。次兄の直季は妻の死に遇い仏門に帰依し、対月と称して南岩手郡平館村（現、岩手郡西根町）の大泉院の住職となっていたが、明治四年（一八七一）に盛岡市の龍谷寺の住職として赴任してきてから、カツは同寺の家事手伝いに行き、そこで対月の弟子で、三歳年下の石川一禎と結ばれた。明治七年の暮には、南岩手郡日戸村（現、岩手郡玉山村日戸）の日照山常光寺に、住職となった夫の一禎と赴き、明治九年には長女のサダ、同一一年には次女のトラ、同一九年には長男の啄木を生んだ。

明治二〇年には夫、一禎の渋民村の宝徳寺赴任に従い、三八年の春までここで過ごし、同二一年に三女の光子を生んだ。

三八年三月、宗費滞納事件により宝徳寺を退去した一禎とカツは、間もなく結婚した啄木夫妻および京子と盛岡に同居した。しかし、収入がなく窮乏し、三九年には渋民村に帰って間借りの生活を始めたが、四〇年には一家が離散、カツは村の知人、米田長四郎宅に身を寄せたのち、函館で弥生尋常小学校の代用教員の職を得た啄木の家に同居、啄木が小樽に移ったのちは小樽に住んだ。四一年一月、啄木が小樽を離れて釧路に単身で赴任し、さらに同年四月に上京すると、四二年六月に啄木が家族を東京に呼び寄せるまでの間、カツは嫁の節子および孫の京子との三人暮らしを小樽と函館でつづけた。

四二年六月に節子、京子とともに上京し、本郷区本郷弓町のの床屋、喜之床の二階で、啄木といっしょの生活を始めるが、貧窮の生活の中で嫁としゅうとの葛藤が激しさを加え、一〇月二日には節子の家出事件が起こった。節子は金田一京助や恩師の新渡戸仙岳の尽力で同月二六日に帰宅したが、一〇月二〇日に一禎が青森県野辺地から上京すると、別居の状態が長かった一禎とカツとの間に不和も生じた。

その後、一家は次々と病気で倒れ、「明治四十四年当用日記補遺」に記された「前年（四十三）中重要記事」には、「産後節子の健康可良ならず、服薬年末に及ぶ。」「前記節子の出産及び産後衰弱の外、

父は夏の頃を以て脚気を患み、母また著しく衰弱したり。而して猶節子不健康の故を以てよく一家のことを処理されたり。予の健康も概して佳ならざりき。」と書かれている。

四四年になると二月四日から三月一五日まで啄木が慢性腹膜炎のために東京帝国大学医科大学附属病院青山内科に入院、退院後も自宅療養に入り、その後は勤務に復帰できなかったし、七月二八日には節子が同じ青山内科における診察で肺尖カタルと診断され、伝染の危険ありとして、炊事を禁じられた結果、炊事はカツの仕事になった。

薬のむことを忘れて、
ひさしぶりに、
母に叱られしをうれしと思へる。〔悲・一六六〕

茶まで断ちて、
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。〔悲・一八四〕

はその頃の歌である。カツは翌四五年になると喀血が続くようになり、一月二三日には近所の開業医の代診により肺結核と診断された。しかし、入院はおろか薬代にも事欠く貧困の中で、明治四五年（一九一二）三月七日に肺結核のため六六歳で世を去った。葬儀は、三月九日に啄木の友人、土岐善麿の生家である浅草松清町（現、台東区西浅草）の等光寺で営まれた。法名は恵光妙雲大姉。カツの臨終の模様を妹の光子に伝える啄木の手紙の代筆は丸谷喜市が行なった。

石川京子（いしかわ　きょうこ）

〔概括〕啄木の長女。

〔人物〕明治三九年（一九〇六）一二月二九日に節子の実家、盛岡市にある堀合家で生まれた。啄木は三〇日の日記に、

イマブジオミナウム　予はこの電報を握つて臥床の中より躍り出でぬ。あゝ盛岡なるせつ子、こひしきせつ子が、無事女の児——可愛き京子を産み落したるなり。予が「若きお父さん」になりたるなり。

とひどく喜んでいる。京子という名前は、中学校時代から世話になり敬愛する金田一京助の名前の一字をとったもの。この命名は節子の提案によるもので、啄木も、明治四〇年一月三日の日記に、

京の字、みやびにして優しく美し。我が友花明金田一君は京助といふ名なり。この友の性と心と、常に我が懐かしむ処なれば、その字一つを採るともいはれ無き事にあらじ。

と書いている。

四〇年三月五日に京子は母の節子に伴われて盛岡の実家から渋民に来たが、ちょうどその日は、啄木の父の一禎が宝徳寺住職への再任を断念して、青森県上北郡野辺地にある常光寺の住職、葛原対月のもとに、家族に無断で家出をした日であった。

間もなく一家は離散し、以後、京子は、盛岡、函館、小樽と母とともに流浪したが、逆境にめげず、活発な子であったといわれる。

明治四二年六月、宮崎郁雨に伴われて節子やカツとともに上京、啄木に再会するが、啄木は娘の京子に愛情を注いだ。

原稿紙でなくては
字を書かぬものと、
かたく信ずる我が児のあどけなさ！〔悲・八〇〕

まくら辺に子を坐らせて、
まじまじとその顔を見れば、
逃げてゆきしかな。〔悲・一五五〕

その親にも、
親の親にも似るなかれ——
かく汝が父は思へるぞ、子よ。〔悲・一五七〕

かなしきは、
（われもしかりき）
叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。〔悲・一五八〕

児を叱れば、
泣いて、寝入りぬ。
口すこしあけし寝顔にさはりてみるかな。〔悲・一八八〕

ひる寝せし児の枕辺に
人形を買ひ来てかざり、
ひとり楽しむ。〔悲・一九一〕

などと京子を詠んだ歌は多い。

明治四五年四月、京子は五歳のときに父の啄木を失い、その年の六月一四日に妹の房江が千葉県安房郡北条町（現、館山市）八幡で生まれた。九月にはそこを発ってともに母方の祖父、堀合忠操のもとに引き取られて函館市富岡町で育てられた。

やがて函館女子小学校に入学、卒業後はミッションスクール遺愛

女学校に進学したが、頭脳明晰、自由奔放で、両親を思慕する詩や短歌を地元の新聞に発表、作歌は終生つづけた。在学中に北海タイムス記者の須見正雄を熱愛、卒業の翌年、大正一五年（一九二六）に結婚し、正雄が石川家に入籍、函館市相生町に住んで、昭和二年（一九二七）四月には長女の晴子を、同四年一月には長男の玲児を生んだ。間もなく二人は上京し、ともに消費組合活動にたずさわり、また啄木研究雑誌「呼子と口笛」を創刊して啄木文学の普及に努めた。この雑誌は、正雄を編集発行人として、昭和五年に五冊、翌六年に九冊発行された。啄木の妹の三浦光子や土岐善麿らが執筆していて価値があるほかに、多数の無名の投稿者がいて、啄木文学の受容史を探る上でも価値がある。

京子は妊娠中の昭和五年一二月六日、急性肺炎のため二四歳で世を去った。葬儀は、啄木の友人である土岐善麿の生家、東京浅草松清町（現、台東区西浅草）の等光寺で行なわれた。

石川真一（いしかわ　しんいち）

〔概括〕啄木の長男。

〔人物〕明治四三年（一九一〇）一〇月四日に東京帝国大学医科大学附属病院産婦人科分室で生まれた。同日付の宮崎郁雨に宛てた書簡で啄木は、

真白なる大根の根のこゝろよく肥ゆる頃なり男生まれぬ

と歌を詠み、名前について、

社の編集長の名を無断で盗んだのだ、肥満した、さうして気持のいい位男らしい人だから、おれの子供もさうなつてくれると可い

と記している。しかし、真一のその後の生育は思わしくなく、一〇月二五日付の加藤正五郎宛の書簡では、

退院後母子共に何となく健康佳良ならず医者に見せ候ところ脚気の由にて乳を飲ませることを禁ぜられ両方共服薬の結果、両三日前より大いに快復いたし、も早心配もなくなり候に付御安心被下度候

と書いている。一旦は快復に向かったようであるが、一〇月二八日の午前零時過ぎに死去した。二八日付の妹の石川光子に宛てた書簡には、

昨夜は夜勤で十二時過に帰つて来ると、二分許り前に脈がきれたといふ処だつた、体はまだ温かかつた、医者をよんで注射をさしたがとうとう駄目だつた、真一の眼はこの世の光を二十四日間見た丈で永久に閉ぢた

と書いている。

啄木は真一の出産費用を捻出するため、真一の誕生した一〇月四日に東雲堂の主人、西村陽吉と出版の契約をし、その後、真一の追悼歌八首を末尾に加えて『一握の砂』は四三年一二月一日に刊行された。

この歌集の初めの、宮崎郁雨と金田一京助に対する献辞につづく、

また一本をとりて真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生まれたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

という真一への献辞や、末尾に加えられた

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ児を抱けるかな〔握・五四四〕

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな〔握・五四七〕

かなしくも
夜明くるまでは残りゐぬ
息きれし児の肌のぬくもり〔握・五五一〕

などの八首の追悼歌には、啄木のいたましい父性愛があふれている。

真一の葬儀は、啄木一家が間借りしていた新井家（床屋「喜之床」）の菩提寺、浅草永住町（現、東京都台東区西浅草）の了源寺で行なわれた。

石川節子（いしかわ　せつこ）

〔概括〕啄木の妻。

〔人物〕明治一九年（一八八六）一〇月一四日、岩手県南岩手郡上田村（現、盛岡市上田）に父堀合忠操と母トキの長女として生まれた。戸籍名はセツ。父の忠操は郡役所に勤めていて、当時は兵事主任兼学務係をしていた。家庭は比較的に裕福だったらしい。明治二六年四月、盛岡第一尋常小学校（後の仁王小学校）、盛岡高等小学校を経て、三二年にミッションスクールの私立盛岡女学校（現、盛岡白百合学園高校）に進学、三五年の春に卒業した。啄木と知り合っ

たのは盛岡女学校に通うようになって間もない、明治三二年ごろらしい。父の忠操は啄木との交際に強く反対し、監禁騒ぎにまで及んだ。啄木が文学に凝り欠席が多く、成績不良であり、からだが弱いというのが反対の理由であったが、どこまでも結婚をあきらめない節子の一途さや、子どもをかばう妻トキの情愛、それに結婚を許さないと二人が思いつめて大事を引き起こしかねないという節子の叔母の説得もあって、忠操はやむなく結婚を承諾したらしい。

節子は、結婚する前の三七年四月から一年間、岩手郡滝沢村の篠木小学校の代用教員となり裁縫を担当した。そして三八年五月一二日、啄木との結婚届が盛岡市役所に提出された。詩集刊行のために前年の一〇月から上京して東京に滞在していた啄木は、父が宝光寺住職を罷免されたことを知っての苦悩もあってか、帰郷の途中、仙台に下車して日を過ごして、結婚式に出席しなかった。啄木の不実を非難する者が多かったが、節子は毅然として式に臨んだという。

結婚後は盛岡市内に新婚生活を送ったが、収入のない生活で、質屋通い、借金、内職などに苦闘しなければならなかった。この窮状を見かねた節子の父の忠操は一〇〇円の大金を渡している。

三九年二月に節子は啄木、しゅうとめのカツとともに渋民村に移って間借り生活を始めた。そして、この年一二月二九日に長女の京子を盛岡の実家、堀合家で出産、四〇年二月に子を連れて渋民村に赴いた。四月二一日、啄木は渋民尋常高等小学校を免職となり、一家は離散となり、啄木は北海道へと発ち、節子と京子は盛岡の実家に再びもどった。

四〇年七月、啄木は函館区立弥生尋常小学校の代用教員の職を得て、函館に母のカツ、妻の節子、娘の京子を迎えるが、間もなく札幌、小樽と職場を変え、四一年一月には釧路に単身で赴任した。

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな（握・三六一）

は、その時のことを歌っている。

その年の四月には職を捨てて上京した。このように次々と職場を変えた啄木は収入も少ない上に、金を家に入れなかったから、節子はカツや京子と極貧の生活を送らねばならなかった。

節子は、啄木の上京後は、函館区立宝尋常高等小学校の代用教員となって、その薄給でようやく家計を支えた。

四二年六月に節子は宝尋常高等小学校を退職し、宮崎郁雨に伴われて上京、啄木とともに東京本郷弓町の理髪店、喜之床の二階での間借り生活に入るが、節子は結婚以来の長期にわたる労苦で衰弱し、

しゅうととの葛藤も高まって、一〇月二日、京子を連れて家出し、盛岡の実家に帰った。金田一京助と恩師の新渡戸仙岳の尽力で、節子は同月二六日に帰宅したが、この事件は啄木に大きな衝撃を与えた。

ひとところ、畳を見つめてありし間の
　その思ひを、
妻よ、語れといふか。〔悲・一六四〕

放たれし女のごとく、
わが妻の振舞ふ日なり。
　ダリヤを見入る。〔悲・一七〇〕

などの歌はその頃の作である。

四三年一〇月四日に長男の真一を出産したが、二七日に亡くなった。

出産後の節子は体調がすぐれず、翌四四年七月二八日に青山内科における診察で肺尖カタルと診断され、伝染の危険ありとして炊事を禁じられた。

なお、四四年三月には、節子の父の忠操が函館にある樺太建網漁業水産組合連合会に就職したため、函館に移住する一家を見送るために盛岡の実家に帰りたいと頼んだが、前々年秋の節子の家出事件に懲りた啄木はこれを許さず、トラブルとなり、そのため啄木は彼女の実家である堀合家と義絶した。

この年の八月七日には本郷弓町の床屋、喜之床の二階を結核という病気を嫌われて立ち退きを迫られた啄木一家は、小石川区久堅町の借家に転居し一家を構えることができたが、これも宮崎郁雨の援助によるものであった。

ところが、九月には節子に宛てた手紙をめぐるトラブルで、函館時代以来、肉親もできないような多大の世話を受け、節子の妹のふき子の婿でもある宮崎郁雨と義絶した。

四五年一月になってカツの容態が悪化し、近所の開業医によって肺結核と診断され、三月七日に死去。つづいて啄木も四月一三日に死去した。啄木の遺骨は、節子の意思により、翌年三月に函館に移し、立待岬に墓地を求めて葬られた。

啄木が亡くなったとき、節子は肺結核を病んでいた上に妊娠八か月の身重であったので、啄木の妹、光子の紹介で知った婦人伝道師サンダーの紹介で、聖路加病院で治療を受けた。この病院は、当時はアメリカ人が経営しており、無料の治療も行なっていた。

また、サンダーの紹介で千葉県安房郡北条町（現、館山市）八幡

に行き、そこに滞在中のコルバン夫妻の世話になることになった。節子と娘の京子は片山家の離れに落ち着き、夫妻から下宿代、医療費、パン、日に三合の牛乳とスープを供されて六月一四日に無事に房江を出産することができた。しかし夫のコルバンが中風をわずらい、その転地療養のために夫妻が軽井沢に移ることになって、節子たちは援助を受けられなくなったので、九月四日にここを去って節子の両親の住む函館に赴いた。この時の旅費を出してくれたのはサンダーであった。

函館では宮崎郁雨の世話で実家の近くに間借りし、実家や土岐哀果の援助を頼りに母子三人で暮らしたが、翌大正二年になると節子の病状が進み、函館の豊川病院に入院、母トキや妹孝子の手厚い看護も空しく、大正二年（一九一三）五月五日、二人の子を遺して二八歳で亡くなった。法名は貞安妙節信女という。

函館の立待岬にある「啄木一族の墓」は、宮崎郁雨によって大正一五年八月一日に建立された。

なお、啄木の日記の原本は大学ノートや博文館の当用日記などに書かれていたが、啄木は死ぬ前に節子に焼却するように言ったらしい。しかし、節子は、「啄木は焼けと申したんですけれど、私の愛着が結局そうさせませんでした。」と言って、妹ふきの婿である宮崎郁雨に託した。郁雨はこれを「永久保存」を条件として函館市立図書館に寄贈した。啄木の日記は現在、同図書館の啄木文庫に保管されている。

節子をはじめ堀合家の人々ことについては、忠操の息子で、節子の弟にあたる堀合了輔の書いた『啄木の妻節子』（洋々社　昭和四九・五）が詳しい。

石川房江（いしかわ　ふさえ）

〔概括〕啄木の次女。

〔人物〕明治四五年（一九一二）六月一四日、啄木が死んだ二か月後に、千葉県安房郡北条町（現、館山市）八幡の片山家の離れで生まれた。安房で生まれたので房江と名付けられた。母の節子は宣教師コルバン夫妻の保護のもとに結核療養中であった。しかし、コルバン夫妻が軽井沢へ去り、保護を受けられなくなったので、九月四日にここを去って節子の両親の住む函館に赴いた。翌二年に母の節子と死別し、姉の京子とともに、函館市富岡町に住む母方の祖父堀合忠操の家で育てられた。小学校は亡き父の啄木が代用教員を勤めたこともある弥生尋常小学校で学び、聖保禄女学校を卒業したが、姉の京子とは対照的に口数の少ない、几帳面で裁縫の好きな娘だったという。

病弱で家にいたが、間もなく結核を発病し、転地療養を勧められ

て姉夫妻の上京に従って北海道を離れ、茅ヶ崎市の南湖院に入院して治療に努めたがかいなく、昭和五年（一九三〇）一二月一九日、一九歳で肺結核のため世を去った。葬儀は父、啄木の友人である土岐善麿の生家である東京浅草松清町（現、台東区西浅草）の等光寺で行なわれた。

石川正雄（いしかわ　まさお）

〔概括〕啄木の娘、京子の婿。

〔人物〕明治三三年（一九〇〇）二月二六日、函館に生まれた。旧姓、須見。大正の初めに新聞記者となり、北海タイムス社、函館毎日新聞社に勤務した。大正一五年（一九二六）四月一七日、啄木の長女の石川京子と結婚し、石川家に入籍した。函館市相生町に住み二人の間に昭和二年（一九二七）四月には長女の晴子、同四年一月には長男の玲児をもうけた。昭和四年（一九二九）に演劇研究のため新聞社をやめてフランスに渡り、翌五年三月に帰国、一家は東京に転住し、呼子と口笛社を設立、夫婦協力して啄木研究雑誌「呼子と口笛」を昭和五年八月に創刊、昭和五年に五冊、翌六年に九冊発行した。この雑誌は正雄が編集発行人となって刊行され、啄木の妹の三浦光子や土岐善麿らが執筆していて価値がある。そのほかに多数の無名の投稿者がいて、啄木文学の受容史を探る上でも価値がある。しかし、昭和五年一二月六日に妻の京子が急性肺炎で死去したため、昭和六年九月発行の第二巻九号で終刊した。

その後。正雄は啄木の作品の出版や著述に従事、『啄木詩集』（月曜書房　昭和二二・一）、『石川啄木日記』全三巻（Ⅰ　昭和二三・一一）・Ⅱ　昭和二三・一二・Ⅲ　昭和二四・三）、『啄木日記』（河出書房　昭和三〇・三）、『啄木のうた』（社会思想研究会出版部昭和三六・一）、『定本石川啄木全歌集』（河出書房新社　昭和三九・七）等の刊行にたずさわり、年譜や解説などを担当、自身でも『父啄木を語る』（三笠書房　昭和一一・四）を出版した。

『石川啄木日記』は啄木の死後、妻の節子が宮崎郁雨に託した。函館市立図書館の主事であった岡田哲蔵が啄木の遺稿や日記等の寄贈または寄託を郁雨を通じて節子に懇請していたが、節子からその処理を任された郁雨がこれを昭和一四年（一九三九）七月七日に「永久保存」を条件として市立函館図書館に寄贈、啄木文庫に保管されていたが、郁雨や岡田は日記は個人の私的な記録だとして日記の公刊は拒否しつづけた。これを正雄が世界評論社から『石川啄木日記』全三巻として昭和二三年一〇月から翌年三月にかけて彼の編集で初めて活字の形で公開し、啄木の生活や思想を知る上で多大の貢献をした。この日記は近代日記文学の傑作の一つでもある。

正雄は昭和四三年（一九六八）四月一〇日に六九歳で世を去った。

伊東圭一郎（いとう　けいいちろう）

〔概括〕高等小学校から中学校四年まで同級、中学校ではユニオン会のメンバーで、啄木の晩年まで親しく交わった友人。

〔人物〕代用教員・東京朝日新聞社社員・岩手県立図書館長。明治一八年（一八八五）一月二四日、盛岡市加賀野に生まれた。父の圭介は自由党の代議士であったが、圭一郎が一一歳のときに死別した。

啄木とは盛岡高等小学校、予備校の学術講習会（後の江南義塾）、盛岡中学四年生まで同級で、親しく交わった。中学三年生のときに啄木が主唱して作った「ユニオン会」でもそのメンバーとなって英語の学習をし、その後で議論を戦わせた。啄木が盛岡中学を中退して上京する前夜には伊東の家でユニオン会の送別会が開かれた。この会は明治三八年（一九〇五）八月、この頃の啄木の行動に対して忠告文を送り、やがて会から除名したが、圭一郎だけはその後も啄木と交際をつづけた。

彼は中学校卒業後、小学校の代用教員を勤め、同三八年に上京して国民英学会で学んだ後、「中外商業新報」などに勤務、大正四年（一九一五）東京朝日新聞社に移り、通信部長、調査部長などを勤めた。昭和二三年から二五年にかけて岩手県公安委員、二七年から三一年まで岩手県立図書館長をつとめたのち、三二年一月二四日に肺炎のため七二歳で世を去った。

東京で彼は明治四一年六月一三日と四二年一月六日、四四年二月一六日の少なくとも三回、啄木を訪ねていることが啄木の日記からわかる。啄木は四四年二月一六日の日記に伊東のことを「三年あはぬ間に口髯を立てゝ洋服をきてゐた。」と書いている。伊東の著書に『人間啄木』（岩手日報社　昭和三四・五）がある。

『石川啄木全集』には啄木が伊東に宛てた書簡三通が収められている。

伊藤左千夫（いとう　さちお）

〔概括〕啄木とは森鷗外邸で開催された観潮楼歌会の席で会った。左千夫はアララギ派、啄木は明星派と立場を異にしたが、左千夫は啄木の歌を評価し、啄木没後の追悼会にみずから進んで出席し、啄木について話をした。

〔人物〕乳業家。歌人。小説家。元治元年（一八六四）九月一八日、千葉県山武郡殿台村（現、成東町）の農家に生まれた。法律を学んで政治家になることを志して、明治一四年（一八八一）四月、明治法律学校（現、明治大学）に入学したが、間もなく眼を病み、中退して帰郷した。やがて再度上京して牧場や牛乳店で働いた後、同二二年二六歳で独立し、牛乳搾取販売業を始めた。三〇歳ごろから和歌に関心を持つようになり、歌会に出ていたが、正岡子規が三一年一

月に新聞「日本」に発表した歌論「歌よみに与ふる書」を読んで感動、病床の子規を根岸の自宅に訪れて入門、子規庵の歌会に出席して作歌に励んだ。子規の没後は、根岸短歌会の機関誌「馬酔木」を三六年（一九〇三）に創刊し、さらに四一年（一九〇八）には「アララギ」を創刊、「万葉集」を尊重し、写実的な詠風で、雑誌「明星」によった浪漫主義的な傾向の新詩社と対峙する結社に発展させた。四〇歳ごろからは「野菊の墓」「春の潮」などの小説も書いた。

啄木との出会いは、森鷗外が当時の歌壇で「明星」と「アララギ」が大きく対立していたのを接近させようとして明治四〇年に始めた観潮楼歌会の席であった。この会は、新詩社の代表として与謝野鉄幹、アララギ派の代表として伊藤左千夫、それの中間にある者として佐佐木信綱の三人を招き、それに鷗外も加わり、四人を中心に開かれた。鉄幹に伴われて出席した啄木は、常連として出席していた左千夫とそこで会っている。

その時の印象を啄木は、

左千夫は所謂根岸派の歌人で、近頃一種の野趣ある小説を書き出したが、風采はマルデ田舎の村長様みたいで、随分ソソッカシイ男だ。年は三十七、八にもならう。

と明治四一年五月二日の日記に記している。この年、左千夫は数えの四五歳であった。この年齢を除けば、啄木の日記の文章は左千夫をかなり的確にとらえているといえよう。

左千夫と啄木が顔を合わせたのは明治四一年五月から翌年一月にかけて六回であったと思われるが、左千夫は

石川君ととは鷗外博士宅で毎月歌会があった頃、幾度も逢った筈である。処が八度の近眼鏡を二つ掛ける吾輩は能く見覚えることも出来なくて終った。

と書いている。確かに左千夫はひどい近眼であった。左千夫は、啄木の短歌に強い印象を受けたらしく、啄木の没後に、「『悲しき玩具』を読む」を「アララギ」（大正元・八）に発表して、「石川君の歌を見ると石川君其人が如何にも能く現はれて居る」と言い、七首を抜いて、「以上のやうな歌は非常に面白く佳作であると思ふ」とほめ、「吾輩は茲で、アララギ同人に忠告を試みたい。我諸同人の歌は、概して形式を重んじ過ぎた弊が多いやうであるから、石川君の歌などの、とんと形式に拘泥しない、粉飾の少しもないやうな歌風を見て、自己省察の料に供すべきである。」と述べている。

この頃、左千夫門下の斎藤茂吉や島木赤彦など「アララギ」の若い世代は、時代の影響を受けて象徴的な歌風への接近を見せ、歌に「叫び」を重視する左千夫と大きな隔たりを見せていたので、左千夫は茂吉や赤彦らよりも、むしろ啄木の歌に親しみを感じたのだと思われる。左千夫が大正二年二月発行の「アララギ」に発表した

「静なる家」八首中の

物忘れしたる思ひに心づきぬ汽車工場は今日休みなり

などの歌には作者の新しい狙いが感じられ、啄木の言う「忙しい生活の間に心に浮んでは消えて行く刹那々々の感じを愛惜する」（「歌のいろいろ」）歌風への接近がうかがえる。

左千夫はこれを書いてから一年後の七月三一日に五〇歳で没したが、土岐哀果は「左千夫氏の訃」（「読売新聞」大正二年八月一日）に、啄木が死んだ翌年四月一三日に行なわれた追悼会について「読売新聞」に案内を掲載したときのことを、

その日の午後に一通のハガキが来た。見ると伊藤左千夫氏ので当日出席したいといふ文面である。僕はすこしあはてた。実は啄木の先輩や旧知には、改めて案内状を出すはずにして、左千夫氏にも無論出すつもりであつた。その先を越されたので面くらつたわけであるが、同時に、左千夫氏の人格がはっきり想像しうるやうに思つた。

と書いている。当日、浅草の等光寺で行なわれた追悼会で、哀果の要請で左千夫は金田一京助、与謝野鉄幹、平出修とともに談話をしている。

左千夫は大正二年（一九一三）七月三〇日、脳溢血のため五〇歳で世を去った。全集としては『左千夫全集』全九巻（岩波書店　昭和五一～五二）がある。

岩崎正（いわさき　ただし）

〔概括〕啄木の函館時代の友人。

〔人物〕歌人。明治一九年（一八八六）五月四日、青森県八戸に生まれた。筆名、白鯨、琺瑯閣。八戸の中学校に在学中に裁判所判事であった父親が死んだため、長男である彼が、母、弟、妹ら一家の生活を支えることになり、中学校を中退し、函館に移り住んで、函館郵便局に為替係として勤務し、父の恩給と彼の薄給とで苦しい生活をしのいだ。

岩崎は早くから「明星」に歌を発表するなどして、短歌に長じ、苜蓿社の中心的な同人であった。啄木との交遊は、明治四〇年（一九〇七）五月に啄木が函館入りしてから始まった。啄木は、日記の中に挿入された、この年九月六日に書いた「函館の夏」という函館に着いた頃のことを記した文章の中で、

岩崎君は松岡君より少き事十歳、恰も予と同齢なり。君が十六の時物故したる父は裁判所判事なりしといふ、八戸の中学にありて父君の死に逢ひ爾後郵便局に入りて今現にこゝの局の二番

口に為替の現業員たり、青くして角なる其顔、奇にして胸の底より出づる其声、一見して其率直なる性格を知る、口に毫も世事を語らず、其歌最も情熱に富み、路上をゆくに時々会心の歌を口ずさむ癖あり。

と記している。

また翌年七月七日付の岩崎宛の書簡では、

僕にとつて、小説は僕自身の告白だ（広い意味に於て）そして人間の虚弱を剥いでしまふ為の唯一の武器だ。現状を打破して新世界を作る為の唯一の武器だ。

と自身の文学観を吐露しており、年齢や流浪の境遇を同じくし、浪漫的な心情でも一致した二人が心を割って親しく交遊したことをうかがわせる。

目を閉ぢて
傷心の句を誦してゐし
友の手紙のおどけ悲しも〔握・三一〇〕

おそらくは生涯妻をむかへじと
わらひし友よ
今もめとらず〔握・三一二〕

は岩崎がモデルであると考えられている。

一方、岩崎は後に琺瑯閣の筆名で「函館新聞」に「苜蓿社と其周囲」（大正二年一月一九日～二月二日）という回想を連載したが、そこでは、

啄木と私は好く大森浜へ行つた。啄木の歌集にある海岸や砂原の歌は皆大森浜の歌だ。そして『一握の砂』も大森浜の砂である。然し、其の頃は未だ啄木は歌を作らなかつた。其頃の啄木は何も彼も行き詰つた人であつた。

と言っている。

岩崎は明治四五年ごろから結核をわずらい、郵便局を退職して療養につとめたが、そのかいなく、大正三年（一九一四）九月五日に函館で二九歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が岩崎に宛てた書簡二〇通が収められている。

植木貞子（うえき　ていこ）

〔概括〕啄木が北海道から上京した当時、愛人関係にあった女性。

〔人物〕明治二三年（一八九〇）生まれ。富山利三郎と植木タキの間に生まれた。戸籍名はセン、通称は貞子。明治三八年四月、新詩

社演劇会が江東の伊勢平楼で開催され、高村光太郎（砕雨）作「青年画家」の劇中の日本舞踊の踊り手として、藤間流舞踊の師匠の娘、貞子が呼ばれ、出演した。翌月の「明星」の劇評に、「半玉が余り本物でツイ川向ふの柳橋辺を実際見る様な気が致しました。」と書かれるほどの好評を博した。

この時、上京中の啄木は鴬の笛を吹く役で裏方を勤め、これが縁で二人は知り合った。四一年の冬、釧路に単身赴任中の啄木に貞子は白梅の花を入れた長い手紙を送るなど文通がつづいた。

同年三月に啄木は家族を函館に残して上京したが、貞子は五月に啄木の下宿を訪ね、その後はたえず訪問したり手紙を送ったりした。啄木も貞子の家を訪れている。啄木は貞子をモデルにした小説の執筆を企て、執筆に役立てようと東京の言葉や風俗を習ったりした。彼の現実逃避をして半独身の生活を楽しむ気分や、一九歳の貞子のひたむきさなどから二人が深い関係に陥ったことがこの年の書簡や啄木の日記からうかがえる。

君来るといふに夙く起き
白シャツの
袖のよごれを気にする日かな〔握・四七七〕

というような状態がつづいたが、窓の下から「兄さん兄さん」と呼んだり、家まで送ってやらぬと泣いたりするので、啄木はてこずるようになり、別れの手紙を送った。すると、怒った貞子は八月八日の夜、啄木の留守に上がりこんで、日記と小説「天鵞絨」の原稿、歌稿一冊を持ち去ってしまった。その日記には彼女を罵倒してあったところから、貞子は怒って、欲しかった取りに来いと置き手紙して帰ったのであった。一九日になって彼女は日記などを持って泣いて返しに来たが、七月二九日から三一日までの悪口の書かれた部分は引きちぎられていた。こうして二人の関係は終わった。これらのことが、日記の中の、「十二日間の記」に見える。

しかし翌年の四月八日に啄木は北原白秋と浅草の花街に遊び、当時、芸者となっていた貞子と一夜を共にしている。

その後、貞子は昭和一二年には旧満州の大連の料亭「淡月」で働いており、三児の母となっていたことがわかっている。昭和四一年（一九六六）一月四日、七七歳で世を去った。

上田敏（うえだ　びん）

〔概括〕啄木の処女詩集『あこがれ』に序詩「啄木」を書いた詩壇の権威。

〔人物〕詩人、評論家、英・仏文学者、京都帝国大学教授。初期に

は柳村と号した。明治七年（一八七四）一〇月三〇日、東京築地に生まれた。第一高等学校を経て明治二七年（一八九四）に東京帝国大學英文科卒。東京高等師範学校教授、東大講師、京大教授を歴任。一高在学中に島崎藤村らの「文学界」同人となり、東大入学とともに「帝国文学」の創刊に参画、第一期の編集委員となり、同誌上にヨーロッパ各国の文芸思潮の紹介を連載し、評論集『最近海外文学』『文芸論集』『詩聖ダンテ』などを相ついで刊行して文壇に新知識をもたらした。この後、フランス象徴主義の移植を図り、雑誌「明星」を中心に、ベルレーヌ、ボードレールらの詩を意欲的に翻訳紹介し、明治三八年（一九〇五）一〇月、不朽の名訳詩集『海潮音』を刊行、詩歌壇に決定的な影響を与えた。

啄木の処女詩集『あこがれ』には敏の序詩「啄木」が載せられているが、これは「明星」を通じての親交と、敏の啄木に対する高い評価を物語るものであり、ロマン派詩人として立つことを目指していた二〇歳の啄木に大きな喜びと名誉を感じさせたことと思われる。

しかし、啄木は間もなく社会主義に関心を寄せ、自然主義文学や口語自由詩に眼を向けるようになって、

象徴詩といふ言葉が、其頃始めて日本の詩壇に伝へられた。私も『吾々の詩は此侭では可けぬ』とは漠然とながら思つてゐたが、然し其新しい輸入物に対しては『一時の借物』といふ感じがついて廻つた。

というようになって、啄木は敏から離れてゆく。

敏は外遊ののち、明治四二年（一九〇九）に京都大学教授となった。京都に移っても鷗外とともに「三田文学」の顧問などとして文壇に影響を与えたが、大正五年（一九一六）七月九日、上京中に尿毒症を発し、四一歳で世を去った。全集としては、『定本上田敏全集』全一〇巻（教育出版センター　昭和五三～五六）がある。

梅川操（うめかわ　みさお）

〔概括〕啄木が釧路時代に交際した女性。

〔人物〕明治一八年（一八八五）三月一八日、岩手県で生まれた。幼いうちに函館に移り、私立函館大谷女学校に学んだ。その後、家庭の事情で釧路に移り、一旦は函館にもどって造花の教師をしていたが、函館の大火に遇い釧路にもどって釧路共立笠井病院の薬局助手として勤務していた。啄木は明治四一年（一九〇八）一月に小樽を発って釧路に単身で赴任したが、その下宿の向かい側に笠井病院があり、この年の三月、カルタ会でいっしょになった縁で、梅川の訪問をうけた。小菅まさえという友達に頼まれての訪問だったが、用件のあとで梅川は身の上話もしていった。三月一八日の日記に啄木は、「年は二四で、男を男とも思わぬお転婆な娘だ。」と書いてい

る。一七日の日記には、彼女が燃えるような造花のバラ一輪を持って来たとあり、二一日には夜中の一時に青ざめた顔をして、髪を乱して啄木の下宿を訪れたことが記されている。

わが室に女泣きしを
小説のなかの事かと
おもひ出づる日〔握・四一三〕

の歌はその頃の梅川とのことを追想した作である。

啄木は単身でこの年の四月五日に釧路を発って上京したが、四月二九日に電車を待っていた啄木は後ろから声をかけられる。彼女は造花の勉強に上京して来たのであった。二人は上野の山を歩いてから別れたことが、二九日の日記からわかる。

梅川は東京で佐藤巌（衣川）と結婚したが、やがて離別し、釧路にもどって大正一二年（一九二三）に美容院を開いた。昭和四二年（一九六七）九月二五日に八二歳で世を去った。

上野サメ（うわの　さめ）

〔概括〕啄木が渋民小学校代用教員であったころに同僚であった女教師。

〔人物〕明治一六年（一八八三）三月一一日に岩手県南岩手郡雫石村（現、岩手郡雫石町）に父広安の三女として生まれた。父は県議会議員をつとめ、畜産事業に功績を挙げた。明治三四年に私立盛岡女学校（現、盛岡白百合学園高校）を卒業、岩手県師範学校に進み、三七年三月、同校女子部を卒業、四月に渋民尋常高等小学校訓導となり、三九年九月まで同校に在任した。三七年の秋に啄木は堀合節子と撮った写真に「我心二つ姿とならび居て君がみもとにとはに笑ままし」という歌を書いてサメに贈っている。節子は盛岡女学校でサメの一級下で、親しい間柄であった。啄木と節子の結婚式の世話をした上野広一はサメの甥である。この年、サメが渋民小学校に着任してから啄木はしばしば小学校を訪れたらしい。伊東圭一郎宛の明治三七年六月二日付の書簡にサメと親しく交わっていることを報じている。啄木が渋民小学校の代用教員に任じられたのは三九年四月で、その年の九月に上野は岩手郡本宮小学校に転任になったから、いっしょに勤めたのは六か月に過ぎないが、その転任について、三九年一〇月四日の日記に、

予の親愛なる女友上野さめ子女史は、本宮村に転任になった。四日、告別式をあげた。生徒は皆涙ぐんで居た。予も心に泣いた。送らるる人も涙であった。――女史は二ヶ年半の間、この渋民の天地に於いて、『新婦人』の典型を示してくれた人であ

る。真に立派な、男優りな、見識の高い、信仰の厚い人であった。

と記している。

わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな〔握・二四〇〕

わが村に
初めてイエス・クリストの道を説きたる
若き女かな〔握・二四三〕

など四首の歌は上野を詠んだ歌である。

上野は、明治四三年に京都帝国大学文学部を卒業し、後に第三高等学校の教授となった滝浦哲弥と結婚し、一時教職を離れたが、東京市谷中尋常小学校の訓導となった。その後、京都に移り、第三高等学校の教授をつとめながら青少年の指導にあたった夫の滝浦をよく助け、昭和一二年（一九四七）に夫が亡くなってからは、京都で私立恵美幼稚園園長として経営にあたり、昭和三九年（一九六四）六月二三日、八二歳で没した。『石川啄木全集』には啄木が彼女に宛てた書簡三通が収められている。

及川古四郎（おいかわ　こしろう）

〔概括〕啄木の文学者になろうという夢を強めさせた盛岡中学校の上級生。

〔人物〕海軍軍人。明治一六年（一八八三）二月八日、医師の子として父の赴任先の新潟県長岡で生まれ、幼時に両親とともに盛岡にもどった。盛岡中学校を卒業、海軍士官を志して海軍兵学校に入学、同校卒業後、ただちに日露戦争に出征、その後、東宮御所付武官、軍艦鬼怒および多摩艦長、海軍大将などを歴任し、昭和一五年（一九四〇）の第一次近衛内閣には海軍大臣として入閣、一九年には海軍軍司令部部総長に任じられた。

盛岡中学校で及川は、金田一京助と同じく啄木より二年上級であった。軍人志望でありながら短歌を詠んだり文章を書いたりする文学青年でもあった及川を啄木は尊敬し、二年生ごろまでは啄木も軍人を志望していた。

軍人になると言ひ出して、
父母に
苦労させたる昔の我かな。〔悲・一一一〕

うつとりとなりて、
剣をさげ、馬にのれる己が姿を
胸に描ける。〔悲・一一二〕

はその頃のことを歌ったものである。

啄木は及川から与謝野鉄幹の『東西南北』、土井晩翠の『天地有情』、薄田泣菫の『暮笛集』、泉鏡花の『湯島詣』などの新刊書を借りてむさぼり読み、文学者として立とうとする意志を強めた。

及川の勧めで、既に新詩社の社友になっていた金田一京助と交わるようになったが、及川はやはり同級生の野村長一（胡堂）にも啄木の指導を頼んでいる。

及川は昭和三三年（一九五八）五月九日に七六歳で世を去った。

大島経男（おおそま　つねお）

〔概括〕函館の文学グループ苜蓿社を主宰し、雑誌「紅苜蓿」の編集も担当、啄木が渋民から函館に移ったときに、啄木にその編集の仕事を譲った人物。

〔人物〕啄木の函館時代の友人。明治一〇年（一八七七）二月一九日、北海道日高国静内（現、静内郡静内町）に生まれた。号は流人、野百合。札幌農学校予科を経て、東京の第一高等学校に進んだが、病気のために退学し、軍人であった父の任地の函館で療養した。療養中にキリスト教の信仰を深め、病気快復ののちは遺愛女学校、函館英語学校、靖和女学校で教えた。このころ新詩社に加わり、雑誌「明星」に詩や短歌を発表し、またワグネル（リヒアルト・ワグナー）の楽劇を紹介するなどした。明治三九年（一九〇六）、函館における文学グループ苜蓿社の誕生に際してはその中心となり、翌年から発行されるようになった雑誌「紅苜蓿」の編集も担当した。しかし、教え子の石田松枝との結婚が破綻して、キリスト教会からも離脱して郷里の静内に帰った。啄木は明治四〇年九月二三日付の並木武雄宛の書簡の中で、

日高なるアイヌの君の
行先ぞ気にこそかかれ。
ひょろひょろと夷希薇の君に
事問へど更にわからず。
四日前に出しやりたる
我が手紙、未だもどらず
返事来ず。今の所は
一向に五里霧中なり。

アノ人の事にしあれば、
飄然と鳥の如くに
何処へか　翔りゆきけめ、
大したる事のなからむ。
とはいへど、どうも何だか
気にかゝり、たより待たるる。

と歌っている。

大島が函館を去る時に「紅苜蓿」の編集を任されたのが、創刊号に寄稿し、その縁で五月に函館に来たばかりの啄木であった。編集を引き継いだ啄木は熱心に編集に取り組んだが、八月二八日の函館の大火で啄木の小説「面影」の原稿を含む「紅苜蓿」八号の原稿が焼失、啄木が札幌に移ったために、「紅苜蓿」は第七号で終わった。啄木は「大島経男君は予らの最も敬服したる友なり。学深く才広く」と明治四〇年九月六日の日記に記している。直接に交際した期間は短かったが、その後も二人は文通を続けた。

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく
山に入りにき
神のごとき友〔握・三二四〕

は大島のことを詠んだ歌である。

大島は、その後、「北海道タイムス」電報主任、春秋書院『服部漢和大字典』編集主任などを勤め、昭和一六年（一九四一）八月二日に神戸で六五歳で亡くなった。

『石川啄木全集』には大島宛の啄木の書簡八通が収められている。

小笠原謙吉（おがさわら　けんきち）

〔概括〕啄木が詩集『あこがれ』や文芸雑誌「小天地」を刊行したころに親交のあった地元岩手県のの文芸家。

〔人物〕啄木が二〇歳のころに親しくした文芸家。筆名、迷宮、若菜。煙山村村長。明治一二年（一八七九）五月三日、岩手県紫波郡煙山村（現、矢巾町）に生まれた。盛岡高等小学校で啄木の一年先輩であった。二人が最も親しく交際したのは明治三八年（一九〇五）で、五月に啄木が処女詩集『あこがれ』を刊行し、九月に文芸雑誌「小天地」を編集発行した前後である。小笠原は「小天地」に「哀歌（友高橋白命をいたむうた）」一〇首を載せ、「岩手日報」に「『小天地』第一巻第一号を読む」を九月二七日から二一日にかけて三回に分けて連載している。

彼は啄木の没後「岩手日報」に「吁、石川啄木君」を明治四五年

五月三日から一五日にかけて七回にわたって連載し、死を悼んでいる。

小笠原は昭和一七年（一九四二）五月二一日に六四歳で没した。『石川啄木全集』に啄木が小笠原に宛てた書簡一八通が収められている。

岡山儀七（おかやま　ぎしち）

〔概括〕盛岡中学時代から親交があり、啄木が中学を退学した後も生涯にわたって交遊のあった友人。

〔人物〕盛岡中学時代の啄木の友人。筆名、残紅、不衣。明治一八年（一八八五）一二月九日、岩手県稗貫郡花巻町（現、花巻市）で、呉服商で後に貴族院議員となった伊藤儀兵衛の四男として生まれた。四歳のとき同じ町の岡山家の養子となった。明治三二年に盛岡中学に入学、三七年に同校を卒業して仙台の第二高等学校に進んだが、翌年に病を得て退学、療養の後、三九年に岩手毎日新聞社に入った。

岡山は盛岡中学では啄木より一年下級であったが、岡山が二年生のとき、級友の紹介で啄木を知り、短歌研究の会である白羊会の同人となり、交遊が始まった。校友会雑誌や「岩手日報」に啄木とともに残紅などの筆名で詩や短歌を発表し、啄木が中学を退学しても二人の交友はつづいた。

岩手毎日新聞社に入った岡山は、やがて主筆兼編集長となり、紙上で筆を揮い、「東京朝日新聞」編集長の佐藤北江や啄木から同紙に招かれたこともあったが、それを断り、大正一五年（一九二六）に退職するまで長くその任にあった。

田舎めく旅の姿を
三日ばかり都に曝し
かへる友かな〔握・一八四〕

は岡山が上京した折のことを歌ったものである。

岡山は、明治四三年に啄木が歌集『一握の砂』を刊行した際には「岩手毎日新聞」に九回にわたって紹介文と啄木の短歌を載せた。啄木が四四年一一月三日から一八日にかけて書いた随筆「平信—与岡山君書—」は「岩手毎日新聞」の岡山の筆になる社説を読んで書いたものであり、大逆事件を知った啄木の苦悩と岡山に対する友情が溢れている。岡山は大正一五年一〇月から昭和二年五月にかけて八回にわたり雑誌「共存共栄」に「啄木について思出す事共」を連載して啄木を偲んでいる。

岡山は昭和一八年（一九四三）一月二九日に五九歳で没した。法名、黙笑院不衣良説居士。句集に『岡山不衣句集』（昭和四〇）

がある。

『石川啄木全集』に啄木が岡山に宛てた書簡四通が収められている。

荻原井泉水（おぎわら　せいせんすい）

〔概括〕自由律俳句の推進者で、金田一京助の紹介で啄木を知り、彼の短歌を自身の主宰する雑誌「層雲」に掲載、五円の原稿料を送って啄木を喜ばせた。

〔人物〕俳人。明治一七年（一八八四）六月一六日、東京生まれ。本名、藤吉。東京帝国大学文科大学言語学科卒業。明治四三年（一九一〇）に翻訳『ゲェテ言行録』を処女出版した。このころ、河東碧梧桐らの新傾向俳句運動に共鳴、四四年に俳句雑誌「層雲」を創刊してその運動の一翼を担った。やがて新傾向から自由律への展開を示し、碧梧桐らと別れて、感動を自由なリズムで書きとめる自由律俳句を提唱し、そのリーダーとなり、その門下から尾崎放哉、種田山頭火らが出た。句集に『原泉』（昭和三五）、『大江』（昭和四六）などがある。昭和四〇年に日本芸術院会員となった。

啄木との縁は、東京帝大言語学科で金田一京助と同級生であったところから、金田一から啄木の話を聞いて彼に寄稿を求めたもので、「或る日の歌」一一首が「層雲」の明治四四年七月号に掲載された。井泉水の『春秋』（昭和三五年一〇月）によると、金田一から啄木の窮状を聞いて啄木にだけ五円の原稿料を送ったという。その時に啄木がうれしがったことは金田一も「井泉水・啄木の接触」（「層雲」昭和三八年九・一〇月合併号）に書いている。

井泉水は昭和五一年（一九七六）五月二〇日に九三歳で世を去った。『石川啄木全集』には啄木が井泉水に宛てた書簡一通が収められている。

小国露堂（おぐに　ろどう）

〔概括〕函館の大火で啄木が路頭に迷ったときに、北門新聞社、小樽日報社に就職を世話した人物。

〔人物〕新聞人。明治一〇年（一八七七）一〇月一二日、岩手県下閉伊郡宮古町（現、宮古市）の田代家に生まれた。本名、善平。後に同じ町の小国家の養子となった。明治三八年に北海道に渡り、函館新聞社、札幌の北門新聞社、小樽日報札幌支社、釧路新聞社などを転々とした。昭和二年（一九二七）に宮古に帰り、その翌年から同一六年まで「宮古新聞」に主筆兼発行人をつとめた。

啄木との関係としては、明治四〇年（一九〇七）八月の函館の大火で路頭に迷っていた啄木を、詩人で北海道庁に勤めていた向井永太郎に頼まれて札幌の北門新聞社に校正係として入社させ、二週間後には小樽日報社に記者として転勤させている。小国は啄木が同郷

人ということからこのように親切に世話をしたのであろう。

初めて会って間もない頃から啄木は小国と社会主義について語り合うようになったらしく、啄木は明治四〇年九月二〇日付の岩崎正宛書簡には、「小国君は純正社会主義者に候へど赤裸々にして気骨あり真骨頂あり」と記し、翌二一日の日記にも、「小国君のいふ所は見識あり、雅量あり、或意味に於て賛同し得ざるにあらず、社会主義は要するに低き問題なり、然も必然の要求によって起れるものなりとは此夜の議論の相一致せる所なりき、小国君は我党の士なり、此夜はいと楽しかりき」とある。この小国の話と、その頃に小樽で聞いた西川光二郎などの社会主義の演説が、啄木がこの問題にふれた最初であった。

平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共産を主義とせりけり（握・三五五）

は小国を詠んだものである。

小国は昭和二七年（一九四二）二月四日、六六歳で世を去った。

尾崎行雄（おざき　ゆきお）

〔概括〕「憲政の神様」と称えられた自由主義政治家。啄木は詩集を刊行する前に、東京市長であった尾崎を東京市庁舎に訪ねて面会している。

〔人物〕日本近代の代表的自由主義政治家。安政五年（一八五八）一二月二四日に相模国（現、神奈川県）津久井郡の郷士の家に長男として生まれた。号、咢堂。慶応義塾を中退した後に新聞記者となり、明治一五年（一八八二）、立憲改進党創立に参画。同二三年の第一回総選挙に三重県から立候補して当選、以後二五回連続して当選し、代議士生活六三年に及んだ。三一年には大隈重信内閣の文相となったが、国民が主権を持ち、選挙によって国の元首を選ぶ共和制を日本もとるべきだとする演説が不敬と非難されて辞職。三三年の立憲政友会の創立に参加。同三六年から四五年にかけて東京市長を勤めた。大正二年（一九一三）の第一次護憲運動には犬養毅とともに桂太郎内閣打倒の陣頭に立ち「憲政の神様」と称された。その後も軍備縮小を唱え、昭和に入ってからは「翼賛選挙」を批判、軍国主義の台頭に警鐘を鳴らした。

明治三七年（一九〇四）一〇月、詩集刊行のために上京した啄木は、詩の原稿を持って市庁舎を訪問した。詩集出版の資金援助や出版社の紹介が目的であったらしい。その申し出はかなえられなかったが、尾崎は昼食を共にしてくれた。このことを故郷に帰って吹聴

したところ、当時、友人たちから借金を重ねて評判が悪かったので、「啄木は法螺吹きだ」とさらに悪評が広がったという。しかし、

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に会ひしに〔握・四七〕

の歌があり、詩集『あこがれ』の献辞に、

此書を尾崎行雄氏に献じ
併せて遥かに故郷の山河に捧ぐ

とある。また、啄木は長女の京子が生まれたとき、明治四一年一月三日の日記に「若し生れしが男なりせば、尾崎学堂先生の名を襲ひて『行雄』と名づくべかりしが」と記している。こういうことから見ると、啄木は当時、尾崎を深く敬愛し、実際に東京市庁に尾崎を訪問したものと思われる。

尾崎は昭和二九年（一九五四）一〇月六日に九八歳で世を去った。全集として『尾崎咢堂全集』全一二巻（公論社　昭和三〇～三一）がある。

小沢恒一（おざわ　こういち）

〔概括〕盛岡中学校の同級生で、啄木と同じユニオン会のメンバー。

〔人物〕教育者。明治一六年（一八八三）六月六日、岩手県和賀郡黒沢尻町（現、北上市）に生まれた。啄木と同じく明治三一年四月に盛岡中学校に入学、三六年三月に同校を卒業、早稲田大学哲学科に進み、卒業後は師範学校教授を経て母校早稲田大学の教授となった。昭和三二年（一九五七）に退職した後は郷里の北上学園校長として教育に当たった。

小沢は啄木と盛岡中学校で同級であったところから親しく交わり、啄木、伊東圭一郎らと英語の学習を目的とするユニオン会を結成して、卒業後も交友をつづけたが、明治三八年（一九〇五）八月二日、啄木の行動に対して合議の上で忠告の手紙を送ったところ、啄木は彼等の忠告を受け入れず、かえって

本日かぎり、小生一家と貴下並びにいと子氏との交りは断絶いたし候也。

という絶交状を送ったので、以後、交わりを絶った。ここにいう「いと子氏」とは小沢の妻の糸子のことで、盛岡女学校で啄木の妻の節子と同級生であった。

小沢らは、それから四五年たった昭和二五年（一九五〇）八月一六日、小沢のほか、阿部修一郎、伊東圭一郎は宝徳寺で追悼法要を

行なったあと、境内の歌碑の前で「絶交取り消し宣言」を行なって長年にわたるわだかまりを解いた。

小沢は昭和三八年（一九六三）七月二一日、八〇歳で世を去った。

『石川啄木全集』に啄木が小沢に宛てた書簡一四通が収められている。

小田島孤舟（おだじま　こしゅう）

〔概括〕岩手県で文芸雑誌を刊行し、啄木の作品を掲載した歌人。

〔人物〕歌人。教育者。明治一七年（一八八四）三月一日、岩手県和賀郡東和町に生まれた。本名、理平治。旧姓、佐々木。明治三九年（一九〇六）、浄法寺小学校教員時代に養子となり小田島姓となった。明治三五年、雑誌「小国民」の懸賞小説に二等当選、文学に情熱を傾けるようになった。同三八年に啄木が作った小天地社に啄木を訪問、交際が始まった。小田島は四〇年の「明星」第一二号に短歌二首を発表、四一年二月には岩手新詩社を創立、翌四二年七月には相沢曙村と文芸雑誌「曠野」を刊行した。啄木は同誌第一号に「東京より」、第七号に「我が最近の興味」、第八号に「創作自選歌より」、第九号に「公園にて」、第一〇号に「今年も」と、短歌を三九首、ほかに随筆などを発表している。

啄木が亡くなった翌月、明治四五年五月発行の「曠野」第一八号は「啄木号」となっており、巻頭に、

謹みて本号を我が畏敬せる詩人石川啄木の霊に捧げ
併せて君が愛慕せる岩手の山霊に献ず

の献辞がある。啄木が小田島に宛てた明治三九年（一九〇六）七月の書簡には、

君よ、詩人の一切の文字と声とは、少なくとも今の世に於ては、これ直ちに全社会に対する抗戦ならざるべからず。

とある。

小田島は初等・中等教育に携わるかたわら「岩手教育評論」「二戸教育新潮」「岩手教育」の編集も行なった。歌集に『郊外の丘』（明治三九・七）ほか計一五冊がある。昭和三〇年（一九五五）一二月四日に七二歳で没した。

『石川啄木全集』に啄木が小田島に宛てた書簡七通が収められている。

小田島尚三（おだしま　しょうぞう）

〔概括〕啄木の第一詩集『あこがれ』を出版した小田島書房の店主。

〔人物〕盛岡市の出版社小田島書房の経営者。明治一六年（一八八三）に小田島徳太郎の四男として盛岡市で生まれた。小田島書房は明治一〇年（一八七七）ごろに徳太郎が開業、四一年（一九〇八）

から尚三が跡を継いだ。啄木の第一詩集『あこがれ』は明治三八年五月三日に出版されたが、発行所は東京市京橋区南第九町五番地の小田島書房となっている。発行人は小田島嘉兵衛と尚三の二名である。出版の事情は、伊東圭一郎の『人間啄木』などによると、啄木は盛岡高等小学校で徳太郎の五男の真平と同級であった関係から、真平が啄木に出版社大学館に勤めていた長兄の嘉兵衛を紹介した。嘉兵衛は弟の尚三が当時は銀行に勤め、蓄えのあることを知っていたので、尚三に資金を出して『あこがれ』を出版してやることを勧め、尚三がこれに従ったものらしい。当時は日露戦争の最中で、尚三は出征すれば旅順に行き、生きては帰れない身だと考え、兄の言うことを聞き入れたと言っている。啄木の詩集『あこがれ』出版は幸運に見守られていたと言えよう。初版、再版五〇〇部ずつ出版され、定価は五〇銭であった。

尚三は昭和四一年（一九六六）三月に八四歳で没した。

葛原対月（かつらはら　たいげつ）

〔概括〕啄木の父の一禎が教えを受け、長く世話を受けた師僧。

〔人物〕曹洞宗の僧侶。啄木の母カツの兄。文政九年（一八二六）一二月一日、南部藩士工藤条作の二男として盛岡に生まれた。本名、直季。熊谷家を継いだが、嘉永七年（一八五四）に妻の死に遇い、仏門に帰依し、安政五年（一八五八）、南岩手郡平館村（現、岩手郡西根町）の大泉院の住職となった。仏門に入ってから仏禎得籌（ぶつていとくちゅう）と称していたが、明治五年（一八七二）一一月に僧侶も一般人と同じように姓を持ち、戸籍の届出をするようにという政府の布告により、葛原対月と称した。「葛原」は、どの『石川啄木辞典』なども「かつらはら」と読んでいる。しかし、「葛」の字は蔓性植物をさす文字で、①クズ、②カズラと読むのが普通であるから、そして昔は濁音表記をしなかったことを考えると、姓名など固有名詞の読み方は理屈どおりにはゆかないとはいえ、カズラハラと読むのではないかという疑問が残る。

啄木の父の一禎は平館村の大泉寺で対月に師として教えを受けた。対月は和漢の学を修め、易学、茶道、和歌も良くしたので、一禎もその感化を受けている。対月は大泉院に六年いたのち、明治四年（一八七一）から盛岡市の龍谷寺の住職として二五間年いたが、同二八年六月に青森県上北郡野辺地の常光寺の住職に転じた。一五年後の明治四三年（一九一〇）八月に隠居して盛岡に帰り、その年の一一月八日に八五歳で没した。

加藤四郎（かとう　しろう）

〔概括〕啄木が入社した当時の朝日新聞社の校正主任。

〔人物〕東京朝日新聞社の校正係主任。元治元年（一八六四）生まれ。明治二四年（一八九一）に東京朝日新聞社に入社した。

啄木は東京朝日新聞社に校正係として明治四二年（一九〇九）三月一日に入社したが、そのころ、校正係は、加藤四郎、寺崎太三郎、木村益太郎、山田宗助、三品長三郎、関清治、石川啄木の七人であった。啄木は加藤の印象を「校正長の加藤といふ人が来た。目の玉が妙に動く人だ。」と四二年三月一日の日記に記している。五月ごろから啄木は休みがちになるが、啄木は加藤から出勤を促す手紙を受け取っている。同四四年二月四日に啄木が慢性腹膜炎で東京帝国大学医科大学附属病院に入院したときには、加藤は見舞いに訪れたり、金銭面のことを心配したりしている。退院後、自宅で療養を続けていた啄木は同年七月一日付で、

とうとう五ヶ月になってしまひました。誠に不甲斐ないことと自分ながら愛相が尽きます。その長い間の陰に陽にのご厚志、全く何と御礼の言葉もありませぬ。お蔭で私も死ぬことを免れ、家族にも餓ゑさせずに今日まで生きてまゐりました。

と感謝し、長い近況報告の手紙を書いている。

加藤は昭和八年（一九三三）に九〇歳で没した。

北原白秋（きたはら　はくしゅう）

〔概括〕東京新詩社の新進歌人・詩人で、深い交わりをもったが、啄木はライバル意識も強く持った。

〔人物〕歌人。詩人。童謡作家。明治一八年（一八八五）一月二五日、福岡県山門（やまと）郡沖端（おきのはた）村（現、柳川市沖端）に、父北原長太郎、母シゲの長男として生まれた。家は造り酒屋で旧家であった。本名、隆吉。水郷柳川で幼少期を過ごし、中学時代から「文庫」に短歌を投稿、明治三七年（一九〇四）に早稲田大学英文科予科に入学し、翌年中退した。明治三九年に新詩社に入り、詩や短歌を発表して文壇に認められた。

明治四一年、吉井勇、木下杢太郎らと新詩社を脱退してパンの会創立に参加、これは江戸情緒や異国趣味にひたって官能の解放を求める耽美派文学の拠点となった。四二年、第一詩集『邪宗門』、四四年には第二詩集『思ひ出』を刊行して詩壇の第一人者となった。大正二年（一九一三）最初の歌集『桐の花』を刊行、短歌にも新風を開いた。このころ人妻との恋愛事件、生家の破産など人生上の試練に遭い、貧窮と苦悩のうちにたびたび転居、詩風も変化、次第に自然随順の閑寂境を慕うようになる。その一方、鈴木三重吉の児童文学雑誌「赤い鳥」によって創作童謡、創作民謡に新紀元を画す働きもした。短歌の方では昭和一〇年（一九三五）年に多磨短歌会を興して「多磨」を創刊、「近代の幽玄体」の樹立に尽くした。晩年

は眼疾におかされ、薄明のうちに詩作をつづけた。詩集はほかに『水墨集』（大正一二）、歌集に『雲母集』（大正四）、『雀の卵』（大正一〇）、『黒檜』（昭和一五）など多数がある。

啄木と交渉をもったのは、啄木が北海道から上京した明治四一年（一九〇八）から四二年の短い期間で、とくに四二年一月の「スバル」創刊の前後に密接な関係をもった。明治四一年五月一七日の観潮楼歌会で、二人とも与謝野鉄幹に伴われて出席したのが初対面であった。明治四一年九月一〇日の日記に啄木は、

北原からハガキ、転居の通知旁々やった予のハガキに対する返事だ。吊橋が匂ったり、硝子が泣いたりするのは、君一人の秘曲だから我々には解らぬと云ってやったのを、それは〝皆三角形の一鋭角の悲嘆より来るものにて、さほど秘曲に候はず、たゞ印象と、官能のすすり泣きを聞けばいいでは御座らぬか〟と書いて来た。北原君などは、朝から晩まで詩に耽ってる人だ。故郷から来る金で、婆やを雇って、勝手気侭に専心詩に耽ってゐる男だ。詩以外の何事をも、見も聞きもしない人だ。

と、辛辣だが的確でもある批判をしている。また、同年一二月一一日の日記には、

帰ってくると、北原白秋君。――予は今日虚心坦懐で白秋君と過去と現在とを語った。実に愉快であった。北原君の幼時、その南国的な色彩の豊かな故郷！　そして君はその初め、予を天才を以て自認してる者と思ひ、競走するつもりだったと！　戦は境遇のために勝敗早くついた。予は敗けた。共に夕飯をくった。其詩集〝邪宗門〟は易風社から一月に出ることになったと。

と記されている。

ひさしぶりに公園に来て
友に会ひ
堅く手握り口疾に語る（握・五三三）

の歌の「友」というのは白秋を指すと見られる。啄木は白秋より一歳年下で、年齢が近く、共に浪漫的な詩風であるところから互いに深い友情を感じつつも、同時に強いライバル意識も持ったらしい。明治四一年五月に初めて会ってから親密な交わりを持つが、翌年六月に啄木の妻の節子が北海道より上京してからは疎遠になった。

白秋は昭和一七年（一九四二）一一月二日に五八歳で没した。全集には『白秋全集』全三六巻・別巻一（岩波書店　昭和五九～六三）がある。

木下杢太郎（きのした　もくたろう）

〔概括〕啄木が観潮楼歌会に出席したころ頻繁に往来した同じ世代の詩人。

〔人物〕医学者。詩人、小説家、劇作家。本名、太田正雄。別号、きしのあかしや。明治一八年（一八八五）八月一日、静岡県加茂郡湯川村（現、伊東市湯川）に父惣五郎、母いとの三男として生まれた。生家は家号を米惣という旧家であった。東京の第一高等学校を経て、東京帝国大学医科大學卒。皮膚科専攻。愛知医科大学教授、東北大學医学部教授を経て、東京帝国大學医学部教授となる。

明治四〇年（一九〇七）に新詩社の同人となって詩作を始め、雑誌「明星」に詩や小品を発表した。この年の末に北原白秋、吉井勇、啄木らと新詩社を脱退した杢太郎は、四二年一月には雑誌「スバル」創刊に参画、南蛮キリシタン趣味の象徴劇の戯曲「南蛮寺門前」を発表している。その後、江戸趣味の情調劇「和泉屋染物店」（明治四四）を発表、時代の耽美主義に影響を与えた。

一方、四一年一二月には、北原白秋、長田秀雄、石井柏亭、山本鼎らとパンの会をおこして耽美享楽主義を鼓吹し、また、白秋、秀雄の三人で四二年一〇月に季刊同人誌「屋上庭園」を創刊した。この時期の詩集に『食後の唄』（大正八）がある。

啄木が杢太郎に初めて会ったのは明治四〇年（一九〇七）一〇月の森鷗外邸における観潮楼歌会の席上であった。当時、杢太郎は東大医学部の学生であった。その時の印象を啄木は「学殖も浅くはないし、観察も一見識がある。」と書いている。

啄木は四四年二月四日に慢性腹膜炎のため、東京帝国大学医科大学付属病院青山内科に入院するが、その前日に啄木の家にやってきた杢太郎は啄木を診察している。

杢太郎は昭和二〇年（一九四五）一〇月一五日に胃がんのため六一歳で没した。全集として『木下杢太郎全集』全二五巻（岩波書店昭和五六～五八）がある。

金田一京助（きんだいち　きょうすけ）

〔概括〕啄木が文学に志すきっかけとなり、また啄木が死ぬまで親身な世話をした友人の言語学者。

〔人物〕言語学者、国語学者。文学博士、学士院会員。明治一五年（一八八二）五月五日に盛岡市四ッ家町で生まれた。同三四年三月に盛岡中学を卒業、仙台の第二高等学校を経て、明治四〇年に東京帝国大学文科大学言語学科を卒業した。昭和三年（一九二八）に東京帝大助教授、同一七年（一九四二）に教授となり、翌年に定年退官した。その後、国学院大学教授、日本言語学会副会長、国立国語研究所評議員、国語審議会副会長などをつとめた。多くの国語辞典などの監修にも関わった。

大学在学の当時からアイヌ語の研究を始め、しばしば北海道やサハリン（樺太）を実地踏査し、またアイヌ人を自宅に招いて住まわせ、口承文学作品の筆録と研究につとめ、アイヌ語の言語学的研究を行なった。その代表作『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』により昭和七年（一九三二）帝国学士院から恩賜賞を受けた。同二九年（一九五四）には文化勲章受賞。言語学・国語学に関する著書や論文が多く、第二次世界大戦後は国語・国字改革にも尽くした。サハリン（樺太）におけるアイヌユーカラ採取の苦労を記した「心の小径」など随筆にもすぐれている。

啄木の金田一との出会いは、盛岡中学三年の啄木が二年上級の金田一から雑誌「明星」を借りたことに始まる。金田一は中学二年の時に新詩社に入り、花明と号して「明星」に投稿、盛岡中学の回覧雑誌「反古袋」に、後に海軍大将となった及川古四郎、小説家となった野村胡堂らとともに度々投稿し、小説も書いている。啄木はその金田一から、前述のように「明星」を借りて読み、新詩社に加入した。啄木が文学に志すようになったのは、金田一、及川、野村らの影響が強かった。

金田一が中学校を卒業した後も二人は文通をつづけた。明治三九年（一九〇六）に生まれた長女に啄木は金田一の名前の一字をとって京子と名づけている。明治四一年（一九〇八）四月、北海道から上京した啄木は、金田一の下宿していた本郷菊坂町の赤心館に入る。啄木は創作に専念したが、作品がまったく売れず、たちまち困窮した。同年九月、金田一は愛蔵の書籍、荷車二台分を売り払って、滞っていた啄木の下宿料を払ってやり、共に蓋平館（がいへいかん）別館に移った。このころの啄木の日記には連日といってよいほど金田一のことが書かれている。二人の同宿は翌年六月に啄木が本郷弓町に一家を構えるまで続いた。啄木は四一年五月六日の日記に、

金田一君といふ人は、世界に唯一人の人である。かくも優しい情を持つた人、かくも浄らかな情を持つた人、かくもなつかしい人、決して世に二人とあるべきで無い。若し予が女であつたら、屹度この人を恋したであらうと考へた。

と記している。

また、四二年六月に函館から上京した節子が、貧窮の生活や姑との軋轢、病苦などに耐えきれず、一〇月二日に京子を連れて家出して盛岡の実家に帰ってしまったときには、啄木は金田一のところに駆け込んで助けを求めた。この事件は金田一と盛岡の恩師、新渡戸仙岳の奔走で節子が一〇月二六日に帰宅して落着した。

金田一は明治四三年（一九一〇）一月に林静江と結婚、本郷追分町に新居を構えた。結婚後はそれまでのように石川家の世話ができなくなったが、それでもしばしば病床を見舞っており、啄木の亡く

なる四五年四月一三日も、その朝、訪れて病状を気にしながら勤めに出た。明治四三年（一九一〇）一二月に刊行された『一握の砂』巻頭の献辞には

函館なる郁雨宮崎大四郎君
同国の友文学士花明金田一京助君
この集を両君に捧ぐ

とある。

生まれたといふ葉書みて、
ひとしきり、
顔をはれやかにしてゐたるかな。〔悲・八五〕

そうれみろ、
あの人も子をこしらへたと、
何か気の済む心地にて寝る。〔悲・八六〕

の二首は金田一に長女が生まれたときに、祝いの手紙に添えた短歌である。

金田一は、啄木の死後、

わかくして別れしひとのいつまでもわかやかに来て面影に立つ

と、若くして死んだ友、啄木を懐かしんでいる。

また、金田一は啄木についての回想文を多く書いており、『石川啄木』と題するものだけでも、『石川啄木』（文教閣　昭和九）、『定本石川啄木』（角川書店　昭和二一）、『新訂版石川啄木』（角川書店　昭和三〇）、『終篇石川啄木』巌南堂書店　昭和四二）と改訂増補を重ねている。これらは、啄木のごく近くにあった人の著述だけに、啄木研究に大きく寄与している。金田一は生前に各地で何度も啄木の思い出を語り、感情をこめたその話は聴衆に感銘を与えた。また、改造社版や筑摩書房版の啄木の全集の編集にも関わった。

金田一は昭和四六年（一九七一）一月一四日に九〇歳で没した。金田一の言語学・国語学に関する研究を集めたものに『金田一京助選集』全三巻（三省堂　昭和三五～三七）、随筆を集めたものに『金田一京助随筆選集』全三巻（三省堂　昭和三九）がある。

『石川啄木全集』には啄木の金田一宛の書簡四四通が収められている。

工藤千代治（くどう　ちよじ）

〔概括〕渋民尋常小学校で首席を争った同級生。

〔人物〕渋民尋常小学校の同級生。明治一五年（一八八二）一月二〇日に岩手県南岩手郡渋民村（現、岩手郡玉山村）に生まれた。明治一九年二月に生まれた啄木よりも四歳年上であったが、入学が遅れて渋民尋常小学校で同級となり、年齢のせいもあって一年から三年まで首席を通していたが、四年生になって啄木にそれをゆずった。

後に渋民村役場に書記として勤務し、収入役、助役を経て村長になった。村内で宿屋を営んでいた知人が店をたたんで北海道に移住したときに、それを借り受け、役場に勤めるかたわら宿屋を経営していた。啄木の短歌、

小学の首席を我と争ひし
友のいとなむ
木賃宿かな〔握・二一八〕

千代治等も長じて恋し
子を挙げぬ
わが旅にしてなせしごとくに〔握・二一九〕

の二首はともに工藤のことを詠んだものである。

工藤は昭和二四年（一九四九）八月一一日に六八歳で世を去った。

古木巌（こぎ　いわお）

〔概括〕盛岡中学校で回覧雑誌を啄木といっしょに編集した同級生。

〔人物〕日本鉄道会社に勤務、東那須駅、亀有駅長などをつとめた。明治一五年（一八八二）九月一五日に岩手県南岩手郡本宮村（現、盛岡市本宮）に生まれた。明治一九年二月に生まれた啄木よりも四歳年上であったが、古木の留年などの関係で、盛岡中学校の三年生のときに同級になった。古木は同級生となった啄木とともに明治三四年（一九〇一）春に回覧雑誌「三日月」を刊行し、これを三号まで出したのち、同年九月に瀬川深らの「五月雨」と合併して回覧雑誌「爾伎多麻」第一号を刊行する。啄木はこの「爾伎多麻」に、「三日月」第一号は盛岡市内帷子小路の姉の家で古木とともに編集したと記している。古木は啄木の退学より一か月早く、明治三五年九月に家庭の都合により盛岡中学を退学し、岩手郡太田村の太田小学校の代用教員となったが、翌々年の一二月に日本鉄道会社に就職、改札係を経て車掌となった。啄木の

かの旅の汽車の車掌が
ゆくりなくも
我が中学の友なりしかな〔握・一五五〕

蘇峯の書を我に薦めし友早く
校を退きぬ
まづしさのため〔握・一八〇〕

の歌はともに古木を詠んだものである。

古木はその後、青森県大釈迦駅助役、東京田端駅助役、東那須駅駅長などを経て、亀有駅長を最後に退職、昭和七年（一九三二）一二月六日に五一歳で世を去った。

小林茂雄（こばやし　しげお）

〔概括〕盛岡中学時代に白羊会などで啄木と親しく交わった文学仲間。

〔人物〕医師。明治一九年（一八八六）六月一日、盛岡市に生まれた。盛岡中学では啄木より一年下級。仙台医学専門学校を卒業し、ウィーンに留学ののち、秋田県大館病院に勤務し、昭和五年から盛岡市で小林産婦人科医院を開業、盛岡市医師会長、盛岡市議会議員、岩手県医師会長を歴任した。

中学二年のとき、一級上の啄木とともに「白羊会」「文庫誌友会」に参加して、花郷と号して短歌や俳句を作った。啄木の退学後も渋民村に啄木を訪ねて語り合うなど、啄木の新婚時代まで親しく交際した。

近眼にて
おどけし歌を詠み出でし
茂雄の恋もかなしかりしか〔握・一九四〕

この歌の恋の相手は啄木の妹の光子で、小林が何度も光子に恋文を送ったのを啄木が知って興がったものらしい。日記にも二〇回以上も小林の名が見える。小説「葬列」にも花郷の名で登場している。

小林は昭和二七年（一九五二）八月三日に六七歳で世を去った。『石川啄木全集』には啄木が小林に宛てた書簡一五通が収められている。

小林寅吉（こばやし　とらきち）

〔概括〕啄木が三か月間、新聞記者をした小樽日報の事務長。

〔人物〕明治一二年（一八七九）四月二日、福島県大沼郡赤沢村雀

林（現、会津高田町雀林）で農業を営む小林清三郎の三男として生まれた。赤沢村役場に勤めたのち、苦学して早稲田大学法学部を卒業した。

明治四〇年（一九〇七）、福島県出身で早稲田大学の先輩である白石義郎に誘われて、新しく設立される小樽日報社の事務長となった。小樽は当時、樺太航路やロシア、朝鮮、中国との貿易港としてにぎわい、人口が約九万で、北海道一を誇っていた。その小樽に新聞が「小樽新聞」一紙のみであることに着目した根室の山県勇三郎が出資者となり、社長白石義郎、主筆岩泉江東、事務長小林寅吉を中心として小樽日報社は発足した。白石義郎は当時は道会議員で、釧路新聞社の社長でもあった。

「小樽日報」は明治四〇年（一九〇七）一〇月一五日に刊行を開始した。啄木は初め熱心に記事を書いたが、一二月になって札幌に新しい新聞が発刊されることを聞き、しばしば札幌に出かけて小樽を離れたので、それを注意した事務長小林と喧嘩になり、啄木は暴力をふるわれた。これを契機に一二月一二日に退社、小林もつづいて退社した。「小樽日報」は翌年四月一二日に廃刊となった。

大正三年一一月、小林は同じ雀林出身で東京に住む中野寅次郎の養子となり、娘の節子と結婚、五人の子をもうけた。

大正九年（一九二〇）から六期にわたって福島県第二区選出の憲政会などの衆議院議員をつとめた。議会では野次で有名で、「蛮寅」と呼ばれた。

晩年は修行して、忍海と号し、郷里の雀林にある、養老四年（七二〇）開基の天台宗の名刹法用寺の住職となった。そして昭和三七年（一九六二）七月五日に八四歳で波乱万丈の一生を終えた。

法用寺の境内には、忍海（寅吉）の死後、啄木が寅吉を回想した次の二首を刻んだ歌碑が建てられた。

あらそひて
いたく憎みて別れたる
友をなつかしく思ふ日も来ぬ〔握・三五二〕

敵として憎みし友と
やや長く手をば握りき
わかれといふに〔握・三六二〕

小奴（こやっこ）

〔概括〕啄木の釧路新聞社時代に深い交渉のあった女性。

〔人物〕芸妓。本名、坪（近江）ジン。明治二三年（一八九〇）一〇月一五日に函館で生まれた。父は呉服商で渡辺庄六、母はよりと

いった。九歳のとき母方の叔父で十勝に住む坪松太郎の養女となり、坪ジンと名乗ったが、高等小学校に在学中に、養父が死亡したので、母の知っていた帯広の函館屋という小料理屋に預けられ、そこで芸事を覚えた。一六歳で芸妓になり、再婚して釧路の近江屋旅館にいた母を慕って釧路に行き、しゃも寅という料亭の芸者をしていた。美しく、文学少女で短歌も作り、踊りなど芸事も群を抜いていた小奴は釧路で評判の芸妓となった。

啄木が小奴を知るのは、彼女が釧路に来てから間もない明治四一年（一九〇八）の春で、啄木は店をたびたび訪れて親しくなった。この時、啄木二三歳、小奴は一九歳であった。啄木は小奴の印象を、明治四一年二月二四日の日記に、「今迄見たうちで一番活発な気持の良い女だ。」と書いている。

そのうちに小奴は「予の側に座つて動かなかつた」（日記　明治四一年三月三日）というようになり、さらに、「先夜空しく別れた時は〝唯あやしく胸のみとどろき申候〟と書いてあつた。〝君のみ心の美しさ浄けさに私の思ひはいやまさり申候〟と書いてあつた。」（日記　明治四一年三月一一日）と進んでゆき、啄木も小奴の手紙に対して、「長い長い手紙の返事を長く長く書いた。僕の方では、名も聞かなかつた妹に邂逅した様に思ふが、お身は決して俺に惚れては可けぬ。」（日記　明治四一年三月一一日）とこたえた。

小奴といひし女の
やはらかき
耳朶のことなども忘れがたかり〔握・三九一〕

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手のあたたかさかな〔握・三九二〕

舞へといへば立ちて舞ひにき
おのづから
悪酒の酔ひにたふるるまでも〔握・三九五〕

火をしたふ虫のごとくに
ともしびの明るき家に
かよひ慣れにき〔握・四〇〇〕

などの甘美な追憶の歌が『一握の砂』に数多く収められているのを見ると、啄木がいかに小奴に心をひかれていたかをがわかる。

酔ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり〔握・三九九〕

の歌は、傷ついた啄木の心をやわらげ、彼の望むままに応じてくれた唯一人の人が小奴であったと回顧した作である。

小奴は同年一一月に逸見豊之輔と結婚した。小奴はその年の一二月に夫と上京し、啄木を蓋平館に訪ねている。啄木は一二月一日の日記に、

誰からと聞くと、一寸外へ出てくれといふ。〃釧路から来た者だと言つてくれ〃といふ声が聞えた。ツイと出ると、驚いた、驚いた、実に驚いた。黒綾のコートを着た小奴が立つてるではないか！　〃やあ！〃と言つたきり、暫くは二の句がつげなかつた。

と記している。同じ日の日記には、二人が不忍池のほとりを手をとりあって歩き、浅草の蕎麦屋に上がって酒を飲んだことを書いたあとで、「予の心は淘とした！　唯淘とした！」「別れる時キッスした。」とある。

小奴はやがて貞子という女の子をもうけたが、大正一二年に事情あって逸見と別れ、母のいる釧路市南大通の近江屋旅館に娘とともに移った。その後は近江姓を名乗り、旅館の経営にあたったが、昭和二九年（一九五四）に廃業、同四〇年（一九六五）七六歳で東京において世を去った。小奴の啄木を偲んだ歌に、

六十路過ぎ十九の春をしみじみと君が歌集に残る思ひ出
ながらへて亡き啄木を語るとき我の若さもともになつかし

などがある。

コルバン夫妻（William Wriethesley Colborne, Mrs. Sophia Ellenn Colborne）

〔概括〕啄木の没後、病身で寄るべのない節子と二人の娘を救った伝道医師とその妻。

〔人物〕夫のウイリアムは宣教師。一八五七年にイギリスのケント州マーゲートで生まれた。ロンドン大学の医学部を卒業したのち、外科医として南アフリカで働き、その後、一八八九年にイギリスにもどって宣教師の資格を得て、翌年に医療宣教師として中国に派遣された。一八九四年にホンコンでソフィアと結婚した。

妻のソフィアは一八六六年にイギリス南ウエールスのスワンゼイ

で生まれた。旧姓をフィールドといい、幼いころは体が弱く、家庭教師によって教育されたほどだったが、伝道を志すようになり、一八八八年にホンコンへ渡った。夫のコルバンより二年早くホンコンに来て働いていたことになる。そこで病人の看護をするかたわら教会でオルガニストとしても奉仕し、一八九四にホンコンでウイリアムと結婚した。

ホンコンで結婚したコルバン夫妻は明治三一年（一八九八）一月に来日し、函館新川町の貧民街で医療伝道を開始した。夫のウイリアムによる診察を求める人たちが列を作る有様で、それを待つ間にソフィア夫人の話を聴いたり賛美歌を歌ったりした。こうして病院も徐々に拡大し、洗礼を受ける者も多かったという。

しかし、明治三八年にウイリアムが脳溢血で倒れ、医師の勧めで千葉県の館山で転地療養した。翌年、再び函館にもどって診療をつづけたが、同四〇年に病気の悪化により館山に行き、その翌年にはまた函館にもどったが、徐々に診療が困難となり、宣教師を退職、転地療養に訪れていた館山の八幡海岸を永住の地と決めて、ここでソフィアは夫ウイリアムの看病をするかたわら、結核患者のために「養生院」と呼ばれた療養所で一〇名内外の入所患者に対して食事の世話をし、栄養、安静などの指導を行なった。

啄木が明治四五年（一九一二）四月に死んだとき、妻の節子は妊娠八か月の身重で、しかも肺を結核に冒されていたので、生活の見通しが立たず途方にくれていたが、啄木の妹の光子を介して知った宣教師ミス・サンダー（Mary Sander）の紹介で、聖公会の聖路加病院で治療を受けたのち、千葉県安房郡北条町八幡に行き、そこに滞在中のコルバン夫妻の世話になった。節子と娘の京子は「養生院」は患者がいっぱいで入れなかったため、片山カノ家の離れに落ち着き、夫妻から下宿代、医療費、パン、日に三合の牛乳と昼のスープを供されて、六月一四日に無事に房江を出産することができた。

節子たちは九月四日にここを去って函館に赴いた。

ウイリアムは大正四年（一九一五）に六〇歳で世を去り、館山の城山墓地に埋葬された。

夫の死後、ソフィア夫人は一旦イギリスにもどったが、今度は宣教師の資格を得て大正七年に再び来日、養生院での患者の世話のほか、館山聖アンデレ教会などで伝道も行なった。結核に対する周囲の人々の嫌悪、大正一二年の関東大震災による養生院の倒壊、同一四年の自身の失明などという試練にもかかわらず、その後も教会、伝道所、幼稚園などを各地に創設し、路傍の説教もつづけたが、昭和一五年（一九四〇）七月一三日に七四歳で世を去り、夫の眠る館山の城山墓地に埋葬された。

コルバン夫妻の活動を記したものとしては、粕谷常吉編『房州に

光を掲げた人々―房州伝道百年小史―』（聖公会出版事業部　平成元・六）、日本聖公会社会事業連盟編『現代社会福祉の源流』（聖公会出版　昭和六三・八）、日本聖公会歴史編集委員会編『あかしびとたち―日本聖公会人物史―』（日本聖公会出版事業部　昭和四九・七）がある。『房州に光を掲げた人々―房州伝道百年小史―』が最も詳しく夫妻の活動に触れており、この本には夫妻の写真のほか、夫妻やコルバンホームの入所者といっしょに撮った石川節子と京子の写真も収められている。

斉藤佐蔵（さいとう　さぞう）

〔概括〕渋民尋常高等小学校の代用教員時代に啄木が間借りしていた家の少年。

〔人物〕小学校長。教育委員。明治二四年（一八九一）一〇月二八日、啄木の故郷である渋民村で生まれた。三九年三月に啄木が妻と母とともに渋民村にもどり、同年四月から翌年五月まで渋民尋常小学校の代用教員をしていたが、その時に間借りをしていたのが斉藤佐五郎宅で、佐蔵はその家の長男である。父の佐五郎は獣医で、佐蔵が農学校に進んで獣医になることを期待したが、佐蔵は三九年（一九〇六）に盛岡中学に進んだ。中学在学中に啄木が渋民尋常高等小学校で生徒を連れてストライキを起こした。その時、小学校の遠藤校長から頼まれた斉藤は、盛岡から二〇キロの道のりを走ってやってきて啄木に中止を勧めたが、啄木は聞き入れなかった。

斉藤は学資の援助を得られず、盛岡中学を二年生の三学期で中退、その後、代用教員などをし、後に岩手県九戸郡山形村小国小学校長、岩手郡玉山村教育委員などを勤めた。

斉藤は昭和四九年（一九七四）一月七日に八四歳で世を去った。

おちつかぬ我が弟の
このごろの
眼のうるみなどかなしかりけり〔砂・四七八〕

の歌は斉藤を詠んだものと考えられる。

佐藤真一（さとう　しんいち）

〔概括〕啄木が東京朝日新聞社に勤めていたころの編集部長。

〔人物〕朝日新聞社編集部長。明治元年（一八六八）一二月二二日に南部藩士佐藤貞吉と左命子の長男ととして盛岡で生まれた。後の盛岡中学の前身、岩手中学に第一回生として入学したが、病気のために退学し、儒者の川上玄之に漢籍を学んだ。また、盛岡の自由民権運動の先駆けとなった政治結社の求我社に加盟、その経営する学

校、行余学舎に学んだ。そのころから、北上川にちなんで北江と名乗った。

明治一八年（一八八五）に岩手新聞（現、岩手日報）の記者となった。同二〇年に上京、伊東圭介（啄木の盛岡中学の級友、伊東圭一郎の父）の紹介で自由党の機関誌「自由の燈」の記者となった。この雑誌は「めざまし新聞」となり、大阪の「朝日新聞」が東京に進出するために「めざまし新聞」を買収した際に東京朝日新聞社に移り、そののち編集長として二七年にわたって腕を揮った。「朝日新聞」の編集方針は佐藤の時に固まったといわれる。明治四〇年に夏目漱石が月給四〇〇円で入社したとき、池辺主筆一七〇円、松山政治部長一四〇円、佐藤編集長一三〇円がベストスリーであった。

啄木が同四二年二月に、盛岡出身の佐藤のもとへ履歴書を送って就職を依頼したところ、会ったことのない啄木を三月一日付けで校正係に採用したのは佐藤の愛郷心のためであろう。啄木は宮崎郁雨に三月二日付の手紙において、

同社に二十年勤めてゐる佐藤といふ編輯長がある。盛岡の人で、今では社の重鎮だ。この人に突然頼んだところが早速承諾してくれて、アキのないのを無理に入れてくれることになつたのだ。月給二十五円、夜勤手当一夜一円（但し午前一時まで〻徹夜ではない。）都合三十五円許りの約束――同社は年度制度になつてゐるので、四月からでなくては実は入れなかつたのださうだ。

と報告している。二月七日の日記にも、

朝日新聞社に佐藤氏をとひ、初対面、中背の、色の白い、肥つた、ビール色の髯を生やした無骨な人だつた、三分間許りで、三十円で使つて貰ふ約束、このつもりで一つ運動してみるといふ確言をえて夕方ニコニコし乍らかへる、此方さへきまれば生活の心配は大分なくなるのだ。

と、無収入から脱することのできる喜びを記している。啄木は同四三年一〇月四日に生まれた長男に佐藤の名をもらって真一と名づけている。

同四五年一月、小石川久堅町で病の床に臥していた折には、佐藤は啄木を何度も見舞い、啄木の給料の前借りの立て替え払いをしてやったり、築地の市立施療院への入院を勧めたりしている。啄木は一月二二日付の佐藤宛の手紙に

拝復。昨夜お手紙拝見致しました。重ねがさねの御配慮、何とも有難う存じます。（中略）唯今私の家は、この母と私共夫婦と子供一人だけなのですから、母のことがどうにかかうにか心配がない事にならないうちは、どうしても私一人出て行く訳にいかないのであります。私の入院した後に万一の事でもあつては大変ですし、それにまた私一人を力にしてゐる母の事ですか

ら、私がゐなくなつたらそれ一つでも衰弱を増すに違ひありません。

と、三八度を越す高い熱に苦しみながら、長い手紙を書いて、困難な状況を報告、施療院への入院を断っている。

佐藤は、四四年九月に池辺主筆が辞任したのちは編集部長のほかに論説選定委員を兼ね、大正元年（一九一二）に渋川社会部長が退職すると、その職も兼任したが、三年春ごろから喉に悪性腫瘍が生じ、同年一〇月三〇日に四七歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が佐藤に宛てた書簡五通が収められている。

沢田信太郎（さわだ　しんたろう）

〔概括〕啄木が函館、小樽にいたころに親しく交わった友人。

〔人物〕新聞記者。号、天峰。明治一五年（一八八二）四月二五日、北海道松前郡福山町（現、松前町福山）に父東太郎、母コトの長男として生れた。七歳のとき両親が離婚したので、母の里で幼少期を過ごした。小学校を卒業、小学校の准訓導をしたのち、上京して中学校卒業資格を得て、明治大学に入学、間もなく早稲田大学に転じたが、学資が続かなくなって中途退学して北海道の函館にもどった。苜蓿社（ぼくしゅくしゃ）の同人であった岩崎正の姉トシと結婚、函館商工会議所に勤めながら「紅苜蓿（べにまごやし）」に作品を発表していた。

啄木は明治四〇年（一九〇七）五月、北海道に着いて間もない一一日から月末まで商工会議所の臨時雇として働いているが、これは沢田の世話によるものである。この年の八月の大火で焼け出された沢田はトシと別れて札幌に行き、一〇月に北海道庁の職員となったが、「小樽日報」の創業に加わった啄木の要請により一一月に小樽日報の主筆となった。啄木が、この年一二月一二日に起こった事務長の小林寅吉とのトラブルがもとで退社するまで、二人は机を並べて仕事をした。この頃、啄木の仲介で小学校の教師をしていた桜庭ちか子との縁談が進められたが、実らなかった。

啄木が釧路に移った後の四一年二月二〇日に沢田は釧路を訪ねている。啄木はこのときの模様を日記に、

枕を並べて寝て、えも云はれぬ心地がする。なつかしいものだ、友達といふものは。

と記している。啄木が釧路へ単身赴任したのちも小樽に留まった沢田は、啄木の家族の生活を心配して援助している。縁談の不調と四一年四月の「小樽日報」の廃刊にあうが、沢田は同じ月に新しく出ることになった「札幌新聞」に入り、四か月後、「釧路新聞」に移った。翌年、松本ハツエと結婚した。

その後、沢田は上京して「国民新聞」経済部長、朝鮮銀行調査役、

東洋生命保険株式会社東京支店長、帝国生命保険株式会社横浜支店長等を歴任した。

沢田は「中央公論」昭和一三年五、六月号に「啄木散華——北海道時代の回顧録——」を書いて、

私は彼が一生を通じて最も健康であり、元気であり、そして最も波瀾を極め、最も人間味を発揮したと思はるゝ北海道時代、函館から札幌、札幌から小樽、小樽から釧路へと、啄木の動くところ必ず天峰ありで、何の因縁か絶えず行動を共にして来た関係があるので、今にして二十二年前の交遊を回想すると、万感胸に迫るものがある。

と当時を懐かしんでいる。

沢田は昭和二九年（一九五四）一一月二六日に七三歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が沢田に宛てた書簡一〇通が収められている。

渋川玄耳（しぶかわ　げんじ）

〔概括〕啄木を「朝日歌壇」の選者に抜擢した東京朝日新聞社会部長。

〔人物〕東京朝日新聞社会部長。明治五年（一八七二）六月三日に佐賀県杵島郡西川登村（現、武雄市西川登町）に陶工渋川柳左衛門の次男として生まれた。本名、柳次郎。長崎商業学校に学び、明治二十二年に上京して東京法学院（現、中央大学）で法学を、また國學院で国文学を学んだ。卒業と同時に高等文官試験、司法官試験に合格し、二七年に福島県平区裁判所判事となった。同三一年に熊本の第六師団法官部に転じ、そのとき同地の第五高等学校教授の夏目漱石らが作った俳句グループ紫冥吟社に加わった。玄耳は俳号である。日露戦争に第六師団野戦法官部長として出征、東京朝日新聞特派員の弓削田精一の勧めを受けて東京・大阪の両「朝日新聞」に「陣屋の二十四時間」などを寄稿し、軽妙な筆で注目された。同三九年に東京第一師団法官部に移った。弓削田の推薦で同四十年三月、東京朝日新聞社会部長に就任、月給一二〇円を得た。渋川は主筆の池辺三川と協力し、四月には夏目漱石を「朝日文芸欄」の担当として迎え、またそれまで政治、経済記事担当の硬派に対し、社会記事担当は軟派と呼ばれて軽んじられがちであったのを、社会部と称して充実させて活気をもたらした。

明治四二年三月一日、校正係として入社した啄木は、日記に渋川を、「髯のない青い顔に眼鏡をかけてゐた。」と記している。四三年、啄木が差し出した短歌を見た渋川は掲載を承諾、三月一八日から二、三日おきに紙面に掲載されるようになる。四月二日の日記に啄木は、

渋川氏が、先月朝日に出した私の歌を大層讃めてくれた。そして出来るだけの便宜を与へるから、自己発展をやる手段を考へて来てくれと言った。

と書いている。啄木に歌才を認めた渋川の好意で歌壇を新設することになり、その選者に抜擢された。啄木の選歌は明治四二年九月一五日から翌年の二月一八日までの八二回で、総歌数は五六八首である。

渋川の激励に発奮した啄木は歌集の編集に取りかかり、一二月一日、『一握の砂』が東雲堂から刊行された。啄木の頼みを容れて、渋川は「藪野椋十（やぶのむくじゅう）」の名でこの歌集に序文を寄せ、

俺等聞及んだ昔から今までの歌に斯んな事をすなほに、ずばりと、大胆に率直に詠んだ歌といふものは之れ無い。

と奇抜な文章で、啄木短歌の特色をとらえた批評をしている。

渋川は大正元年（一九一二）一一月に退社し、その後は法律事務所を開設してその仕事にあたるかたわら「東京毎夕新聞」などへ寄稿した。同四年の第一次世界大戦の際には「国民新聞」から特派員として青島に赴いた。その後、大阪日報の主筆をつとめたが、病のため退いて文筆生活に入った。『支那仙人伝』、『文字書道』など著書が多い。自選歌集に『山東にあり』がある。

渋川は大正一五年（一九二六）四月九日に五五歳で世を去った。

菅原芳子（すがわら　よしこ）

〔概括〕啄木が北海道から上京した直後、激しい恋の手紙をやりとりした女性。

〔人物〕歌人。明治二一年（一八八八）五月二一日、大分県臼杵町（現、臼杵市）に穀物商、菅原長次郎の一人娘として生まれた。小学校卒業後、文学に興味を持つようになり、家事を手伝いつつ地元の文学グループ「みひかり会」に加わり、「明星」にも投稿した。新詩社では同人が分担して、送られてきた作品を批評して返送していたが、啄木の批評が親切だったので、菅原は啄木に批評を乞うようになった。雑誌「明星」には、啄木の選で明治四一年（一九〇八）四月号に「瓶」四首、七月号に「風」五首、「白露集」一五首などが見える。雑誌「スバル」にも啄木の選で短歌が掲載されている。

啄木は菅原に、明治四一年六月二九日の書簡では、「いかなる清境にゐたまへば、かかる優しき御歌よませ給ふ事ぞと、ひそかにいろいろのこと想像まかりあり候。」と彼女に対する関心を記しただけでなく、たびたび長い手紙を送って、八月二十四日の手紙になると、

われかくも君を恋して、然も何故に相逢ふてこの心を語り能はざるか、かくも恋して、何故に親しく君の手、あたゝかき手をとり、その黒髪の香を吸ひ、その燃ゆる唇に口づけする能はざ

るか！　更に、我かくも身も心も火の如く燃えつつ、何故にお身の柔かき玉の肌を抱き、その波うつ胸に頭を埋めて覚むる期もなからむ夢に酔ふこと能はざるか！

と激しい恋情の高ぶりを記して写真を求めている。この年の四月に創作生活を憧れて北海道から上京した啄木は、五月の約一か月の間に「菊地君」「病院の庭」など六編の小説、約六百枚を書き上げたが、予想に反して買ってくれるところがなく、生活にもゆきづまり、自信を喪失、しじゅう死を考えていた。その頃の啄木の日記、たとえば六月二九日のところには、「死にたい。けれども自ら死なうとはしない！　悲しいことだ、自分で自分を自由にしえないとは！」という具合で、このような苦悩からの逃避の気持がこんな恋文を書かせたものと思われる。

二人の文通は明治四二年で終わり、菅原は四三年の春、両親のすすめで正雄という婿養子を迎えて結婚したが、大正一四年（一九二五）三月二五日に三八歳で没した。

『石川啄木全集』には啄木が菅原に宛てた書簡一二通が収められている。

瀬川深（せがわ　ふかし）

〔概括〕盛岡中学時代の啄木の文学仲間。

〔人物〕医師。明治一八年（一八八五）一月五日に岩手県和賀郡江釣子村（現、北上市上江釣子）で父瀬川速水、母ヤスの三男として生まれた。のち、医師瀬川雅夫の養子となった。

盛岡中学で一年下級。瀬川は藻外と号して明治三三年（一九〇〇）に詩誌「五月雨」を発行しており、啄木は古木巌と雑誌「三日月」を発行していた。翌年九月、啄木と瀬川らは二つの雑誌を統合して、あらたに「爾伎多麻」を発行した。また、啄木も加わった歌会「白羊会」では委水楼の筆名で短歌を「岩手新聞」に発表した。

瀬川は盛岡中学を卒業し、岡山の第六高等学校を経て京都帝国大学医学部に学んだ。そののち同大学の小児科研究室で研究ののち、浜松市の石川病院で小児科部長をつとめ、大正四年（一九一五）から独立して市内で瀬川小児科医院を昭和二〇年（一九四五）まで開業していた。

瀬川は盛岡中学を卒業し、岩手を離れた後も啄木との交友を生涯にわたって続けた。啄木が明治三九年四月二〇日、瀬川を思って作った詩に「友、藻外に」がある。

瀬川に宛てた啄木の同四四年一月九日付の書簡は、四五〇〇字を超す長いもので、短歌、『一握の砂』、故郷、北海道、大逆事件などについて記しており、大逆事件について書くあたり、心を許して語り合える友であったことを示している。

瀬川は昭和二三年（一九四八）三月一一日に六四歳で世を去った。『石川啄木全集』には啄木が瀬川に宛てた書簡三通が収められている。

相馬御風（そうま　ぎょふう）

〔概括〕啄木の短歌などを最も早い時期に評価し、世に紹介した人物。

〔人物〕詩人。評論家。明治一六年（一八八三）七月一〇日、新潟県糸魚川に生まれた。本名、昌治。明治三五年に早稲田大学予科に入学、三九年に同大學英文科を卒業した。予科に入学した三五年に新詩社に入り、啄木を知った。翌年、新詩社を脱退、岩野泡鳴らと創刊した雑誌「白百合」に啄木は計一四編の詩を寄稿した。その後、御風は「早稲田文学」の編集委員となったが、啄木は四一年に同誌に二七首の短歌を寄せた。これらの作品について相馬は「白百合」「東京日日新聞」「創作」「早稲田文学」などで好意をもって批評しており、啄木を世に紹介する先駆けの役割を果たした。この相馬の批評について啄木は、明治三八年一二月四日付の前田儀策宛書簡で、「相馬氏の“二つの鐘”三度くり返して低唱いたし候、誠に有難き作と存じ候。」と書いて感謝しているが、「スバル」の四三年一月号に書いた「一年間の回顧」では、相馬の自然主義が心情的観照という情緒認識に留まっていると批判するようになっている。

相馬は明治四一年『御風詩集』を刊行する一方、自然主義文学擁護の立場から論陣を張り、大正元年（一九一二）、評論集『黎明期の文学』を刊行、また早稲田大学の講師となった。晩年は郷里に帰って良寛の研究を行ない、『大愚良寛』（大正七）を刊行した。早稲田大学の校歌「都の西北」は御風の作詞である。

相馬は啄木の一周忌に講演を行なった。その記録「石川啄木の歌」（「新潮」大正二年五月）でも啄木を高く評価している。

相馬は昭和二五年（一九五〇）五月八日に六八歳で世を去った。著作集に『相馬御風著作集』全八巻・別巻二（名著刊行会　昭和五六）がある。

『石川啄木全集』には啄木が御風に宛てた書簡三通が収められている。

高田治作（たかだ　じさく）

〔概括〕啄木の小樽時代の年少の友人。

〔人物〕明治二四年（一八九一）二月一九日、北海道小樽郡色内町（現、小樽市色内）に父高田次郎三郎、母ステの長男として生まれた。戸籍名は次作。筆名、紅果、紅花。景徳尋常小学校を卒業したのち、商業学校の講義録で勉強し、三九年に保険代理業の奥田商会

に入り、長く勤務した。四〇年一一月、小樽時代の啄木の下宿を友人の藤田武治と訪ねた。以後もしばしば訪問し、啄木が小樽を離れてからも文通をつづけた。

あはれかの眉の秀でし少年よ
弟と呼べば
はつかに笑みしが〔握・三五三〕

の歌は高田少年を回想して詠んだものである。啄木の日記を見ると、彼が高田を可愛がり、いろいろ心を配っていた様子がうかがえる。

先に触れたように高田は藤田武治（南洋）と仲が良かった。上京した啄木が土岐哀果と雑誌「樹木と果実」を発刊しようとしたときには、高田は藤田とともに小樽でこれに協力しようとした。

その後、高田は保険業界で活躍するかたわら、小樽で創刊された雑誌「海島」「新墾」「新短歌時代」に関係して作品を発表、地元の短歌運動、文化活動に貢献した。戦後まもなく小樽啄木会を創設、『秘められし啄木遺稿』（新星社　昭和二二・二）を刊行し、小樽公園入り口の啄木歌碑の建立に力を尽くした。

高田は昭和三〇年（一九五五）八月一二日に心臓麻痺のため六四歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が高田に宛てた書簡一〇通が収められている。

高村光太郎（たかむら　こうたろう）

〔概括〕「明星」「スバル」の同人で、光太郎が雑誌に発表した詩や短歌を啄木は関心をもって見ていた。

〔人物〕詩人、彫刻家。明治一六年（一八八三）三月一三日、木彫家であった高村光雲の長男として東京下谷に生まれた。号、篁砕雨。東京美術学校彫刻科、同研究科卒。在学中から新詩社に属して「明星」に短歌を発表。同三九年（一九〇六）、彫刻の修業のため渡米、さらにロンドン、パリに遊学、四二年に帰国した。父の光雲も含めた既成美術界の俗物性、派閥性に対する義憤、自我の自由への渇望から、激烈な筆をふるって個性の無限の価値を主張した。その精神的苦悩と彷徨の中で「パンの会」のデカダン的交友に身を投じ、盛んに詩作する。同四四年に「青鞜」に表紙絵を描いていた長沼智恵子を知り、大正三年（一九一四）に結婚した。同じ年、日本口語自由詩の収穫である『道程』を刊行した。智恵子はやがて精神分裂病を発病、死に至る。『智恵子抄』（昭和一一）は智恵子への愛を歌った詩集である。同一六年、太平洋戦争勃発とともに、積極的な戦争詩の作者となり、青年への影響力が大きかった。戦後、その責任の

意識から疎開先の岩手県花巻西郊の太田村で七年にわたり山小屋で自炊生活を送った。その孤独の中から詩集『典型』（昭和二五）が生まれた。二七年に東京へ帰り、翌年、十和田湖畔に建立の裸婦二人像を完成した。

彫刻の方面では、幼い時から父の高雲に木彫を学び、東京美術学校で彫塑も学んだ。在学中からロダンに関心をもち、欧米遊学中にはヨーロッパの諸芸術思潮、とくにロダンに強く触発された。編訳『ロダンの言葉』（大正五）、『造型美論』（昭和一七）など文筆にも活躍した。彫刻の代表作としては「手」「裸婦坐像」「黒田清輝像」などのほか、「桃」「鯰」「宙」など木彫にも新生面を開いた。

啄木が光太郎に初めて会ったのは明治三十五年（一九〇二）一一月九日、新詩社の集まりの席で、啄木はその印象を、一一月一八日付の小林茂雄宛書簡で、「砕雨は背の高いオトナシイ男」と報じている。その後も、「明星」の同三七年一月号を読んだ感想として、「明星をよみて高村砕雨氏の短詩『白斧』の高潔崇妙なるに甚だしく興をおぼゆ。」と書いており、とくに光太郎の作品だけを取り出して感想を記すあたりには、啄木の光太郎に対する関心がうかがえる。

明治三八年一月一五日に東京本所の伊勢平楼で開催された新詩社演劇会の脚本の一つは光太郎の「青年画家」で、これには啄木も笛を吹く役を勤めた。また、光太郎の昭和二二年に書いた詩群『暗愚小伝』の中の「彫刻一途」には、

私と話すつもりで来た啄木も、
彫刻一途のお坊ちゃんの世間見ずに
すっかりあきらめて帰っていった。

とあって、明治三七、八年ごろにこの頃、啄木が光太郎の家を訪ねたらしい。留学から帰った後、光太郎は詩「失はれたるモナ・リザ」「根付の国」などを雑誌「スバル」に発表し、堰を切ったように詩を書くが、啄木がすでにその編集から離れていたこともあって、二人の交友は深まらなかった。光太郎は「啄木と賢治」という随筆で、「日本古来の不自由な和歌といふものを啄木はまるで新しい自由なものにしてしまひました。」と評価している。

光太郎は昭和三九年ごろから肺結核が悪化、三一年（一九五六）四月二日に七四歳で世を去った。全集として『高村光太郎全集』全一八巻（筑摩書房　昭和三一～三三　修正再刷　昭和五二）がある。

高山樗牛（たかやま　ちょぎゅう）

〔概括〕一〇代の啄木が深く心酔した思想家、評論家。

〔人物〕思想家、評論家。明治四年（一八七一）二月二八日、山形県鶴岡に生れた。本名、林次郎。旧姓、斎藤。幼いとき高山家の養子となった。仙台の第二高等中学(後の第二高等学校)を経て明治二九年（一八九六）年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。大学に在学中の同二六年、「読売新聞」の懸賞小説に「平家物語」に材を取った悲恋物語「瀧口入道」が入選し注目された。二九年に仙台の第二高等学校教授となったが、翌年辞任して博文館に入社、雑誌「太陽」の主筆として、文芸、美術、歴史、宗教、政治と広い分野にわたって精力的に執筆をした。主張は日本主義から、ニーチェ賛美、「美的生活」の提唱、日蓮賛美へとめまぐるしく変化したが、本能に基づくロマン的な意志の確立という姿勢は一貫している。三三年に文部省から美学研究のためヨーロッパ留学を命じられたが、留学直前に病で倒れ、明治三五年（一九〇二）一二月二四日に三一歳で没した。

その頃の青年は、樗牛の覇気に満ち情熱的な文章に賛美を惜しまなかったが、啄木もその一人で、姉崎嘲風らによって「樗牛会」が設立されたとき、啄木も明治三七年一月二十四日と二六日、「岩手日報」に「樗牛会に就て」という紹介文を書き、「樗牛会規約」を載せて参加を呼びかけている。同年三月一〇日付の小沢恒一宛書簡において啄木は「樗牛は我らが思想上の恩師であるし、かつ日本史上に、尤も高価な血と涙とを以て記された偉人の一人で有るから出来る丈け、かの会のためにも尽力したいと考へて居ます。」と説明しており、その心酔ぶりがうかがえる。しかし、それから八年を経て、自然主義から社会主義に目を向けるに至った啄木は、明治四三年に書いたと推定される評論「時代閉塞の現状」においては、樗牛の言うように「一切の『既成』をそのままにして置いて、自力を以て我々が我々の天地を新たに建設するといふ事はまったく不可能だ。」と批判するようになっている。

橘智恵子（たちばな　ちえこ）

〔概括〕啄木の函館弥生小学校教員時代に同僚であった女性教師。

〔人物〕明治二二年（一八八九）六月一五日、北海道札幌郡札幌村一四番地（現、札幌市）で、橘農園を営む父仁と母以津の長女として生まれた。戸籍名はチエ。同三五年三月に札幌女子高等小学校を卒業、この年五月に北海道庁立札幌高等女学校二年に編入された。三六年四月から給費生となり、三八年三月に卒業、引き続き補習科に学んで、翌三九年三月に修了、函館区立弥生尋常高等小学校に訓導として赴任した。一方、啄木は四〇年五月に故郷の渋民村を離れて函館に着き、友人の世話で弥生小学校の代用教員となり、六月一二日から勤務した。当時、同校には大竹敬三校長を中心に七名の男

性教員と七名の女性教員がいたが、その中の清楚な橘智恵子の姿に啄木は強くひかれた。しかし、啄木はその年八月一五日の函館大火のあと、九月一一日に退職し札幌に移っているので、啄木が彼女といっしょに勤めていたのは三か月に過ぎなかった。

智恵子もその後、教職を辞して札幌の実家に帰り、四三年五月に空知郡北村で牧場を経営する北村謹と結婚して六人の子をもうけたが、産褥熱のために大正一一年（一九二二）一一月一日に三四歳の若さで世を去った。

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ
それだけのこと〔握・四一七〕

わかれ来て年を重ねて
年ごとに恋しくなれる
君にしあるかな〔握・四三四〕

長き文
三年のうちに三度来ぬ
我の書きしは四度にかあらむ〔握・四二六〕

など二二首はいずれも智恵子に捧げた歌である。啄木は智恵子に対する切ない思慕を歌うことによって、都会での苦しい現実を忘れようとした。『悲しき玩具』にも、

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り来し
バタかな。〔悲・五九〕

の歌がある。このバターは智恵子の嫁ぎ先、北村牧場でこしらえたものであった。

また、啄木が土岐哀果と雑誌「樹木と果実」の発行を計画して、資金を募集したときに最初に金を送ってきたのは智恵子であったことが「樹木と果実」の出納簿からわかる。啄木の明治四四年一月六日付の書簡に「お嫁に来ましたけれどもとのまんまの智恵子ですから」とあったという。これから考えると、智恵子は啄木に対していつまでも清純な思慕の気持があったように思われる。

『石川啄木全集』には啄木が智恵子に宛てた書簡二通が収められている。

田村叶（たむら　かのう）

〔概括〕啄木の長姉サダの夫。

〔人物〕明治四年（一八七一）五月一一日、岩手県紫波郡室岡村（現、紫波町）に父田村又右衛門、母よねの二男として生まれ、末吉と名づけられた。後に叶と改名。明治一二年、八歳のとき、盛岡市青物町にあった私立高屋小学校に入学したが、翌年、紫波郡南伝法寺小学校に転じ、そこを卒業した。明治二〇年、一六歳のとき、北伝法寺役場に就職した。同二四年、啄木の長姉サダと結婚、翌年、長女のイネをもうけた。二六年、末吉を叶と改名した。役場を辞めて行商をするかたわら付近の山林の管理をしていた田村は、二七年、東京深川の高島材木店に雇われた。二八年、長男の耕二郎が生まれた。三一年五月、仙台市の興信会社にかわった。

明治三三年一月に日本鉄道会社盛岡工場に塗装工手伝いとして就職し、盛岡市帷子小路に住んだ。啄木はこの年一月当時、盛岡中学の二年生であったが、それまでいた海沼家から田村の家に移り、ここから通学し、田村夫妻の転居とともに盛岡市内を転々とした。田村夫婦の間には、その後、次女のカツ、次男の哲郎、三男の圭一郎が生まれた。

三五年七月一五日、盛岡中学校五年生であった啄木は、一学期の学期末試験で不正行為を行ない、二度目の譴責処分を受けた。この時、田村叶は保証人として召喚されている。

三六年一〇月、田村は鉄道工場を退職、翌三七年二月、秋田県鹿角郡小坂村（現、小坂町）に移り、小坂鉱山で塗装工として働いた。三九年二月に妻のサダを肺結核で失い、さらにこの年九月には三男の圭一郎を、一二月には次女のカツを失った。その後、昭和八年に小坂鉱山を退職するまでの二九年間を独身寮で過ごした。退職後は上京して、東京目黒の長男耕次郎の家で暮らした。

田村叶は昭和一一年（一九三六）一月一〇日、六六歳でガンのため世を去った。

田村サダ（たむら　さだ）

〔概括〕啄木の長姉。田村叶の妻。

〔人物〕明治九年（一八七六）八月八日に岩手県南岩手郡日戸村（現、岩手郡玉山村日戸）の常光寺に、父石川一禎、母工藤カツの長女として生まれた。戸籍上は工藤カツ。啄木より一〇歳年長。

二四年、一六歳で田村叶と結婚、翌年、長女のイネを生み、その後、長男耕次郎、次女のカツ、次男の哲郎、三男の圭一郎を生んだ。

サダは弟の啄木を可愛がったらしく、吉田孤羊の『啄木を繞る人々』（改造社　昭和四・五）には、幼い頃からサダが啄木を母親のように可愛がり、中学時代も夜ふかしする啄木の世話をして、いつまで

も床に入らなかったことが書かれている。

かぎりなき智識の欲に燃ゆる眼を
姉は傷みき
人恋ふるかと（握・一七九）

の歌に詠まれている姉は、サダのことである。

啄木と節子の結婚についても、両親の説得から、堀合家への結婚の申し込みなどサダが骨折った。明治三七年一月一四日の啄木の日記には、

田村姉より来書あり。予がせつ子との一件また確定の由報じ来る。待ちに待ちたる吉報にして、しかも忽然の思ひあり。ほゝゑみ自ら禁ぜず、友と二人して希望の年は来りぬと絶叫す。

とある。

妹の三浦光子の『兄啄木の思い出』には「田村の定子姉が万事引き受けてその労をとってやった。兄は田村の姉に対しては真実の親しみをもっていたから、たいへん喜んでいた。」とある。

サダは明治三九年（一九〇六）二月二五日に肺結核のため三一歳で死去した。その悲しみを啄木は小笠原謙吉（迷宮）宛の同月二八日付の書簡に、

私の姉、鹿角小坂に居候ひしもの、かねて肋膜炎と子宮病をわづらひ居候処、薬石遂に効なく、空しく成り候旨昨日電報まゐり候、兄弟四人の内最も不幸なりし姉、その不幸なる姉は遂に不幸の内にあの世の人と相成申候、私はこの度初めて身内の死に逢ひ申候、老母並に私の心中お察し被下度候。

と記している。啄木はまた、「渋民日記」の同年三月一九日のところにもサダの死を悼んで、

小坂の義兄から来信。姉の命日が先月二十五日であった事、死因が肺結核であった事、法名が妙訪禅定女である事、漸やくわかった。あゝ不幸な姉は遂に不幸の内に五人の子女を残して死んでしまったのだ。

と書いている。

土井晩翠（どい　ばんすい）

〔概括〕当時、わが国の代表的詩人として島崎藤村と並び称せられた。啄木は東京からの帰途、節子との結婚式を控えながら仙台に下車して晩翠宅を訪問、仙台に一〇日ばかり滞在した。

〔人物〕詩人。英文学者。明治四年（一八七一）一二月五日、林七の長男として仙台に生まれた。本名、林吉。姓の土井はッチイと言っていたが、昭和七年（一九三二）ごろから俗称にしたがってドイと

いうようになった。彼は小学校卒業後、家業に従事したが、向学心抑えがたく通信教育を受け、仙台の第二高等中学校（旧制第二高等学校）を経て東京帝国大学英文科に進み、同三〇年に卒業した。在学中に新体詩を「帝国文学」に発表、三一年には「星落秋風五丈原」「荒城の月」などを発表し、これらの詩編を収めて同三二年四月に博文館から刊行した詩集『天地有情』は、日清戦争後の高揚した国民感情に迎えられて好評を博し、晩翠はわが国の代表的詩人として島崎藤村と並び称せられた。三三年に母校の第二高等学校の教授となって仙台にもどり、三四年間にわたって教授の職にあった。三四年六月から翌年一一月までヨーロッパに留学した。明治三九年には詩集『東海遊子吟』を出している。また、カーライル『英雄論』、ギリシャの長編叙事詩「イーリアス」「オデュッセーア」などの翻訳をしている。芸術院会員。仙台名誉市民。昭和二五年（一九五〇）には文化勲章を受けた。

啄木は明治三八年（一九〇五）五月、東京からの帰途、仙台で下車、晩翠を訪問している。

この前の年、明治三七年の一二月二六日に父の一禎が曹洞宗宗務院から宗費滞納のために宝徳寺住職を免じられ、翌年一月一五日にはそれが「曹洞宗報」第一九四号に告示され、一家は三月二日に宝徳寺を退去した。明治三七年一〇月三一日に詩集刊行のために上京して、そのまま東京での滞在を続けていた啄木は、職を失った父に代わって一家の生活を支えねばならぬ立場になったが、ただ懊悩するばかりで、借金生活をつづけ、五月二〇日に東京を発ったが、仙台で下車し、土井晩翠を訪ねたりして二九日まで滞在、結局、自身の結婚式に啄木は出席せず、有名な「花婿欠席の結婚式」となった。

なぜ啄木は節子との結婚式が迫っていたにもかかわらず仙台に立ち寄って晩翠を訪ねたのであろうか。明治三八年に啄木のが「岩手日報」に発表した随想「閑天地」に置いて「我が詩壇の暁鐘として又、壮大の詩風を独占したる観あるに於て彼が名や少なくとも永く日本詩史に伝らざるべからざる也」「逢ふて詩談を交へんとするの情あり。我仙台に入るや、招かれて一夜大町の居にこの幸福なる詩人を訪ふ。」などとあるのを見ると、自身の苦悩を忘れたいがために、かねてから憧れていた晩翠を訪ねたものと思われる。そこでの話は、晩翠のヨーロッパ遊学中の話や西洋の音楽の話が主なものだったらしい。土井晩翠夫人の書いた随筆『藪柑子』によると、啄木は母が重態だという妹のにせ手紙を示して原稿料が届くまでと晩翠夫人から一五円借用し、旅館の支払いも土井家に任せたらしい。

晩翠は昭和二七年（一九五二）一〇月一九日に八一歳で世を去った。

土岐哀果（とき　あいか）

〔概括〕二人が交遊をもったのは啄木最晩年の一年数か月の短い期間であったが、二人は思想でも歌風でも通じるところがあり、固い友情で結ばれ、互いに影響を受けた。貧困と病苦に苦しむ啄木一家を助け、死後もその遺族の世話をした。

〔人物〕歌人。国文学者。明治一八年（一八八五）六月八日、東京市浅草区松清町（現、台東区西浅草一丁目）の真宗大谷派寺院の等光寺に父善静、母観世の次男として生まれた。号は哀果。父は和歌を愛し、善麿も早くから作歌の手ほどきを受けた。東京府立第一中学校（現、日比谷高校）を経て明治三七年（一九〇四）に早稲田大学英文科に入学、若山牧水、北原白秋らと交わり、金子薫園に師事して白菊会に加わり、湖友と号して短歌を発表した。

明治四一年に早稲田大学英文科を卒業し、読売新聞の記者となった。

明治四三年三月、若山牧水が歌誌「創作」を発刊すると、これにローマ字表記、三行書きの短歌を発表、同年四月には第一歌集『NAKIWARAI』をローマ字ひろめ会から刊行した。日常生活の哀愁を歌ったローマ字三行書きの歌集は歌壇の注目を集め、とくに啄木に深い影響を与えた。啄木は八月三日、「東京朝日新聞」に書評「"NAKIWARAI"を読む」を発表して「歌と行住を接近せしめた」と評価し、同年一一月に発行した『一握の砂』を三行書きに書き改めた。

当時、善麿は杉村楚人冠を通じて堺利彦を知り、クロポトキンの『麺麭（パン）の略取』を読んだりして社会主義への関心を深めていたので、啄木と思想的に共通するところがあり、啄木と善麿は翌四四年一月一三日と一六日に会って、雑誌「樹木と果実」を発行して「我々の雑誌を文学に於ける社会運動という性質のものにしやう」と合意した。雑誌の名の「樹木と果実」は啄木の「木」と善麿のペンネーム哀果の「果」を入れたものである。しかし、この計画は啄木の病気の悪化や印刷所とのトラブルが原因で陽の目を見ずに終わった。

病に倒れた啄木は四五年四月ごろ、薬代にも事欠く状態だったので、啄木は善麿に『一握の砂』以後の歌稿ノートと引き換えに、東雲堂から原稿料の前借をする交渉をしてくれるよう頼んだ。善麿は東雲堂に赴いて社主の西村陽吉と交渉して二〇円の稿料を得て啄木のもとに持参し、歌稿ノートを受け取った。善麿により『悲しき玩具』の名を付けられた歌集は、啄木の死後の六月二〇日に東雲堂から刊行された。三月九日の母カツの葬儀、四月一五日の啄木の葬儀は共に善麿の生家である等光寺で営まれた。台東区西浅草にある等光寺の境内には、啄木の肖像をはめこんだ、

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で来しさびしき心〔握・二二〕

の歌碑が建っている。

善麿は大正二年（一九一三）五月には「呼子と口笛」など三五編の詩、散文詩五編、「時代閉塞の現状」などの評論一六編を収めた『啄木遺稿』を、また五月には『一握の砂・悲しき玩具合冊』を共に東雲堂より善麿自身の編集で刊行、同年九月には啄木の遺志をつぐ目的で文芸思想誌「生活と芸術」を創刊し、多くの生活派歌人を育成した。大正八年（一九一九）には『啄木全集』全三巻を新潮社から刊行してその印税を啄木の遺族に贈った。

善麿は同七年に読売新聞社を辞めて東京朝日新聞社に移り、昭和一五年（一九四〇）に退社するまで、社会部長、学芸部長、論説委員などを歴任した。一方、ローマ字運動、エスペラント運動を広め、国語表記の改革、日本および中国古典の研究、能楽の新作の創出などを行なった。『田安宗武』ほか多数の著書があり、芸術院会員、国語審議会会長となり、日中文化交流協会を創立するなど多方面にわたって活躍した。歌集『黄昏に』（明治四五）、『街上不平』（大正四）、『雑音の中』（大正五）などを出した。大正七年（一九一八）に『緑の地平』を出す頃からそれまで用いていた哀果の号をやめて善麿を用いるようになった。その後の歌集に、『六月』（昭和一五）、『周辺』（昭和一七）、『歴史の中の生活者』（昭和三三）などがあり、自由な用語と韻律で思索的な抒情を行なった。

善麿は昭和五五年（一九八〇）四月一五日に九四歳で死去した。『土岐善麿歌集』（昭和四六）、『土岐善麿歌論歌話』上・下（昭五〇）がある。

『石川啄木全集』には啄木が善麿に宛てた書簡一六通が収められている。

富田小一郎（とみた　こいちろう）

〔概括〕啄木の盛岡中学校一、二、三年生の時の担任教師。欠席を重ね、教室から抜け出すことも多かった啄木を厳しく叱ったが、啄木は退学した後も懐かしみ、慕っていた。

〔人物〕教育者。安政六年（一八五九）五月二二日に南部藩の御目付役であった父富田哲、母ミヨの二男として生まれた。藩校の作人館修文所を経て宮城英語学校（後の宮城県立仙台中学校）に学び、明治一〇年（一八七七）に卒業、東京大学予備門に学んだが学費がつづかず退学、このあと三菱商船学校に入学したが、健康を害して帰郷した。明治二四年に盛岡中学の教師となり、三四年に青森県立

第二中学校（後の八戸中学校）に転ずるまでの一一年間、算術、代数を教えた。後に私立作人館中学部長、私立商業学校校長、私立盛岡実践女学校の校長を歴任し、後の二つの学校を公立学校へ昇格させ、生涯を中等教育に捧げた。

啄木は盛岡中学校で一、二、三年生とひきつづいて富田のクラスに配属された。髯を蓄えた富田は当時、学校で一番怖い先生として恐れられていたようで、

よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口真似もしき〔握・一六三〕

と回想している。啄木は明治四二年（一九〇九）の秋に「岩手日報」に連載した随筆「百回通信」の中で「富田先生が事」と題して、

小生盛岡中学に入りて丙一年級たり。富田先生の受持に属す。上級の一友教えて曰く。富田先生は怖い先生也、怠けること勿れと。初めて先生を見るに、短躯童顔、顎下に鬚山羊に似たり。辺幅を飾らず、言辞に泥まず、而して風格自ら謹厳、生徒を見ること最初より児孫に対するが如し。成程怖さうな先生也と小生は思へりき。二年に進みて丁級に入る。復先生の受持なり。時十四歳。漸く悪戯の味を知りて、友を侮り、師を恐れず。時に教室の窓より、又は其背後の扉より逃れ出でて、独り古城趾の草に眠る。欠席の多き事と師に下口を取る事級中随一たり。先生より拉せられて叱責を享くること殆んど連日に及ぶ。偶々級友会を結んで先生を会長に仰ぐ。先生命じて丁二会といふ。蓋し丁二級の会なりし故也。

三年に進みて三度先生の受持に編入せらる。小生独り舌を鳴らして惟へらく、運の悪き事かなと。其夏会の修学旅行あり。等輩数名先生に率ゐられて一の関より気仙に出で、初めて海を見て釜石に到る。途上、先生の面前に先生の口吻を倣ねて恬として恥ぢざりし物は乃ち小生なりき。先生呆れて物言はず。予心に往年の腕白を恥ぢ合掌して遠くより謝す。

と記しており、彼の師に対する思いや、学級における啄木の様子が躍如として出ている。一方、富田小一郎は『不屈の人富田小一郎』（同書刊行会　昭和四八）に収められた文章の中で当時のことを、

自分は明治二四年から三四年まで盛岡中学に在職したがこの間に大分落第生を出した。一度や二度落第して閉口たれるようでは偉い者には成れないと信じた結果だが、普通の人物では何回落第させても大人物に成れない事に気付かなかった。啄木を彼が書いている通り屡々叱ったけれども将来文士になろうとした

彼に対して、何の効果もなかったと反省している。

と述べている。

富田は昭和二〇年（一九四五）二月二日に盛岡で八六歳で世を去った。

夏目漱石（なつめ　そうせき）

〔概括〕啄木が勤務した東京朝日新聞の文芸欄を主宰した専属作家。病気と貧困に苦しむ啄木に温かく接した。

〔人物〕小説家。英文学者。慶応三年（一八六七）一月五日（太陽暦、二月九日）に町方名主であった父夏目直克と母千枝の五男として江戸牛込に生れた。本名、金之助。

明治二一年（一八八八）高等中学校に入学、翌年に正岡子規を知った。同二六年に東京帝国大学英文科を卒業、東京高等師範学校、愛媛県尋常中学校（松山中学校）や熊本の第五高等学校の教師となり、英語を教えた後、同三三年に文部省留学生としてイギリスのロンドンに留学した。三六年に帰国した後は東京の第一高等学校および東京帝国大学の講師を兼ねながら、小説「吾輩は猫である」（明治三八）、「坊っちゃん」（明治三九）、「草枕」（明治三九）などを発表して文名を得た。四〇年には教職を辞して東京朝日新聞社に入社、「虞美人草」（明治四〇）、「三四郎」（明治四一）、「それから」（明治四二）、「門」（明治四三）を「朝日新聞」に発表した。四三年六月には胃潰瘍の手術をし、療養先の修善寺で危篤に陥るということもあったが、快復後は、「彼岸過迄」（明治四五）、「行人」（大正一～二）、「こゝろ」（大正三）、「道草」（大正四）、「明暗」（大正五、未完）などを発表していった。

啄木は漱石について、明治三九年六月の日記に、

学殖ある作家だから注目に値する。（中略）夏目氏は驚くべき文才を持って居る。しかし『偉大』がない。

と批評している。四一年には漱石の「虞美人草」を読んで宮崎郁雨宛の明治四一年五月一一日付書簡で、「才にまかせて書いたもの」と批判した。

啄木は四二年三月に校正係として東京朝日新聞社に入社したが、その頃に書いた「私は漱石の『それから』を校正しながら」で始まる原稿の断片が残っている。啄木の才能に着目していた漱石が、周囲の人に「石川君を校正係なんかに置くのは惜しい」と度々語ったことが、吉田孤羊の『啄木を繞る人々』（改造社　昭和四・五）に記されている。

漱石は四二年五月から「朝日新聞文芸欄」を主宰したが、啄木は「所謂青年大学派が自然主義を反省させる論陣であった」と評価し、明治四三年八月三日のこの欄に大木頭という筆名で「"NAKIWAR

AI」を読む」を発表した。

啄木が漱石と対面したことがある。そのきっかけとなったのは、朝日新聞社からロシアに派遣されていて、病気のため帰国の途中にインド洋上で没した二葉亭四迷の『二葉亭四迷全集』が朝日新聞社から刊行されることになり、その校正係となったことで、全集の編集事務にあたっていた西村酔夢が退社したため、啄木はその後任に指名されたことによる。第一巻が四三年五月に刊行され、第二巻の「ツルゲーネフの巻」の編集作業に入った啄木は、七月一日、東京虎の門の長与胃腸病院に入院中の漱石を見舞い、四迷がツルゲーネフの作品を訳した「けぶり」について教えを乞うた。漱石は五日に『ツルゲーネフ全集』の第五巻を貸して、これに収められた英文の「SMOKE」と四迷の翻訳「けぶり」との対比を勧めている。『二葉亭四迷全集』の第二巻は一一月に刊行された。啄木は日記に「四十三年中重要記事」として、「夏目氏を知りたると、二葉亭全集の事を以て内田貢氏としばしば会見したるとは記すべし」と書いている。内田貢とは評論家、翻訳家の内田魯庵のことで、魯庵は明治三四に丸善に勤めるかたわらロシア文学などを翻訳、紹介し、二葉亭四迷と親しかった。

漱石は、病床にあって貧困に苦しんだ啄木に、同じ朝日新聞社の社員ということで森田草平を通じて、四四年八月には漱石夫人鏡子と草平の連名で七円届けさせた。さらに翌年の一月には鏡子夫人から、一〇円の見舞金が啄木に届けられた。四月一五日に浅草の等光寺で行われた啄木の葬儀には漱石も参列しており、門下でもなかった啄木に漱石は温かく接したといえよう。

漱石は大正五年（一九一六）一二月九日に四九歳で胃潰瘍のため世を去った。全集として『漱石文学全集』全一〇巻・別巻一（集英社　昭和四五～四九）、『漱石全集』全二八巻・別巻一（岩波書店　平成五～七）などがある。

並木武雄（なみき　たけお）

〔概括〕啄木の函館時代の友人で、啄木が上京した頃に彼も上京し、親しく交際した。

〔人物〕啄木の函館時代の友人。明治二〇年（一八八七）四月二六日、元尾張藩の藩士であった加藤重禄の三男として東京に生まれた。一〇歳の時、遠縁にあたる、函館で靴商を営む並木家の養子となった。函館商業学校の一年上級の宮崎郁雨・丸谷喜市と知り合い、苜蓿社に加わった。函館商業学校を卒業して日本郵船に入社、啄木が函館に来た明治四〇年（一八〇七）当時はそこの社員であった。啄木は四〇年の日記帳の中に収められた「函館の夏」という文章には、「並木武雄（翡翠）君あり、年二十一、郵船会社にあり、一番ハイ

カラにしてヴァイオリンを好み絵葉書を好む」と書き、同四一年七月七日付の岩崎正（白鯨）宛のハガキでは「並木君は可愛い男だよ、無邪気だね。」と記している。

向学心を抑えがたくなった並木は上京して同年四月に東京外国語学校清語科に入学し、同じく四月に釧路を発って上京した啄木と再会、親しく付き合うことになる。同四三年一〇月二八日に啄木は長男の真一を失ったが、並木は葬儀委員長をつとめた。啄木は一一月一日付の宮崎郁雨宛書簡に、「並木君を葬儀委員長に頼んだ」「遺骸は並木君と老父とが守って一里半許りある火葬場へ向った」とある。

並木は東京外国語学校清語科を卒業後、三井物産株式会社に入社、小樽、函館の勤務を経て台北支店に勤めたが、そこで肺結核にかかり、大正一〇年（一九二一）に退社、神奈川県の片瀬で療養につとめたがかいなく、同一一年一〇月二八日に三五歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が並木に宛てた書簡九通が収められている。

西村陽吉（にしむら　ようきち）

〔概括〕東雲堂（とううんどう）の社主。啄木の二冊の歌集発行を引き受け、原稿料を前渡しするなど、貧窮と病苦にあえぐ啄木の最晩年を救うとともに、明治末期から昭和初期にかけて詩歌の雑誌の発行元となり、また数々の詩歌集を刊行した

〔人物〕出版業者。歌人。明治二五年（一八九二）四月九日、東京市本所区（現、墨田区）に生まれた。本名、江原辰五郎。同三七年に学習図書を出版していた東雲堂書店の住み込み店員となり、四一年に店主、西村寅次郎の養子となり、経営に参加し、従来の学習参考書中心から文学書中心に出版方針を切り替え、歌人の若山牧水とはかり同四三年三月に短歌雑誌「創作」を創刊した。その第三号には啄木の「手を眺めつつ」一六首が掲載された。

処女歌集の出版を考えていた啄木は、この年の四月に編集を終え、「仕事の後」と題をつけて春陽堂を訪れて出版を依頼したが、数日後にもどされた。節子の出産の日が近づき、出産の費用の捻出に迫られた啄木は、九月の末になって東雲堂を初めて訪れて西村に歌集の出版を頼んだ。一〇月四日に歌集の出版契約が整った。原稿料二〇円のうち一〇円を受け取った。この日は長男真一の生まれた日であった。九日には歌集の名を『一握の砂』とすることを通知、この日に原稿料の残り一〇円を受け取った。『一握の砂』は一二月一日に東雲堂から刊行された。定価は六〇銭であった。

西村陽吉は小径と号して短歌も作ったので、牧水編集の歌誌「創作」、北原白秋編集の「朱欒（ザンボア）」、土岐哀果編集の「生活と芸術」などの発行元となったばかりでなく、明治末期から大正期、昭和初期に

かけて、次のように代表的な詩歌集などを出版した。若山牧水『別離』（明治四三・四）、北原白秋『桐の花』（明治四三・一）、土岐哀果『黄昏に』（明治四五・二）、北原白秋『東京景物集及その他』（大正二・七）、久保田柿人（＝島木赤彦）・中村憲吉『馬鈴薯の花』（大正二・七）、三木露風『白き手の猟人』（大正二・九）斎藤茂吉『赤光』（大正二・一〇）、阿部次郎『三太郎の日記』（大正三・四）などがそれである。

啄木は明治四五年四月、朝日新聞社の給料を使い果たし、薬代にもこと欠くありさまであった。見舞いに来た牧水に、『一握の砂』以後の歌稿ノートと引き換えに、東雲堂から前借りをしてほしいと頼んだ。当時、東雲堂と気まずい関係にあった牧水は、土岐哀果を訪ねてこの件を依頼した。哀果はさっそく東雲堂に赴いて西村陽吉と交渉して、原稿料二〇円をもらって啄木に渡し、引き換えに灰色のラシャの表紙を付けた歌稿ノートを受け取った。こうして啄木の死から二か月後に東雲堂から出版されたのが第二歌集『悲しき玩具』で、西村から渡された二〇円の前渡しの原稿料は啄木の貧窮にあえぐ悲惨な最後の時期に幾分か潤いを与えた。大正二年（一九二三）五月には土岐善麿の編集で啄木の詩や評論を集めた『啄木遺稿』が、翌月には『一握の砂・悲しき玩具合冊』が東雲堂から刊行された。この稿料は貧困にあえぐ、啄木の妻の節子に渡された。

西村は昭和元年（一九二六）一〇月に「日本読書新聞」を創刊、同一七年八月には日本出版文化協会理事に就任した。

西村は小径と号して短歌も作り、歌集に『都市居住者』『街路樹』『第一の街』『緑の旗』、評論に『新社会の芸術』があり、啄木に関する著述に『評伝石川啄木』（素人社書屋　昭和八・二）、『石川啄木』（東雲堂新装社　昭和二三・一二）がある。

西村は昭和三四年（一九五九）三月二二日に浦和市において六八歳で死去した。

『石川啄木全集』には啄木が西村に宛てた書簡五通が収められている。

新渡戸仙岳（にとべ　せんがく）

〔概括〕啄木の盛岡高等小学校時代の恩師で、明治四二年一〇月に節子が家出をして盛岡の実家に帰った時には、啄木の頼みを受けて節子を説得して啄木のところにもどらせた。

〔人物〕教育者。郷土史家。安政五年（一八五八）一〇月五日生まれ。本名、蓬雨。明治一七年（一八八四）に気仙予備学校助教を振り出しに、気仙郡立高等小学校、盛岡高等小学校の校長を歴任した。啄木は明治二八年（一八九五）四月に盛岡高等小学校に入学し、三一年に卒業するが、その当時の高等小学校の校長。同三三年一一月

に市立盛岡高等女学校の校長となり、同校は三五年四月に岩手県立高等女学校と改称されたが、その後も明治四〇年四月まで校長をつとめた。その間、岩手県教育会の会長もつとめた。また、四〇年五月から翌年三月まで石巻女子実業学校の校長となった。

啄木は新渡戸について、小説「葬列」の中で、「馬町の先生といへば、説明するまでもない。此地方で一番有名な学者で、俳人で、能書家で、特に地方の資料に就いては、極めて該博正確な研究を積んで居る。自分の旧師である。」と書いている。

明治四二年六月に節子は北海道から上京した。彼女はそれまでの長期にわたる労苦で衰弱して体の不調に苦しむが、啄木はいっこうに適切な処置をとらなかった。その病苦や、啄木の母カツとの葛藤に耐えられなくなった節子は、一〇月二日の朝、置き手紙をして突然、京子を連れて家出をした。啄木は金田一京助の家にかけこんで助けを求めるとともに、新渡戸に帰京を説得してくれるよう依頼する書簡を送っている。金田一と新渡戸は啄木の懇請を受けて節子が啄木のもとに帰るように尽力し、節子は一〇月二六日に帰宅したが、この家出事件は啄木に深刻な精神的打撃を与えた。それは、一〇月一〇日付の新渡戸宛書簡の、

御存じ候はん如く私は非常に反抗心の強き男に有之候。それが今度は反抗どころか、全く妻の為に意気地なき限りの手紙を書き候ふを、若しこの上長くこの儘にしておかれるやうにては、その間に、私は自分の心がどうなるか解らず候。

なだという文面からもうかがえる。

その後、新渡戸は明治四五年五月から大正二年（一九一三）五月まで岩手日報社に客員として勤め、昭和三年には岩手毎日新聞社の社長となった。

著書に『岩手に於ける鋳銭』『南部藩の消防』『南部藩刑罰誌』などがあり、郷土史研究の功績により、第一回岩手日報文化賞を受けた。

新渡戸は昭和二四年（一九四九）九月二六日に九二歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が新渡戸に宛てた書簡一〇通が収められている。

野口雨情（のぐち　うじょう）

〔概括〕啄木の「小樽日報」記者時代の友人。

〔人物〕民謡・童謡詩人。明治一五年（一八八二）五月二九日、茨城県多賀郡中郷村磯原（現、北茨城市磯原町）に父良平、母てるの長男として生まれた。家は代々回船業を営み、その屋敷は磯原御殿と呼ばれた。本名、英吉。明治三四年（一九〇一）、東京専門学校

（現、早稲田大学）英文科に入学したが、一年で退学、帰郷して家業に従うかたわら民謡風の詩を作り、三八年に創作民謡集『枯草』を自費出版した。これは日本最初の創作民謡集であった。家業の破綻により、三九年に樺太に渡り再起を期したが失敗、再び上京、同四〇年の早稲田詩社の結成に加わった。生活に困り、五月に坪内逍遥の口ききで札幌の「北鳴新聞」の記者となった。

啄木と知り合ったのは同年九月二二日、「北門新報」の記者、小国露堂の下宿でのことで、啄木はその日の日記に、

夜小国君の宿にて野口雨情君と初めて逢へり。温厚にして丁寧、色青くして髯黒く、見るからに内気なる人なり。共に大に鮪のサシミをつついて飲む。

と初対面の印象を記している。雨情と啄木は露堂の紹介で「小樽日報」の創業にかかわることになり、一〇月に共に三面担当の記者となった。間もなく共謀して主筆の岩泉江東の排斥を企てたが成功せず、雨情が社を追われる結果となった。啄木も二か月後に事務長の小林寅吉とトラブルを起こして退社した。

その後、二人は北海道時代に二度ほど会ったきりで交遊は終わったが、啄木は雨情のことを「小樽日報」創業の頃の日記に、「天下一の好人物」（明治四〇年一〇月二日）、「交情は既に十年の友の如し」同一〇月三日）とまで書いている。これは、当時の二人の境遇や生い立ちなどに互いに共通するものがあったからであろう。

大正七年（一九一八）に水戸に出た雨情は、時代的な民謡・童謡の流行とともに創作を再開、民謡集『都会と田園』（大正八）、『別後』（大正一一）などを刊行、また児童雑誌「金の船」編集長となり、その童謡欄を担当、童謡集『十五夜お月さん』（大正一一）を刊行した。地方色を生かした素朴な味の中にしみじみとした哀愁をただよわせた作品は、中山晋平や本居長世らの作曲で愛唱された。北原白秋、西条八十らの都会的で華やかな作風と対照を示している。「証城寺の狸ばやし」「雨降りお月さん」「七つの子」「青い眼の人形」「シャボン玉」「波浮の港」「船頭小唄」などがその代表作である。

雨情は昭和一九年一月に栃木県宇都宮市鶴田に疎開し、その翌年、二〇年一月二七日に六四歳で世を去った。全集として『定本野口雨情全集』全八巻（未来社　昭和六〇～六二）がある。

『石川啄木全集』には雨情に宛てた啄木の書簡が一通収められている。

野村胡堂（のむら　こどう）

〔概括〕啄木の盛岡中学時代の友人。文学を愛好し、啄木に影響を与えた。

〔人物〕小説家、音楽評論家。明治一五年（一八八二）一〇月一五

日、岩手県紫波郡彦部村（現、紫波町彦部）に父野村長四郎、母まさの次男として生れた。本名、野村長一（おさかず）。二九年に盛岡中学に入学、金田一京助、及川古四郎と同じ学年で、啄木より二年上級であった。東京の第一高等学校を経て東京帝国大学法科に学んだが、父の死により学資が続かず四三年、卒業の直前に中退した。四五年に報知新聞社に入り、社会部長、学芸部長兼調査部長を経て編集局相談役となり、昭和一七年（一九四二）に退社した。

大正三年（一九一四）に「報知新聞」の政治面に人物評「人類館」を連載、その時に初めて胡堂の筆名を用いた。大正一一年、同紙に空想科学小説「二万年前」を執筆、その頃よりあらえびすの筆名で音楽評論を書くようになった。昭和七年（一九三二）、文芸春秋社の「オール読物」に捕物帳シリーズ「銭形平次捕物控」を発表、好評を博し、昭和三二年までに三八三編を連載した。西欧音楽にも詳しく、レコードのコレクター、音楽評論家としても有名で、著書に『バッハからシューベルトまで』（昭和七）などがある。

啄木との出会いは、盛岡中学の生徒であった及川古四郎から二年後輩である啄木の指導を頼まれたのがきっかけであった。及川が野村に啄木の指導を頼んだのは野村の文芸方面の才能を見込んでのことだったと思われる。以後「万葉集」の輪講会、校友会雑誌の編集などでいっしょになった。明治三四年九月には啄木が中心になって作った回覧雑誌「爾伎多麻」に野村は馮君の筆名で小説「唐葵」を、また野村長一の本名で「嗜好」と題する随筆を掲載した。さらに同年一二月、啄木主宰による歌会「白羊会」の詠草が「岩手日報」に七回にわたって発表されており、野村は「右近」の名で四首を載せている。

明治三五年一〇月、盛岡中学を退学した啄木は、文学で身を立てようと上京し、――月四日には上京して第一高等学校に通っていた野村を訪問し、野村から「君は才に走りて真率の風を欠く。着実の修養を要す。」と忠告された。翌日、野村は啄木を連れて神田周辺の中学校を編入について聞いて回ったが、欠員がないとのことで果たさなかった。啄木は三六年九月一一日付の野村宛の書簡で、

嘗て東都落塵の日、身も心も弱り衰へた自分のために、尽してくれた兄の行為はどれほどであつたらう。果た杜陵高会の時に燃え初むる我情操の曙を、文芸の歌壇に導いて呉れた主なる人はだれであつたらう。すでに生の感情の麻痺し去らざるに於て、少なくとも兄は我半生涯の恩人ではないか。

と感謝している。

野村は昭和三八年（一九六三）四月一四日に八一歳で世を去ったが、彼は東京帝国大学の学生時代に父を亡くして学資が続かなくなったばかりに学業をやめなければならなかった。その苦渋を忘れなかっ

た彼の遺志により、昭和三八年（一九六三）に貧しい若者のために奨学金を交付する野村学芸財団が設立された。

『石川啄木全集』には啄木が野村に宛てた啄木の書簡一七通が収められている。

平出修（ひらいで　しゅう）

〔概括〕啄木の「明星」における先輩。「スバル」は修宅から啄木を編集兼発行人として刊行された。大逆事件の弁護人であった修から資料を見せてもらうなどしたことがきっかけで、啄木は思想上に大きな影響を受けた。

〔人物〕弁護士。歌人、評論家、小説家。明治一一年（一八七八）四月三日、新潟県中蒲原郡石山村（現、新潟市石山）に児玉郡三の八男として生まれた。筆号は露花、黒瞳子。家は代々庄屋であった。亀田高等小学校を卒業、一八歳のとき準教員検定試験に合格し、小学校の教員を六年間していた。文芸を好み、明治三三年五月、新詩社に入会し、短歌、俳句、評論を発表した。同年九月、高田市（現、上越市）の弁護士平出善吉の妹ライと結婚し、平出家に入籍した。三四年に上京して明治法律学校（現、明治大学）で法律を学ぶかたわら新詩社に出入りし、在学中に『新派和歌評論』（明治三四）と『法律上の結婚』（明治三五）を出版している。

明治三六年に明治法律学校を卒業、翌年に弁護士を開業し、法律と文学の方面で活躍した。四三年（一九一〇）六月に大逆事件が起こると、一一月に官選弁護人となって弁護を引き受けた。

修と啄木は三五年一一月九日の集会で初めて会った。当時、修は明治法律学校の学生、啄木は盛岡中学を退学して、文学で身を立てようと上京し、初めて新詩社の集まりに出席したのであった。修は啄木の才能に着目し、三七年一月の「明星」にこの年の活躍を期待することを書いた。また、三八年六月の「帝国文学」誌上で啄木の詩集『あこがれ』（明治三八・五）が酷評され時も、「今の最も新しき詩風の中にありて、啄木の詩は極めて明晰なるものなり。」と「明星」（明治三八・七）誌上で弁護している。

啄木が北海道にいた間は両者の交友は途絶えていたが、明治四一年に啄木が上京すると、五月一七日に新詩社の歌会で二人は再会したことが、その日の日記からわかる。

「明星」が四一年一一月に廃刊になった後、修は四二年一月から雑誌「スバル」の発行所を自宅に置き、経済的な負担を引き受けて力を注いだが、編集兼発行人は啄木で、二人の交友はここに深まった。

大逆事件に際しては、与謝野鉄幹に頼まれて官選弁護人になったといわれ、森鷗外のところに通って、社会主義・無政府主義につい

て理解を深め、石川啄木に事件の真相を伝えて思想的な影響を与えた。四四年一月三日の啄木の日記には、

平出君の処で無政府主義者の特別裁判に関する内容を聞いた。若し自分が裁判長だったら、管野すが、宮下太吉、新村忠雄、古河力作の四人を死刑に、幸徳大石の二人を無期に、内山愚童を不敬罪で五年位に、そしてあとは無罪にすると平出君が言った。またこの事件に関する自分の感想録を書いておくと言った。

と記され、一月四日、五日と陳弁書を借り出して筆写している。同月二五日の日記には、

かへりに平出君へよって幸徳、管野、大石等の獄中の手紙を借りた。平出君は民権圧迫について大いに憤慨してゐた。明日裁判所へかへすといふ一件書類を一日延して、明晩行って見る約束にして帰った。

同月二六日の日記には、

社からかへるとすぐ、前夜の約束を履んで平出君宅に行き、特別裁判一件書類をよんだ。七千枚十七冊、一冊の厚さ約二寸乃至三寸づゝ。十二時までかゝって漸く初二冊とそれから管野すがの分だけ方々拾ひよみした。頭の中を底から掻き乱されたやうな気持で帰った。

とあり、事件の衝撃の大きさがうかがえる。啄木は、これをきっかけに、社会主義思想に関心を深め、「'V' NAROUD' SERIES」の作品を書くに至った。

修は森鷗外の指導により、小説を書くようになり、大正二年三月に刊行した小説集『畜生道』に収められた「畜生道」「計画」では大逆事件を扱った。つづいて、事件の真相に迫る小説「逆徒」を雑誌「太陽」（大正二・九）に発表したが、この雑誌は発表と同時に発売禁止処分を受けた。

修は啄木の死後、「スバル」（大正元・九）誌上で『悲しき玩具』を紹介し、「石川君は詩人から思想家に転じようとして煩悶して居る間に死んで了った。」と書いている。

修は大正三年三月一七日に三六歳で世を去った。全集として『定本平出修集』全三巻（春秋社　昭和五六）がある。

『石川啄木全集』には明治四四年一月二二日付の平出修宛書簡一通が収められている。これは一月一八日に行われた大逆事件の判決を知った啄木の衝撃を伝える手紙である。

平野万里（ひらの　ばんり）

〔概括〕「明星」「スバル」時代の友人。

〔人物〕歌人。明治一八年（一八八五）五月二五日、埼玉県北足立郡大門村（現、浦和市大門）に平野甚三の次男として生まれた。本

名、久保。同三三年、六歳の時に一家は東京に移住して文具及びタバコの小売商を営むようになった。森鷗外には同二三年九月に妻の登志子との間に長男の於菟が生まれたが、翌月に登志子と離婚して本郷駒込千駄木町に移り、五歳まで於菟を近くに住む平野家に乳飲み子として預け、万里の母のタカに養育を任せたので、万里と於菟は乳兄弟となった。三五年に東京の第一高等学校に入学、三八年に卒業、東京帝国大学工学部応用化学科に進み、四二年に大学を卒業して、横浜の硝子会社に勤めたのち、南満州鉄道株式会社の中央試験所技師となり、大正元年にドイツに留学し、四年に帰国、農商務省の技師となった。同八年、フランスに留学し、一〇年に帰国した。

明治三五年、第一高等学校に入学して間もなく「明星」に加わって短歌を発表し、啄木とともに新人として注目された。東大に在学中の四〇年に歌集『わかき日』を刊行している。

鷗外が自宅で開催した観潮楼歌会には最初から参加し、世話係を勤めた。また、鷗外の没後、『鷗外全集』の編集には、『刊行会版』（大正一一年）でも『岩波版』（昭和一一年）でもかかわった。

啄木との交際は、明治四一年（一九〇八）四月に啄木が北海道から上京してから、新詩社の関係で始まった。同年九月一二日の啄木の日記には、「終日秋雨。午后並木君来り、携へて動坂の平野君宅の歌会に赴く。」とある。新詩社の歌会だけでなく鷗外宅の観潮楼歌会へも啄木は与謝野鉄幹に連れられて度々出席したから、二人はそこでも顔を会わせている。

雑誌「明星」はこの年一一月に一〇〇号をもって廃刊となり、その後の「スバル」が翌四二年一月から、発行所を平出修宅に置き、石川啄木・平野万里らの編集で刊行されたが、そこで軋轢が生じた。それは、一月一日発行の第一号の編集は万里が担当したが、それを飽き足らなく思った啄木が、二月一日発行の第二号の編集において万里の作品を含む短歌を六号活字に落として小さく組んだことから起こった。これを不当として、万里は抗議文を同号に掲載したが、啄木はこれに対して、同じ号の「編集後記」に、「小生は第一号に現はれたる如き、小世界の住人のみの雑誌の如き、時代と何の関係のない様な編集法は嫌ひなり。その之を嫌ひたるは主として小生の性格に由る、趣味による、文芸に対する態度と覚悟と主義に由る。」「六号にすると否とは一に小生の自由に候ひき。」と応じたので、二人の関係は決裂し、交友は一年足らずで終わった。

万里は昭和二二年（一九四七）二月一〇日に六一歳で世を去った。没後の同二四年に『晶子鑑賞』が刊行された。

藤田武治（ふじた　たけじ）

〔概括〕小樽時代の啄木より年少の友人。

〔人物〕明治二四年（一八九一）七月七日に北海道檜山郡江差町で和服仕立業を営む藤田長治の長男として生まれた。筆名、南洋。同三八年に江差尋常高等小学校を卒業、まもなく一家は小樽に移り、武治は雑穀問屋の浜名商会に勤務した。高田治作（紅果）と同い年で仲が良かった。雑穀問屋に勤務したが、仕事に興味が持てず、小樽日報の見習記者を志願して、その関係で啄木を訪ねている。

四〇年一二月二二日の啄木の日記には、「夜、藤田武治来り、切に人生を解するの途を訴ふ、大に個人主義を説く。」とある。高田よりも先に一人で啄木を訪ねたらしい。

あをじろき頬に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人〔握・三六〇〕

の歌は藤田がモデルと見られる。藤田は高田治作とともに四一年三月一五日に啄木を訪ねており、藤田はその日の日記に、「夜八時頃秋の月の如な光に照されて紅果と啄木先生を訪ふ。先生と云ふても何だか馬鹿にしてゐるやうだが、兎に角啄木さんは例によつて例の元気。地球のはづれにおしとめられるように感ぜられて、堪へられなくなつたので逃げて来た。二、三日中に上京して一つ奮つて見る覚悟だ、家内は函館に置いてゆくつもりだ、といはれた。」と書いている。上京した啄木が土岐哀果と雑誌「樹木と果実」を発刊しようとしたときには、藤田は高田治作とともに協力しようとした。

藤田は明治末年に浜名商会を退職し、小樽郡色内町（現、小樽市色内）で雑穀店を開業したが失敗し、帯広、名古屋、小樽を転々としたのち、札幌に住み、昭和一三年、肺結核のために四九歳で不遇のうちに世を去った。

藤田は小樽の雑誌「海鳥」創刊号（大正元年八月）に「石川啄木氏の面影」という回想を発表している。

『石川啄木全集』には啄木が藤田に宛てた書簡が九通収められている。

堀田秀子（ほった　ひでこ）

〔概括〕啄木の渋民尋常高等小学校代用教員時代の同僚で、啄木にとって渋民の甘美な思い出を誘う懐かしい存在であった。

〔人物〕啄木の渋民尋常高等小学校代用教員時代の同僚。明治一八年（一八八五）三月二九日、岩手県北岩手郡沼宮内町（現、岩手郡岩手町）で父寅治、母りんの次女として出生。本名ヒデ。青森県三戸郡八戸尋常高等小学校、三戸郡八戸実業補習学校を経て、三八年三月に岩手県師範学校女子部を卒業、岩手郡平館尋常高等小学校訓

導となったが、翌三九年一〇月に上野さめの後任として渋民尋常高等小学校の訓導となり、四一年一二月に九戸郡種市尋常小学校に転任するまで二年三か月間在任した。啄木は四〇年四月には同校を免職になったから、同僚として勤務したのは約半年間にすぎなかったが、啄木の心に若く美しい女教師として甘い思い出を誘ったらしい。

啄木は明治三九年一〇月の日記に、

上野女史のかはりに、矢張師範校出の堀田秀子といふ丸顔の人が来た。後に至つて予の知つた所では、この人も亦予のために親しむべき人である。

と書いている。翌四〇年三月二〇日に啄木は卒業生のために送別会を開いて、この日のために彼が作った「別れ」という題の歌を高等科の女生徒五人に歌わせた。その日の日記に「堀田姉のオルガン、予のヴァイオリン、この日の最も美しい聴物であつた。」と記している。

啄木の日記によれば、同年四月一日に啄木は遠藤校長に辞表を提出した。そこへ助役で学務委員を兼ねる畠山亨が来て、啄木に留任を勧め、校長には辞表を返すように言った。すると啄木は「私だって唯戯談に出したのではありませんから何卒進達の手続を願ひます。」といっていつまでも啄木と校長と押し問答が続いた。その時、堀田秀子が「それでは当分私がお預かり致して置きます。」といって取ってしまったらしい。

しかし四月一九日に啄木は高等科の生徒を連れて平田野で校長排斥のストライキを決行し、翌日、校長は転任となり、二一日には啄木も免職になった。

一家が離散し、五月四日に彼は妹といっしょに北海道に赴くが、出発の前の晩に堀田を訪ねている。五月三日の日記には、

夜ひとり堀田女史を訪ふ。雨時々落し来ぬ。程近き田に蛙の声いと繁し。あはれ、この室にしてこの人と相対し、恁く語ること、恐らくはこれ最後ならむと思へば、何となく胸ふさがりて、所思多く、予は多くを語るを得ざりき。友も亦多く語らざりき。誠に、逢ふは別るゝの初めならむ。しかれども、別るゝは必ずしも逢ふの初めならざらむ。予は切に運命を思へり——思出長かるべき夜、家にかへりてよりも予は猶さまざまの思ひに駆られたり。

と記している。『一握の砂』に、

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聴きけれ〔握・二四九〕

と詠んでいるのは、この夜のことである。

翌四一年四月、小説家を志した啄木は北海道を去って上京し、一か月ほどの間に六つの作品、約三〇〇枚を脱稿したが売れず、生活に困窮して自殺を考えた。そんな時に彼女から来た、渋民村を去ることを記した手紙を読んで、七月二三日の日記には、

枕の上で渋民の秀子さんからの手紙を読んだ。温かい涙が不意に両頬をぬらした。心ゆく許り泣いた。――自分が渋民を去ってから、故郷と秀子さんとは同じものになつて頭の中に宿つてゐた。渋民を思ひ出して此人を思出さなかつた事はない。そして、此人を思出して渋民を懐はなかつた事はない。

と記している。秀子は啄木にとって渋民の甘美な思い出を誘う懐かしい存在だったのである。彼女は啄木の小説「足跡」「道」にも主人公に好意的な女性教師として描かれている。

堀田秀子は明治四一年一二月、九戸郡種市尋常小学校に転出し、大正五年（一九一六）に大矢謙吉と結婚したが、結婚後も小学校の教師を続けた。

秀子は昭和三九年（一九六四）三月二〇日に七九歳で鎌倉市で世を去った。

堀合忠操（ほりあい　ちゅうそう）

〔概括〕啄木の妻、節子ならびに宮崎郁雨の妻フキ子の父。

〔人物〕安政五年（一八五八）一一月一日、岩手県南岩手郡上田村（現、盛岡市上田）で南部藩士堀合貫作忠行の長男として生まれた。幼名、直太。陸軍士官を志して仙台の陸軍教導団を経て、東京の陸軍士官学校に進んだが、父が失明したため中途退学して郷里に帰り、岩手郡役所の兵事係や学務係を勤めた。十七歳年下のトキと結婚して三男六女をもうけたが、啄木の妻となった節子はその長女、宮崎郁雨の妻となったフキ子は次女である。郡役所を退職した後、明治三九年（一九〇六）には岩手郡玉山村村長の職についた。四年の任期を勤め、同四四年には樺太定置漁業水産組合の主事の職を得て盛岡の家を処分して函館市富岡町に移住し、二〇年間勤務した。

忠操は、節子と啄木との結婚に強く反対し、節子の監禁騒ぎまであった。啄木が文学に凝って欠席が多く、成績不良であり、からだが弱いというのが反対の理由であったが、どこまでも結婚をあきらめない節子の一途さや、子どもをかばう妻トキの情愛、それに結婚を許さないと二人が思いつめて大事を引き起こしかねないという節子の叔母の説得もあって、忠操はやむなく結婚を承諾したらしい。

結婚に強く反対した忠操ではあったが、しかし結婚後は、生活に窮した啄木らのために金百円を与えたり、また、啄木を渋民村の代用教員に採用してもらうように友人の郡視学、平野喜平に頼んだり

している。

なお、四四年三月、忠操が函館にある樺太建網漁業水産組合連合会に就職したため、函館に移住することになり、節子はその堀合一家を見送るために盛岡の実家に帰りたいと頼んだが、前々年秋の節子の家出事件にこりた啄木はこれを許さず、トラブルとなり、そのため堀合家は啄木により義絶された。これは、病苦や貧困からくる啄木のいらだちのせいであろう。

明治四五年四月に啄木が世を去り、節子は千葉県安房郡北条町（現、館山市）八幡に行き、そこでコルバン夫妻の世話で六月一四日に無事に房江を出産することができた。しかし、間もなく節子と二人の娘は八月一五日にそこを去って忠操の住む函館に赴いた。函館では実家の近くに間借りした節子一家を親身に世話をした。節子が死ぬと、遺児の京子と房江を引き取り、わが子と分け隔てなく育てた。忠操の三女の孝子は、節子を看病したときに感染したと思われる肺結核のため大正七年に二八歳で死亡した。忠操は大正八年には妻を失う不幸にも見舞われたが、啄木の遺児の養育を一身に引き受けた。

京子が須見正雄を婿に迎えて、石川家の再興の責を果たした忠操は、残る房江の成長を楽しみにしつつ過ごしていたが、昭和五年一二月六日に京子が、そして一三日後の一九日に房江が相次いで世を去った悲嘆は大きく、翌六年（一九三一）七月一九日、七四歳で世を去った。

堀合家のことについては、忠操の息子で、節子の弟にあたる堀合了輔の書いた『啄木の妻節子』（洋々社　昭和四九・五）が詳しい。

前田儀作（まえだ　ぎさく）

〔概括〕浪漫的な詩を書き、雑誌「白百合」を刊行して、啄木が敬愛した年上の詩人。

〔人物〕詩人・歌人。元治元年（一八六四）三月三日に兵庫県で生まれた。筆名、林外。東京専門学校（現、早稲田大学）を卒業後、東京外国語学校に学んだ。

明治三三年四月、雑誌「明星」創刊号に短歌を発表し、新詩社の同人として活躍したが、翌三四年に脱退して、岩野泡鳴・相馬御風らと東京純文社を結成し、雑誌「白百合」を創刊、三八年には詩集『夏花乙女』を出版した。

啄木は前田を詩壇の先輩として敬愛し、「白百合」に同三六年七月から三九年の四月にわたって詩や文章をたびたび載せている。啄木が前田に宛てた三七年九月三日付の書簡には、「夏が秋と相成り候へど、兄の詩のみハ常夏の花姿。黄塵万丈の巷に身はあり乍ら、心ハこの黄金幻境に住するの人、恋しく候。」とある。「黄金幻境」

は啄木が明治三七年六月の「明星」に発表した詩の題名であって、詩を書き、雑誌「白百合」を刊行する前田を、この頃の啄木が詩壇の先輩として深く敬愛していたことを示している。

前田は昭和二一年（一九四六）七月一三日に八二歳で世を去った。『石川啄木全集』には啄木が前田に宛てた書簡二五通が収められている。

丸谷喜市（まるや　きいち）

〔概括〕函館時代に知り合ったが、啄木の晩年に深く交際し、喜之床に啄木を訪ねて交わした社会主義についての議論は『呼子と口笛』の詩に反映している。

〔人物〕経済学者。明治二〇年（一八八七）一〇月三日に北海道函館市東川町に父金太郎、母キリの次男として生まれた。函館市立宝尋常高等小学校を経て道立函館商業学校に学び、三八年に同校を卒業、北海道炭鉱汽船株式会社に就職したが、翌年、神戸高等商業学校に入学、四三年に卒業、東京高等商業学校専攻部に学び、四五年七月に卒業した。

函館商業学校で同級に宮崎郁雨がいた関係から、神戸高等商業学校に在学中の明治四〇年六月、「紅苜蓿（べにまごやし）」に丸谷桃浪の筆名で短歌六首を寄稿し、翌月には帰省して苜蓿社（ぼくしゅくしゃ）の会合に出席、啄木と面識を持った。

四三年に東京高等商業学校に入学すると、下宿を本郷弓町一丁目の明治館に定め、弓町二丁目の喜之床の二階に住む啄木を訪ね、これを機に二人の交遊はにわかに深まった。啄木は四五年三月に啄木の母が死亡したときには、土岐哀果に協力して葬儀の世話をした。その後、病状の悪化した啄木は日記の焼却を丸谷に依頼した。丸谷は妹の光子宛の遺書を代筆、啄木が四月一三日の朝に永眠した際には、焼香して遺体に別れを告げ、徴兵検査のため帰郷、七月に東京高等商業学校専攻部を卒業後、二年間の軍隊生活を送った。

大正三年（一九一四）に長崎高等商業学校の講師となり、七年には母校の神戸高等商業学校教授となり、経済学研究のため同九年までヨーロッパに留学した。その後、経済学博士となり、同校が神戸経済大学に昇格する当時には学長をつとめた。昭和二六年（一九五一）には招かれて甲南大学の創設にかかわり、初代経済学部長に就任、同四二年までつとめた。

四三年に弓町二丁目の喜之床に啄木を訪ねた丸谷は啄木と社会主義について盛んに議論したらしい。啄木の第二詩集『呼子と口笛』の「激論」と題する詩は、

われはかの夜の激論を忘るること能はず、

新しき社会に於ける，権力，の処置に就きて、
はしなくも、同志の一人なる若き経済学者Nと
われとの間に惹き起されたる激論を、
かの五時間に亘れる激論を。

で始まるが、ここに登場する「若き経済学者N」は丸谷がモデルである。

第一歌集『悲しき玩具』の編集が進んでいた頃、啄木は訪ねてきた丸谷に歌集の歌の大半を読んで聞かせた。この時の思い出を丸谷は『星に泉に』の中で、

『一握の砂』五百首を読みきかせし啄木の声いまも耳にあり

と歌っている。

明治四四年九月、宮崎郁雨が書いた匿名の手紙をめぐって啄木と節子の間にトラブルが生じた際には、丸谷は啄木・郁雨双方の友人としてその処理にあたった。この事件が世間に知られるようになってからは不貞説を否定する立場をとった。

啄木の公刊日記が議論されるようになった昭和一〇年代と二〇年の初めに、公刊を主張する金田一京助、土岐善麿らに対して、丸谷は啄木から再三、日記の焼却を依頼された立場から公刊に反対した。

大正一五年に啄木の遺児の京子は須見正雄を石川家に迎える形で結婚したが、正雄は丸谷の実兄である金次郎の妻の弟であるから、丸谷は石川家の遠い縁戚ということになった。

丸谷は甲南大学を退職したのち大阪産業大学に招かれ、昭和四五年（一九七〇）まで教授をつとめた。そして四九年（一九七四）七月一〇日に八八歳で世を去った。

三浦光子（みうら　みつこ）

〔概括〕啄木の妹。

〔人物〕旧姓、石川光子。戸籍名、ミツ。明治三一年（一八八八）一二月二〇日、岩手県北岩手郡渋民村（現、岩手郡玉山村）の宝徳寺に生まれた。啄木より二歳年少。渋民尋常高等小学校を卒業してから、盛岡に出て予備校である江南義塾に通ったのち、明治三八年（一九〇五）四月にミッションスクールの盛岡女学校に進んだが、父の一禎が曹洞宗宗務局より宗費滞納のかどで住職を罷免されたため、学費がつづかなくなり、四〇年三月ごろ退学した。五月四日には函館に向かう啄木と同じ船で北海道に渡り、夫の山本千三郎が小樽駅長になっていた次姉のトラの家で世話をうけた。

船に酔ひてやさしくなれる
妹の眼見ゆ
津軽の海を思へば（悲・三〇九）

の歌は北海道に向かう船中での妹を回想した短歌である。

八月に函館東川聖公会の伝道師、兵頭愛子を介して日本聖公会の牧師ミス・イバンスを知り、一〇月、日本メソジスト小樽教会で洗礼を受けた。ミス・イバンスから神学についての予備教育を受けたのち、四三年三月、神学校の入学試験に合格、翌四月に名古屋にあった聖使女学院に入学した。この学校は聖公会によって明治三九年（一九〇六）に中区白壁町に創設されたが、五年後に兵庫県の芦屋に移された。

クリストを人なりといへば、
妹の眼が、かなしくも、
われをあはれむ。（悲・一九二）

の歌は、聖使女学院に在学していた光子が夏休みに兄の見舞いに訪れ、八月一〇日から九月一四日まで病人ばかりの一家のために家事をしていた頃の作である。

光子は大正二年（一九一三）四月に聖使女学院を卒業、日本聖公会の婦人伝道師として札幌の教会へ赴いたが、間もなく健康を害して千葉県で静養、秋に気候温暖な徳島の教会に赴任した。その後、軽井沢、久留米、大牟田、東京と各地を回り、大正一一年四月、奈良において牧師の三浦清一と結婚、以後、清一とともに、福岡、熊本、阿蘇山麓、東京と居を移した。

この間、大正一二年三月に長女の幸子を、翌年一〇月には長男の賜郎を生んだが、昭和一二年（一九四四）四月に幸子を熊本の病院でジフテリアのために亡くし、太平洋戦争中に夫の清一が反戦運動で投獄され、日本聖公会から離脱するなどのことがあった。

昭和一九年四月、夫の清一が神戸市兵庫区の少女更生施設、愛隣館館長となって赴任したのについて光子も神戸市に移り、愛隣館の指導員となった。

昭和三七年三月に清一が死去したため、清一がしていた館長の仕事を光子が、理事長の仕事を長男の賜郎が引き継いで指導に当たった。四二年一一月、社会事業に尽くした功績により厚生大臣賞を受けたが、一年後の四三年（一九六八）一〇月二一日、脳軟化症のため、七九歳で世を去った。

幼い頃の光子は、

わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄など欲しとわめく子なりし（悲・二〇五）

の歌のように、啄木に似て才知の勝った、意志と負けん気の強い女性であったらしい。それだけに、別れたのちの二人は、互いに懐かしく焦がれ合ったようである。

朝はやく
婚期を過ぎし妹の
恋文めける文を読みけり（悲・六九）

この歌は、当時、旭川でミス・イバンスから神学についての予備教育を受けていた光子が渋民村にいた幼い頃を懐かしんだ手紙を啄木に送ってきたことを詠んだものである。啄木は、「ローマ字日記」の明治四二年（一九〇九）四月一八日のところに、光子からの手紙を紹介したあとで、その時の気持を、

性格のあまりに近いためであろう。予と妹は、小さい時から仲が悪かった。おそらくこの二人くらい仲の悪い兄弟はどこにもあるまい。妹が予に対して妹らしい口をきいたことはあったが、予はまだ妹がイジコの中にいた時から、ついぞ兄らしい口をきいたことはない！

ああ！　それにもかかわらず、妹は予を恨んでない。また昔のように叱られてみたいと言ってる――それがもうできないと悲しんでる！　予は泣きたい！

と書いている。

啄木との関係は、光子の書いた『悲しき兄啄木』（初音書房　昭和二三・一）およびそれを大幅に増補した『兄啄木の思い出』（理論社　昭和三九・一〇）に詳しく書かれている。

宮崎郁雨（みやざき　いくう）

〔概括〕啄木の函館以来の親友で、彼の才能を敬愛、貧窮にあえぐ啄木一家を援助し、啄木の没後も啄木一家の墓の建立、「啄木文庫」の創設などに尽力したパトロン。

〔人物〕啄木の函館時代以来の親友。義弟。明治一八年（一八八五）四月五日に新潟県北蒲原郡荒川村（現、新発田市荒川）に父竹四郎の長男として生まれた。本名、大四郎。宮崎家は二〇〇年以上つづいた旧家であったが、祖父の代に家運が傾き、新天地の北海道で家運の挽回を目指す両親とともに北海道に移住し、明治二二年（一八八九）から函館で育った。移住したころは事業がうまくゆかず、一

家は貧窮の生活を送ったが、二七年に父が「金久」という宮崎味噌製造所を起こして成功し、財をなした。三八年に北海道立函館商業学校を卒業、同年一二月に志願兵として野砲第七連隊に入隊し、翌年に除隊、家業の味噌製造を手伝った。

郁雨は商業学校時代から文学に関心を深め、明治三九年一〇月ごろに苜蓿社が結成され、四〇年一月に「紅苜蓿」の創刊号が発刊される際には同人として加わった。

郁雨の啄木との交渉は、啄木が四〇年五月に函館に移住した時から始まった。もともと啄木の函館移住は詩などを通じて知っていた苜蓿社の松岡蕗堂（政之助）の求めにより、「紅苜蓿」第一号に啄木が詩「鹿角の国を憶ふ歌」を寄稿、その縁で函館に来たのであった。啄木はここに集まった松岡蕗堂（政之助）・宮崎郁雨・大島流人（経男）・並木翡翠（武雄）・岩崎白鯨（正）らの人々と親交を結んだ。

文学青年であった郁雨はとくに啄木と親しく交わった。郁雨は四〇年に三か月間の勤務召集を受けて入隊したが、その間に彼は小樽に移っていた啄木を訪ねた。その時の思い出を啄木は

演習の暇にわざわざ
汽車に乗りて
訪ひ来し友とのめる酒かな〔握・三二六〕

と歌っている。ほかに、

大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ〔握・三二七〕

のような歌もある。

四一年四月、小説家を志して釧路を発って上京する途中に函館に寄った啄木は、家族を郁雨に託した。郁雨が翌年六月に家族を同道して啄木のもとに届けるまで、郁雨は家族に親身の世話をした。

四二年頃のものと見られる啄木の「借金メモ」の総額は一、三七二円五〇銭となっており、そのうち郁雨からの借金は一五〇円で最も多い。これから後も郁雨は度々貸してやっている。これは名目の上では貸すことになっていても、返してもらえる見込みは皆無に近いものであった。当時の郁雨は経営者ではなく、家業の手伝いをしていただけであったから、工面するのも大変だったと思われる。

『一握の砂』には

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。

の献辞がある。郁雨は金田一京助と並んで、生前から没後にわたる啄木の恩人であり、良き理解者であった。

昭和二三年(一九四八)一月に啄木の妹の三浦光子が刊行した『悲しき兄啄木』(初音書房)には、節子の郁雨にかかわる不貞説が記されていて話題になった。郁雨は生前、これに正面から弁解しようとしなかったが、これは光子の一方的な邪推、誤解であると思われる。

郁雨ははじめ結婚相手として啄木の妹の光子を望んだが、光子はキリスト教の婦人伝道師を志して洗礼を受けたばかりで、それを断ったので、啄木の妻、節子の妹の堀合ふき子と結婚した。

明治四二年六月、郁雨が啄木の妻の節子、母のカツ、長女の京子を伴って上京する際には、節子の実家である盛岡の堀合家に立ち寄って、ふき子と会い、帰りにも盛岡に下車して会っている。郁雨とふき子とは四二年一〇月二六日に結婚した。

郁雨は節子と気が合ったらしく、明治四四年九月、勤務召集中の郁雨が節子に出した手紙の文面が啄木の怒りをかい、夫妻のいさかいに発展、これがもとで郁雨は絶縁された。

それにもかかわらず、啄木の没後、節子の入院をはじめ、葬儀、遺児の世話などに力を惜しまなかった。また、節子の依頼を受けて函館図書館に「啄木文庫」を作り、啄木関係資料の保存、遺稿の出版、啄木一族の墓の建立にも力を注いだ。

明治四三年一二月に『一握の砂』が東雲堂から出版されると、郁雨はさっそく「函館日日新聞」に一二月一五日から翌年二月一〇日まで四五回にわたって歌の感想・批評を連載した。これは、『一握の砂』の批評としては最も早いものである。

昭和八年(一九三三)、それまで父の跡を引き継いでやってきた味噌製造の仕事をやめ、社団法人函館慈恵院(後の函館厚生院)の常務理事となり、社会福祉事業に専念した。昭和一一年同院を退職したが、その後も函館市立図書館、函館引揚援護局渉外課などで働いた。

郁雨の著書には、『函館の砂—啄木の歌と私と—』(東峰書院　昭和三五・一一)、歌集『自画像』、『郁雨歌集』がある。歌集の中には、

秀才みな早く世を捐て凡庸のわれ生きのこるその苜蓿社

唯一のわれの遺業となるならむ啄木の墓を撫でてさびしむ

などの歌がある。

郁雨は、家業の経営、後半生の社会福祉事業への尽力など、函館市民から敬愛された堅実な生活者で、その点で多数の人々から多額の借金をし、女性との関係でも家族を苦しめた啄木とは正反対の性格の人物であったが、啄木の才能を愛し、援助を惜しまなかった最大のパトロンであった。もしも郁雨や金田一京助の助力がなかったら啄木一家の暮らしはさらに悲惨を極めたことであろう。

郁雨は昭和三七年（一九六二）三月二九日に函館中央病院で七七歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が郁雨に宛てた書簡七二通が収められている。

森鷗外（もり　おうがい）

〔概括〕夏目漱石とならぶ明治文壇の重鎮で、啄木が編集を担当した雑誌「スバル」の中心的存在であった。啄木は鷗外の家で開かれた観潮楼歌会にも出席している。

〔人物〕小説家。陸軍軍医。文久二年（一八六二）一月一九日に石見国津和野（現、島根県鹿足郡津和野町）で父静男、母峰子の長男として生まれた。本名、林太郎。別号、鷗外、観潮楼主人など。父の森静男は津和野藩主亀井家の御典医だったが、維新後は上京し千住で診療所を開いた。鷗外も明治五年（一八七二）に上京、一四年に東京帝国大学医学部を卒業し、軍医に任官した。一七年に衛生学研究の目的でドイツに留学、二二年に帰国。落合直文や井上通泰、妹の小金井喜美子らと新声社（S・S・S）を結成し、二二年に西欧の抒情詩の訳詩集『於母影』を発表した。翌年に「舞姫」や「うたかたの記」などの小説を書いたのち、日清戦争に従軍して文学活動は中断したが、凱旋後、二九年に「めさまし草」を創刊し、小説の批評を試みた。三二年に小倉の第一二師団に左遷されたが、三五年東京の第一師団に復帰、日露戦争に従軍、四〇年一一月、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に就任した。

四二年に小説「半日」から創作活動を再開、第二の活動期を迎え、短編の「普請中」（明治四三）、「妄想」（明治四四）、長編では「青年」（明治四三）、「雁」（明治四四）などを書いた。

大正期に入っては「興津弥五右衛門の遺書」（大正元）、「阿部一族」（大正二）、「大塩平八郎」（大正三）などの歴史小説を書き、その後、史料の束縛を脱して主観を自由に生かした「山椒大夫」（大正四）、高瀬舟」（大正五）を書き、また資料に忠実な「渋江抽斎」（大正五）、「北条霞亭」（大正七）などを書きついだ。

啄木が鷗外とはじめて会ったのは明治四一年（一九〇八）五月二日の観潮楼歌会の席であった。観潮楼歌会は鷗外が東京本郷千駄木

の自宅で「明星」の歌人の与謝野鉄幹、「アララギ」の伊藤左千夫、「心の花」の佐佐木信綱やその門下の歌人たちを招いて催した歌会で、明治四〇年三月から四三年四月まで毎月一回開かれ、啄木は四一年五月二日、七月四日、九月五日、一〇月三日、一一月七日、四二年一月九日の六回出席している。

四一年五月二日には初めて観潮楼歌会で会った鷗外の印象を啄木は、

色の黒い、立派な体格の、髯の美しい、誰が見ても軍医総監とうなづかれる人であった。

と日記に記している。

啄木の鷗外との交流は、この歌会のほかに、雑誌「スバル」をめぐっても生じた。この雑誌は、「明星」が明治四一年一一月に第一〇〇号で廃刊になったのち、その関係者たちが四二年一月に発刊した唯美的、新浪漫主義的な傾向をもつ文芸雑誌で、森鷗外を指導者としていた。その初期の編集兼発行人は啄木であったから、二人はかかわりが深かった。

啄木は鷗外に出版社への小説原稿の斡旋も依頼している。四一年六月四日の啄木の日記には、「八時過、『病院の窓』と『天鵞絨』持ってって鷗外先生の留守宅に置いて来た。」とあり、その日の鷗外宛書簡では、

先生先刻お留守の所にお伺ひして、悪作を二つ、あとでお目にかけて下さるやうおねがひして、逃ぐるが如く帰ってまゐりました。

とあり、また

先生、もし（お暇のない所失礼ですけれど）御覧になって雑誌位には出せるやうでしたら、誠に恐れ入りますけれども、新小説なり何なりの人へ御紹介状でも下さるわけにはまゐりませんでせうか、先月の下宿料も払ひかねてゐる体たらくでございます。

と書いている。

そして八日の日記には、

降雹の真最中に森先生から手紙。予の小説二つ春陽堂にやってある事、次回の歌会に兼題など知らして来た。

とある。こうして鷗外が持ちこんだ啄木の小説のうち、「病院の窓」を春陽堂が引きうけてくれた。啄木は鷗外に、

『病院の窓』春陽堂にて買取被下候由、名もなき私などの作、先生の御辞ありしが為と偏に感佩いたし候。

と礼状を出している。その原稿料は四二年二月四日に春陽堂から二円七五銭が支払われた。啄木のもとに返されてきた「天鵞絨（ビロード）」の原稿には、誤字や訛りを訂正した鷗外による付箋が挟まれていた。

鷗外は大正一一年（一九二二）七月九日に六〇歳で萎縮腎のため世を去った。全集として『鷗外全集』全三八巻（岩波書店　昭和四六～五〇）がある。

『石川啄木全集』には啄木が鷗外に宛てた五通の書簡が収められている。

森田草平（もりた　そうへい）

〔概括〕啄木と同時代の小説家で、病床で貧困に苦しむ啄木に親切に接した。

〔人物〕小説家。大学教授。明治一四年（一八八一）三月一九日、岐阜県稲葉郡鷺山村（現、岐阜市鷺山）の地主、森田亀松の長男として生まれた。本名は米松。東京の第一高等学校を経て三九年（一九〇六）東京帝国大学英文科卒業。一高在学中から創作に関心をもち、西欧とくにロシア文学に傾倒、与謝野鉄幹・晶子夫妻を訪ねて新詩社にも加入した。東大英文科では夏目漱石の教えを受け、小説の方面でも師事した。漱石の自宅で開かれた木曜会の中心的存在となり、さらに漱石が朝日新聞社に入社したのちは、文芸欄の編集実務を担当し、みずからも評論を寄せた。それらの体験が後年『夏目漱石』正（昭和四二）・続（昭和四三）の漱石論を生んだ。

与謝野晶子や東大で級友の生田長江が始めた「閨秀文学会」の講師となり、その受講生であった平塚らいてうと深い関係となり、四一年三月二一日に心中未遂事件を起こして世間を騒がせた。社会的に葬られようとしたところを漱石に救われ、その好意により、明治四二年、事件に取材した長編小説「煤煙」を「東京朝日新聞」に発表して文壇に登場した。漱石の主宰する「朝日新聞」文芸欄の編集の仕事をしながら、『自叙伝』（明治四四）、『初恋』（明治四四）などを書いた。大正期には小説よりも翻訳を多く手がけたが、自伝的長編小説「輪廻」で復活、以後「吉良家の人々」（昭和四）その他の歴史小説を多く執筆した。翻訳にゴーゴリの『死せる魂』（大正四）などがある。

啄木は北海道から上京して間もない明治四一年五月一日に新詩社の集会の席で草平を知った。その日の草平についての印象を、「随分と意気阻喪してゐた。しかし自分はどうしてか、此の人が懐かしい。」と記している。

草平が「意気阻喪してゐた」のは、この年の三月に起こった塩原における心中未遂事件の後だったためで、同年五月七日付の吉田章三宛書簡で、

森田君は真面目に恋をした。そして恋人と共に心中しようとまで決心した。それで居て、『妾をあなたの心に従はせようと思ふなら、どうか妾を殺してください。』と再三女に侮辱されて、

森田君は遂に殺し得なかった。こゝが凡俗人を以て意気地なしと嘲ける点で、又昔の小説に無い所である。

と好意的な感想を述べている。

啄木は明治四四年二月四日に東大付属病院の青山内科に入院したが、啄木の日記によれば、入院中の啄木を森田はしばしば見舞っている。単に話し相手になるばかりでなく、征露丸を持って行ったり、知り合いの医者を紹介したりし、八月には漱石夫人の鏡子と草平との連名で七円を届けたりしている。四五年一月二一日付の草平宛啄木書簡で啄木から金策を依頼された草平は、漱石夫人の鏡子から一〇円をもらって届けてもいる。

森田は大正九年（一九二〇）から昭和九年（一九三四）まで法政大学教授をつとめ、第二次大戦後、共産党に入党して話題を呼んだが、昭和二四年（一九四九）一二月一四日、六八歳で病没した。

山本千三郎（やまもと　せんざぶろう）

〔概括〕啄木の次姉の夫。

〔人物〕明治三年（一八七〇）一一月九日、三重県員弁郡平古村（現、員弁町）に、明治維新前は桑名藩士であった山本常左衛門の三男として生まれた。長じて日本鉄道株式会社に入り、東京の上野駅に勤務した。同三〇年八月一一日に啄木の次姉のトラと結婚したが、それは千三郎が盛岡駅の助役をしていたときであった。再び上野駅に勤務したのち、北海道勤務となり、啄木一家が北海道に渡った頃には、彼は小樽中央駅の駅長で、間もなく岩見沢駅長となった。その後、長野駅長、神戸鉄道局福知山運輸事務所営業係主任等を歴任、昭和二年三月に、高知駅長兼神戸鉄道局高知出張所長を最後に定年で退職した。その後、昭和四年には富山市電軌課に勤め、退職後は滋賀県大津市膳所で暮らし、昭和二〇年（一九四五）三月二三日、七六歳で死去した。

啄木は明治三二年六月五日、盛岡中学二年の夏休みに初めて上京し、上野駅助役として勤務する千三郎の家に約一か月間滞在した。

啄木は明治三七年一〇月三一日に詩集刊行のために上京するが、それに先だって、九月二八日から一〇月一九日まで北海道を旅行している。当時、小樽中央駅の駅長であった千三郎から詩集刊行の資金を出してもらうのが目的だったらしいが、姉のトラが病気で床に就いていたこともあって不首尾に終わった。

吉田孤羊の『啄木を繞る人々』において千三郎は啄木のことを回想して、

私が北海道へ赴任する途中渋民村で半月ばかり遊んでゆきましたが、その頃の啄木はもう大分文学に深入りしつゝあったころで、私は高等師範の文科に入るようにすゝめましたが、啄木

は勿論あまり乗気になりませんでした。（中略）これは啄木が北海道にゐたころのことです。小樽駅の新築落成式で、文章に縁の遠い私が祝辞を書かなければならないので四苦八苦してゐる処へ、ひょっこり啄木が遊びに来て、私の書いたのを黙って見てゐましたが、『兄さん、そんな古くさい祝辞では一向面白くありませんよ。どれ、僕が直して上げる。』と言って、見てゐる間にスラスラ書き直してくれました。読んで見るとそのころ一寸珍しい口語体で平調に実によく祝賀の気持が現はれてゐるので、私は祝賀会場に出かけて得意になって読んだことがあります。

と話している。

明治三八年一月に父の石川一禎が宝徳寺の住職を罷免され、四〇年四月には啄木自身も渋民尋常高等小学校の代用教員の職を免職になったので、啄木の一家が離散した際には、啄木は妹の光子を連れて北海道に渡り、光子は小樽にいた山本家に預けられた。

函館、小樽での代用教員、新聞記者生活を経て、啄木は明治四一年一月、釧路新聞社に勤務するため、妻子と別れて小樽を発ち、釧路に向かう。そのときにも啄木は当時、岩見沢駅長をしていた山本宅に寄り、歓待を受けている。そのことを啄木は四一年一月一九日の日記に、

午后四時岩見沢に下車、橇を駆って姉が家に着く。札幌の妹も来て居たが、夕方の汽車で帰って行った。凍れるビールをストーブで解かし、鶏を割いて楽しい晩餐を済ました。

と記している。

明治四四年に節子の父の堀合忠操が樺太建網漁業水産組合連合会に就職するために盛岡から函館に移ることになったとき、節子が家族を見送るため盛岡の実家に帰りたいといったのを許さずトラブルがあった。こうした一家の不和や家族の病気、貧窮を見るに堪えられなくなって啄木の父の一禎は、九月三日に再び家出した。この時は、前年に師僧の葛原対月が死去していたので、一禎は、当時、北海道の手宮（小樽）駅長であった千三郎を頼った。翌四五年四月、啄木危篤の報を受けて上京し、最期を看取った一禎は、啄木の死後も山本夫婦を頼り、鉄道勤務の山本の転任に従って各地を転々とし、高知駅長の官舎で昭和二年二月二〇日に七八年の生涯を終えた。晩年の一禎が比較的に安らかな晩年を送ることができたのは千三郎・トラ夫妻が一七年にわたって世話をしたからである。

啄木が明治四五年（一九一二）一月二四日付で山本夫妻宛に送った書簡が『石川啄木全集』に収められているが、これは肺結核が悪化して衰弱が進んだ母カツの容態を知らせる、約二四〇〇字の長文の手紙である。

山本トラ（やまもと　とら）

〔概括〕啄木の次姉。山本千三郎の妻。

〔人物〕明治一一年（一八七八）一一月一日に父、一禎、母カツの次女として岩手県南岩手郡日戸村（現、岩手郡玉山村日戸）の常光寺で生まれた。戸籍上は工藤トラ。三〇年八月一一日にトラは千三郎と結婚した。当時、トラは母方の叔母、海沼イエの家で手伝いをしていて、海沼家に下宿をして盛岡駅に勤めていた千三郎と結ばれた。結婚後はとみ子とも称した。夫の転勤に従って各地を転々としたが、父の一禎を、明治四四年九月三日の家出以後、一七年間にわたって世話した。

トラは姉のサダや啄木に比べて比較的に平穏な生涯を送ったが、山本家が金銭面で啄木の思うようには援助をしなかったためであろうか、啄木はトラにはあまり好意を持たなかったらしく、明治四一年七月一八日付の光子宛書簡では、

兄さんはあんまりえらい為に、金持ちにもなれぬし、親孝行も充分出来ない。死んだ姉さんはしかたがないし、岩見沢の姉は馬鹿者だ。お前だけでも専心親孝行してくれ。

と書いている。

トラは昭和二〇年（一九四五）二月一四日に六七歳で死去した。千三郎が世を去る一か月半前のことだった。

与謝野晶子（よさの　あきこ）

〔概括〕啄木が同人として参加した「明星」の代表歌人で、啄木は晶子を姉のように慕った。

〔人物〕歌人、詩人。明治一一年（一八七八）一二月七日に堺県甲斐町（現、大阪府堺市甲斐町）で菓子商駿河屋を営む父鳳宗七、母つねの三女として生れた。旧姓、鳳。本名、志よう。堺女学校補習科を卒業後、家業の菓子屋の仕事を手伝いながら古典を独習した。

関西青年文学会の雑誌「よしあし草」での習作期を経て、三三年（一九〇〇）「明星」を発刊する東京新詩社に加入、主宰者与謝野寛（鉄幹）と恋愛し、翌年上京、歌集『みだれ髪』を刊行、結婚に至った。次いで『小扇』（明治三四）、『恋衣』（山川登美子、増田雅子との共著　明治三八）、『舞姫』（明治三九）など、華麗な歌風を展開した。日露戦争に従軍中の弟を思って明治三七年に発表した長詩「君死にたまふことなかれ」は文壇に論争を生んだ。四一年「明星」が廃刊された後は雑誌「スバル」などに寄稿し、大正元年に外遊中の夫の後を追ってパリに赴き、欧州各国を巡った。歌集『夏より秋へ』（大正三）には海外での作が多い。大正期には作歌のほか童話、小説、古典の口語訳を試みた。また広く社会問題の評論に取り組んで、「青鞜」の女性解放運動を助けたり、母性保護論争に加わったりして積極的に活躍した。

大正一〇年には文化学院創設に携わり、文化・芸術を重んじた自由な新教育に尽くした。昭和一〇年（一九三五）に夫の寛が没したあと、『新新訳源氏物語』（昭和一三～一四）を完成した。

晶子には、歌集だけでも、『みだれ髪』から没後に刊行された『白桜集』（昭和一七）まで二四冊があり、歌の数は一万数千首にのぼる。

晶子はこのように多方面な活躍をするかたわら一〇人をこす子どもを育てた。

雑誌「爾伎多麻」所収のものなど啄木の初期の短歌には、『みだれ髪』の模倣の作が多い。そして、啄木は上京するたびに新詩社に行っている。

四一年四月に北海道から上京した啄木は与謝野夫妻の家に二八日から数日間滞在した。晶子は啄木に親切に応対しており、この年八月には子どもが多くて苦しい生活の中から単衣の着物を縫って与えている。後になって啄木は夫の鉄幹には批判的な考えをもつようになったが、「晶子さんは別だ。予はあの人を姉のように思うことがある。」と「ローマ字日記」の明治四二年四月一二日のところに記しており、彼女のことをこの日記の中に六回も書いている。

昭和六年（一〇三一）の初夏、函館に遊んだ与謝野夫妻は、函館市立図書館で啄木の遺品を見、立待岬の墓に詣でた。

晶子は昭和一五年に脳溢血で倒れ、一七年五月二九日に六五歳で世を去った。全集に『定本与謝野晶子全集』全二〇巻（講談社　昭和五四～五六）がある。

与謝野鉄幹（よさの　てっかん）

〔概括〕啄木が同人となった新詩社の主宰者。

〔人物〕歌人、詩人。明治六年（一八七三）京都府下岡崎村（現、京都市左京区岡崎）にあった浄土真宗西本願寺派の願成寺に与謝野礼厳の五男として生れた。本名、寛。父礼厳の事業の失敗で寺を離れ、一時他家の養子になるなど苦労して育った。明治二五年（一八九二）に山口県徳山から上京し、落合直文の門に入り、あさか社に参加した。二七年に御歌所の古い歌風を攻撃した『亡国の音』を発表し、虎や剣を歌った慷慨調の作を収めた詩歌集『東西南北』（明治二九）、『天地玄黄』（明治三〇）で文壇に登場、三二年にみずから東京新詩社を結成し、翌年四月には雑誌「明星」を創刊、主宰した。

第二号から加入した鳳晶子（のち、与謝野晶子）と結婚、晶子、山川登美子らの登場によって「明星」は全国的に知られるようになり、その頃、中学生だった啄木も上級生だった金田一京助に教えられて加入した。「明星」は啄木のほか、北原白秋、木下杢太郎らのすぐれた詩人や歌人を育て、明治の浪漫主義運動に多大の功績を残

したが、明治四一年（一九〇八）一一月に第一〇〇号で終刊した。挫折感にうちひしがれた鉄幹は、晶子の骨折りで明治末期に長期外遊し、パリで新文学の吸収につとめたが、自然主義の台頭と新人の活躍に追いつけず、大正以降は歌壇から去った。晩年は語源研究を志し、『日本古典全集』刊行にも尽くした。

鉄幹は啄木の第一詩集『あこがれ』（明治三八）の序文を書いてやったり、新詩社内の金星会という短歌の通信添削の会を任せたり、また金銭的な援助もして、物心両面での援助を惜しまなかったが、四〇年代になると、啄木はこの恩義ある鉄幹に対して日記や書簡で無遠慮な批判の言葉を連ねるようになる。これは、小説を模索し、浪漫主義から自然主義へと脱皮しようとしていた啄木にとって、鉄幹の文学は古風で、あきたらなかったのであろう。

鉄幹は、明治四三年一〇月二七日に啄木の長男の真一が亡くなった時にも駆けつけるなど、啄木のことをたえず気にしていたが、明治四五年四月、啄木が亡くなった時には渡欧中だったので葬儀に参列できなかった。

昭和六年（一〇三一）の初夏、函館に遊んだ与謝野夫妻は、函館市立図書館で啄木の遺品を見、立待岬の墓に詣でた。

鉄幹は昭和一〇年（一九三五）三月二六日、肺炎のために六三歳で世を去った。

吉井勇（よしい　いさむ）

〔概括〕啄木の「明星」「スバル」時代の友人。

〔人物〕歌人、作家。明治一九年（一八八六）一〇月八日、東京市芝高輪（現、東京都港区高輪）に海軍軍人、吉井幸蔵の二男として生まれた。家は祖父の吉井友実が明治維新のときの立てた功績により伯爵の家柄であった。三三年に東京府立第一中学校に入学したが、三六年春、三年から四年に進級できず、私立攻玉社中学校四年に編入され、三八年に卒業したが、肋膜を病み、鎌倉に転地療養した。この年、新詩社に入り、雑誌「明星」に短歌を発表、作歌に励んだ。明治四〇年四月、早稲田大学高等予科に入学したが、ほとんど出席せず、間もなく政治経済科に移り、これも中退した。四〇年の末に北原白秋らとともに「明星」の行き方に不満を持ち、新詩社を脱退した。その後身ともいうべき「スバル」が四二年に創刊されると、石川啄木・平野万里らとともにその編集に加わり、北原白秋、木下杢太郎らとパンの会を起こして、耽美派文学の拠点とした。明治四三年九月、第一歌集『酒ほがひ』を刊行、青春の情熱を歌い上げて高い評価を受け、戯曲集『午後三時』（明治四一）とあいまって耽美派の代表として白秋と並び称せられた。その後『祇園歌集』（大正四）、『東京紅灯集』（大正五）などを発表したが、耽美的、情熱的な歌風は生涯を通じて変わらなかった。

啄木の吉井とは、啄木が明治三七年一〇月から翌年六月まで詩集『あこがれ』刊行のため上京していたときに、新詩社、与謝野鉄幹の家で会っていると思われる。しかし、四一年四月に北海道から上京した啄木は五月二日の観潮楼歌会に出席した日の日記では、「かねて案内をうけて居た森鷗外氏の歌会に臨む。客は佐々木信綱、伊藤左千夫、平野万里、吉井勇、北原白秋に予ら二人、主人を合わせて八人であつた。平野君を除いては皆初めての人許り。」と記している。

吉井との交友が頻繁になるのは、上京してから翌年にかけての時期で、明治四二年一月に「スバル」が創刊される前後の啄木の日記や書簡にはたびたび吉井の名が登場する。たとえば、日記では、「四時頃吉井君が来た.吉井君の歌集出版を勧める。学校の方は退学したさうだ。」(明治四一年六月一九日の日記)とか、「吉井君の家は芝公園五号地の三、伯爵の邸宅としては粗末だが、人造石の門には〝吉井事務所〟といふ札が出てゐた。室は二階の六畳、松の木の間から往来と電車が見える。」(同月三〇日の日記)とあり、書簡には、「吉井君の事を書かうか。面白い男だ。東京よりは函館におきたい男だ。貧乏伯爵の長男だから猶面白いぢやないか。」(明治四一年六月一七日付　宮崎郁雨宛)とある。

しかし、四一年一〇月一二日の日記には「吉井君は、思想の皆無な人だ。だから其象徴的な歌は一向つまらぬ。且つ何日でも同じ語許り使ふので、モウ予は面白いと思ふのが少くなつた。但し、ときとしては、此人でなけや歌へぬといふ天才的の詠口をする。」と批判的な言葉を記すようになり、四二年二月五日の日記になると、「吉井君が来た。この男について太田の予に話したところは、要領をえぬ——ウソツキだといふことであつた。そして来たけれども二言許りしか話さなかつた。」と言い、同年三月一一日には、「スバル」の編集について、「四号は吉井君がやるさうだ。予は近頃実に吉井がイヤになつた。」とまで記す。そして、この頃で二人の交友は終わっている。

しかし、啄木が明治四三年九月に刊行された吉井の第一歌集『酒ほがひ』について、同月二三日の「東京朝日新聞」に載せた書評「吉井君の歌」では、「吉井君の歌には既に広く認められてゐる如く、吉井勇といふ一人の人間に依てのみ歌はるべきであつた歌といふ風の歌が多い。」「『酒ほがひ』一巻は明治の歌壇に於ける他の何人の作にも劣る事のない貢献であると思ふ。」と私的な感情を捨てて正当に評価している。

吉井は大正一〇年(一九二一)、伯爵柳原義光の二女徳子と結婚、一五年、父の隠居により家督を相続したが、昭和八年に妻と離婚し、爵位を返上、同一〇年には高知県香美郡御在所村猪野々(現、香北

町猪野々）に隠棲し、一二年に東京から彼を案じて訪れた国松孝子と高知市で再婚した。同一三年、再起を期して京都に移り、第二次世界大戦末期にしばらく富山県に疎開した時期を除き、最期まで京都に住んだ。

土佐に移ったころからの短歌には人生的な深みが見えている。

戦後、歌会始の選者や芸術院会員となり、昭和三五年（一九六〇）一一月一九日に肺癌のため七五歳で没するまで文筆を廃さなかった。歌集は、第一歌集『酒ほがひ』から三一年刊行の『形影抄』に至るまで四〇冊を数える。全集として『吉井勇全集』全八巻（番町書房昭和三八～三九）、増補版、全九巻（昭和五二～五四）がある。

吉野白村（よしの　はくそん）

〔概括〕啄木の函館時代の友人で、苜蓿社（ぼくしゅくしゃ）の同人。

〔人物〕明治一四年（一八八一）二月二四日、宮城県柴田郡船岡村大字船岡（現、柴田町船岡）に生れた。本名、章三。仙台師範学校を卒業して、三〇年に宮城県で小学校の教員となった。三七年に北海道中川郡利別小学校の訓導となり、三九年に函館区立東川小学校に転任してきた。

白村は仙台師範学校在学中から短歌を作り、地元の文芸誌などに作品を載せており、三七年に新詩社社友となった。三九年一〇月ごろに函館で結成された文学結社、苜蓿社には岩崎白鯨、松岡蕗堂、宮崎郁雨、並木翡翠らとともに、最初からかかわり、年長であったことも手伝って中心的な存在であった。

啄木との交友は四〇年五月に啄木が渋民村を発って函館に移ったときから始まる。白村は啄木の就職先探しに力を尽くし、函館商工会議所の書記であった沢田信太郎に依頼して、そこの臨時雇にさせ、その仕事が終わると、自分で世話して啄木に函館区立弥生尋常小学校の代用教員の職を得させた。啄木は函館に着いた直後のことについての「函館の夏」という日記風の回想をその年、四〇年九月六日に記している。そこで啄木は、

社に入りて二三日のうちに相逢ひたる初見の友の中に吉野章三君あり、宮城の人、年最も長じ廿七歳といふ。快活にして事理に明かに、其歌また一家の風格あり。

と記し、また同年九月九日の日記には、

夜、吉野君宅にて岩崎君と三人して飲みぬ。飲みて酔ひぬ。酔ひて語りぬ。予は衷心よりこの二友を得たるを皇天に謝す。例の如く神を語り詩を語り恋――我が恋を語れり。

と記している。

これらを見ると、啄木が白村を尊敬し、歌風を高く評価していたことがわかる。それまで短歌から遠のいていた啄木が、函館に来て

苜蓿社において作歌活動が活発になったのには、白村の影響が大きかったと考えられる。

のちに、宮崎郁雨も『函館の砂』（昭和三五年一一月）で、

啄木が私達グループの中で一番彼を信頼したのも、畢竟は私達同人に比べてその社会観、処世観に関する振幅が大きいのと啄木が身に欠いている敦厚な彼の性格に心引かれたためであったのだろう。

と述べている。

白村は啄木が北海道を発って上京したあとの明治四一年八月、釧路に移り、釧路天寧小学校の校長になった。しかし、僻地で不便が多かったことから教職を辞して、普通文官試験を受けて、鉄道に入り、釧路運輸事務所に勤務したが、肺結核になり、大正七年（一九一八）六月三日、三八歳で世を去った。

『石川啄木全集』には啄木が白村に宛てた七通の書簡が収められている。

若山牧水（わかやま　ぼくすい）

〔概括〕明治・大正期の歌人で、啄木の晩年の友人。

〔人物〕歌人。明治一八年（一八八五）八月一四日、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷（現、東郷町坪谷）に医者、若山立蔵の長男として生まれた。本名、繁。延岡中学校を卒業して早稲田大学英文科に学んだ。同級生に土岐哀果、北原白秋、佐藤紅緑らがいた。中学時代から歌や文章を諸雑誌などに投稿し、上京後は歌人の尾上柴舟に師事した。四一年に早稲田大学を卒業、この年に第一歌集『海の声』、四三年には『独り歌へる』を出したが、これらに新作を加えて出した『別離』で歌壇に知られるようになった。同年、東雲堂から雑誌「創作」を発刊し主宰した。『路上』（明治四四）以後は自然主義的傾向を深めた。四五年に歌人の太田喜志子と結婚、大正九年からは富士山の見える沼津に居を移し、『くろ土』（大正一〇）、『山桜の花』（大正一二）を刊行し、旅の歌、酒の歌などに清澄、円熟を加えた。

牧水と啄木の縁は、牧水の主宰する「創作」の関係であって、明治四三年二月三日の夜に、原稿の依頼に牧水は啄木を自宅に訪ねている。啄木は五月発行の「創作」第三号に短歌「手を眺めつつ」一六首を載せ、その後も七月発行の第五号に「自選歌」二三首、翌年七月発行の第二巻第七号に詩「はてしなき議論の後」六編を発表した。この一連の詩は啄木の最後の詩作である。

牧水の啄木との関係で見逃がせないのは、啄木の臨終に立ち会ったただ一人の友人であったことで、明治四五年四月一三日の早朝、啄木の妻、節子の連絡で駆け付けたときのことを牧水は「創作」の大正三年一月号に、

すぐ馳けつけてみると、座に一人の若い男がゐた。あとで、その人が金田一京助であることを知った。病人は案外に安静であった。（中略）金田一氏はこの分なら大丈夫だらうと、丁度時間も来たから私はこれから出勤するといって帰って行った。それから何分もたゝなかったらう。彼の容態は一変した。老父は私を見ると、かたちを改めて、『もうとても駄目です。臨終のやうです。』と言った。そして、そばにあった置時計を手にとって、『九時半か』と呟くやうに言った。時計は正に九時三十分であった。

と書いており、これは啄木の最期の様子を伝える貴重な文献となっている。

牧水は大正一五年五月、詩歌雑誌「詩歌時代」を創刊したが、六号で廃刊、昭和三年九月一七日、肝硬変のため四四歳で世を去った。全集に『若山牧水全集』全一三巻（雄鶏社　昭和三三～三四）および、『若山牧水全集』全一三巻、補巻一（増進会出版社　平成五）がある。

石川啄木年譜

明治一九年（一八八六）　一歳　※年齢は数え年による

二月一〇日、岩手県南岩手郡日戸（ひのと）村（現、岩手郡玉山村日戸）の曹洞宗の寺院、常光寺に、父石川一禎、母工藤カツの長男として出生。本名、一（はじめ）。当時、両親の戸籍は別で、啄木は長姉サダ、次姉トラと共に母の戸籍に入れられ、「戸主工藤カツ長男一（はじめ）」として届けられた。

明治二〇年（一八八七）　二歳

三月六日、父の一禎が隣村の北岩手郡渋民村（現、玉山村渋民）の宝徳寺の住職となり、一家転住。

明治二一年（一八八八）　三歳

一二月二〇日、妹のミツ（光子）が生まれる。

明治二四年（一八九一）　六歳

五月二日、学齢より一年早く、渋民尋常小学校に入学。

明治二五年（一八九二）　七歳

九月三日、工藤カツが次女トラ、長男一、三女ミツを伴って石川家に入籍。啄木は戸籍上、「石川一禎養子一（はじめ）」となり、工藤の姓を改めて石川の姓を名乗る。

明治二八年（一八九五）　一〇歳

三月、渋民尋常小学校を卒業（当時、尋常小学校は四年制）。

四月、盛岡高等小学校に入学（当時、高等小学校は三年制）。校長は三年間とも新渡戸仙岳。盛岡市仙北組町（現、仙北町）に住む母のすぐ上の兄、工藤常象の家から通う。

明治三〇年（一九九七）　一二歳

三月、六月三〇日から、中学校の受験準備のために菊池道太の経営する学術講習会（のちに江南義塾と改称）に通う。

明治三一年（一八九八）　一三歳

三月二五日、盛岡高等小学校を卒業。

四月一八日、岩手県盛岡尋常中学校の入学試験。四月二五日に入学式。丙一年級に編入される。学級担任は富田小一郎。

明治三二年（一八九九）　一四歳

四月、二年生に進級。丁二年級に編入される。学級担任は同じく富田小一郎。

この年、私立盛岡女学校（現、盛岡白百合学園中、高等学校）の二年生の堀合セツ（節子）を知る。

明治三三年（一九〇〇）　一五歳

四月、三年生に進級。丁三年級に編入される。学級担任はまた富田小一郎。この月の末ごろ、啄木、阿部修一郎、伊東圭一郎、小沢恒一、小野弘吉の五人で親睦の会を作り、これはやがて英語教科書の予習を中心とするユニオン会へと発展する。

この年、上級生の及川古四郎、金田一京助、野村長一（胡堂）を知り、文学に志す。

明治三四年（一九〇一）　一六歳

二月、盛岡中学校で、校内職員の軋轢がもとで、三年生、四年生間に学校刷新のストライキ発生。担任の富田教諭の説得にもかかわらず、級長阿部修一郎の指示のもと、丁三のクラスも合流を決議、啄木、阿部、佐藤二郎起草の具申書を校長多田綱宏に提出。

四月、四年生に進級。

この年、堀合節子との恋愛が急速に進む。

明治三五年（一九〇二）　一七歳

四月、五年生に進級。乙五年級に配属。四月一七日、四年生の三学期の学期末試験に不正行為があったとして譴責処分を受ける。

七月一五日、一学期末の試験においても友人の孤崎嘉助と共謀して不正行為があったとして、二度目の譴責処分を受け、保証人の田村叶が召喚され、九月二日、処分告示。

このままでは落第が必至だったこともあり、「家事上の都合」を理由に退学願を提出、一〇月二七日許可。

一〇月三〇日、文学で身を立てるべく渋民村から上京。

一一月五日、野村長一（胡堂）と中学五年生に編入してもらうため神田あたりの中学校を回ったが欠員なしといわれ不成功。九日、新詩社の集まりに出席、翌日、渋谷の自宅に与謝野鉄幹・晶子夫妻を訪問。二三日、イプセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の英訳本を購入し、以後、これを翻訳、出版して生活していこうとしたが果たさず、やがて病気で床につき、盛岡中学の後輩で、退学して上京、昼間は働きながら夜間中学に通っていた金子定一の下宿で失意窮乏のうちに年を越す。

明治三六年（一九〇三）　一八歳

二月二六日、父に伴われて東京を発ち、翌日帰郷。

一一月一日、新詩社同人に推薦される。

一二月一日、雑誌「明星」に「愁調」と題して詩五編を発表。この時から「啄木」の筆名を用いる。

明治三七年（一九〇四）　一九歳

二月三日、母のカツが堀合家に結納を持参、節子との婚約成る。

九月二八日から一〇月一九日まで北海道旅行。小樽にいた次姉山本トラ宅（夫の千三郎は当時、小樽中央駅長）に滞在。詩集刊行の資金を出してもらうことが目的であったが、トラが病気であったこともあり、果たせなかった。

一〇月三一日、詩集刊行のため上京、翌年五月二〇日まで東京に滞在。

明治三八年（一九〇五）　二〇歳

一月一五日、父の一禎が宗費滞納のため曹洞宗宗務院より宝徳寺住職を罷免される。

五月三日、東京の小田島書房から処女詩集『あこがれ』刊行。

五月二〇日に東京を離れた啄木は、途中に仙台で下車し、土井晩翠を訪ねたりして二九日まで滞在、結婚式にも帰らず、花婿不在の結婚式となった。

六月四日、盛岡市帷子小路八番戸に新居を定める。節子のほか、両親、光子が同居。

八月、ユニオン会の仲間、啄木が各地で借金を重ね、返済しないこと、自身の結婚式に出席しなかったことから反省をうながす手紙を出す。

この年、父の一禎も啄木も定職なく、一家は次第に困窮の度を加える。

明治三九年（一九〇六）　二一歳

一月三日、ユニオン会のメンバー、小沢恒一に絶交状を送る。

一月、一家の窮状を見かねた一禎、青森県上北郡野辺地にある常光寺の葛原対月のもとに身を寄せる。

二月一六日から一家の窮状を打開するため、当時、次姉トラの夫、

千三郎が函館駅長であった山本家を訪ねるが不調。帰りには野辺地の常光寺に父の一禎を訪ね、相談して、二一日に帰宅。二五日、秋田県鹿角郡小坂にいた長姉のサダ、肺結核のため五人の子を残して三一歳で死去。

三月四日、妹の光子を通学していた盛岡女学校の教師に預け、妻と母とともに渋民村の斉藤トメ方の六畳間に転居。

三月二三日、父の一禎、曹洞宗宗務院より宗憲発布による恩赦の通知を受ける。

四月、父の一禎が青森県野辺地から帰る。一一日、渋民村尋常高等小学校の代用教員となる。月給八円。二一日、沼宮内町（現、岩手県岩手町）で徴兵検査。丙種合格で徴兵免除。

六月一〇日、農繁期休暇を利用して父の宝徳寺住職再任運動のため上京、新詩社に一〇日ほど滞在。

一二月、「明星」一二月号に小説「葬列」が載る。啄木の小説で活字になった最初の作品。二九日、節子の実家、盛岡の堀合家で、長女京子（戸籍名、京）誕生。

明治四〇年（一九〇七）　二二歳

三月五日、父の一禎、住職再任の前提である滞納した宗費の弁済の見通しが立たず、また宝徳寺には代務住職中村義寛がいて、住職跡目願を提出していたので、再任を断念して、野辺地常光寺の葛原対月を頼って家出。この日の午後、節子、母に伴われ京子を連れて盛岡の実家から帰る。

四月一九日、高等科の生徒を率いて村内の平田野に行き校長排斥のストライキ。翌日、遠藤忠志校長は転勤と決まり、啄木は二二日に免職。

五月、妻の節子は娘を連れて盛岡の実家に、母のカツは渋民村武道の米田長四郎方に、妹の光子は小樽に住む次姉山本トラ宅にと一家離散することになり、啄木は光子と共に、四日に渋民を発ち、翌日、函館に着く。雑誌「紅苜蓿」の編集に携わるかたわら、五月一一日から三一日まで、苜蓿社同人、沢田天峰（新太郎）の世話で、函館商工会議所の臨時雇となり、同商工会議所議員選挙の有権者名簿を作成。

六月一日、苜蓿社同人、吉野白村（章三）の世話で、函館区立弥生尋常小学校の代用教員となる。月給一二円。同僚の橋知恵子を知る。

七月七日、妻の節子が京子を連れて函館に来る。市内青柳町に居を構える。

八月二日、青森県野辺地の常光寺に滞在していた母カツを迎えに行き、四日に帰る。のち、脚気にかかり転地療養のため函館に来た光子を加え五人となる。

八月一八日、小学校在職のまま、函館日日新聞の遊軍記者となり、「月曜文壇」「日日歌壇」を起こす。二五日、函館大火。一家は焼失を免れたが、市内の大半が焼け、弥生尋常小学校、函館日日新聞社も焼失。印刷所にあった、啄木の小説「面影」を含む「紅苜蓿」第八号の原稿も焼失。

九月一一日、弥生尋常小学校に辞表提出。札幌の「北門新報」の記者、小国露堂の世話で校正係となり、一六日から出社。

一〇月一日、小国露堂の勧めで「小樽日報」の記者となり、この日から出社。同僚に野口雨情がいた。

一〇月二日、家族も小樽に来て、小樽区花園町（現、小樽市花園）の西沢善太郎方に間借り。

一一月一六日、啄木の進言により岩泉江東主筆が解任され、啄木の推薦する沢田信太郎が編集長に就任。

一二月一二日、札幌に新しい新聞が発刊されることを聞いた啄木はしばしば札幌に出かけ、前から啄木を快く思わず、また啄木がしばしば社をあけたことを注意した事務長小林寅吉と喧嘩になり、暴力をふるわれたことを契機に退社。

明治四一年（一九〇八）　二三歳

釧路新聞に入社することになり、一月一九日、単身で小樽を発ち、二一日に釧路に着き、翌日から出社。しばしば花柳界にも出入りし、芸者の小奴と交情を深める一方、笠井病院の梅川操とも親しくなる。

四月五日、東京で創作生活に入ることを決意し、釧路を発ち、七日に函館に着く。一四日、小樽の家族のもとに寄り、一九日、一家は函館に向かう。二十四日、家族を函館の宮崎郁雨に託し、故郷の渋民村を通りたくない気持から海路を選び、三河丸で横浜に行き、二八日に東京に着く。数日間、新詩社に滞在。

五月四日、金田一京助の厚意で、本郷区菊坂八二（現、文京区本郷五の五）の赤心館に同宿。

五月、一か月ほどの間に、「菊地君」「病院の庭」「母」「天鵞絨」など六つの小説、三百枚を書き上げ、売りこみに奔走したが失敗、収入なく生活に困窮する。

六月四日、森鷗外に「病院の庭」「天鵞絨」の雑誌社への紹介を依頼、鷗外の尽力で「病院の庭」を春陽堂に買い取ってもらう。中旬から下旬にかけて、小説創作の失敗を自覚。娘の京子の病気、生活の困窮などに心を乱し、苦悩を短歌に紛らす。二三日から二五日までに二五〇首以上を作る。

八月八日、留守の間に、かねて交情のあった上野貞子が上がりこみ、日記と「天鵞絨」の原稿を持ち去る。

九月六日、啄木の下宿料について厳しい催促を受けて憤慨した金田一京助は、蔵書を売ってこれにあて、本郷区森川町一番地（現、

文京区本郷六の一〇の一二）の蓋平館別館に移る。啄木もこれに従う。

一〇月一日、「東京日日新聞」に小説「鳥影」を五九回にわたって連載。

一二月一日、釧路の小奴、逸見豊之輔と上京し、啄木を蓋平館に訪ねる。

明治四二年（一九〇九）　二四歳

一月一日、啄木が発行名義人となり、雑誌「スバル」創刊号発行。この号に小説「赤痢」を発表。

三月一日、盛岡出身の東京朝日新聞社編集部長、佐藤真一（北江）の世話での同社の校正係に採用され、この日から勤務。月給二五円。

四月三日から六月一六日にかけてローマ字日記を書く。

六月一六日、かねて上京を切望していた家族が宮崎郁雨に連れられて上京。本郷区弓町二丁目一七番地（現、文京区本郷二の三八の九）の新井こう方（理髪店「喜之床」）の二階に間借り。

一〇月二日、上京以来、義母カツとの葛藤に悩み、肋膜炎の苦痛に耐えきれなくなった節子、書き置きを残し、京子を連れて盛岡の実家に帰る。金田一京助と恩師の新渡戸仙岳の尽力で、節子は二六日に帰宅。この間、二〇日、父の一禎、青森県の野辺地から上京。

一一月三〇日より「東京毎日新聞」に評論「食ふべき詩」を七回連載。

明治四三年（一九一〇）　二五歳

四月四日、東京朝日新聞社社会部長、渋川柳次郎（玄耳）の勧めにより歌集の編集を始める。七日、主筆、池辺三山の命により、退社する西村真次から『二葉亭四迷全集』編集事務を引き継ぐ。その第一巻は五月一〇日発売。

六月五日、新聞各紙が幸徳秋水ら無政府主義者による「大逆事件」を報じる。衝撃を受けた啄木は、その後、社会主義に関心を深める。

七月一日と五日、入院中の漱石を訪ね、二葉亭四迷によるツルゲーネフの小説の翻訳「けぶり」について指導を受ける。

七月二〇日から九月一〇日まで、名古屋の聖使女学院に在学中の妹の光子、暑中休暇で上京、啄木宅に滞在。

九月一五日、東京朝日新聞社社会部長、渋川柳次郎（玄耳）の推挙により「東京朝日新聞」の「朝日歌壇」の選者となる。

一〇月四日、東雲堂の西村陽吉と出版契約。原稿料二〇円。同日、長男真一、東京帝国大学医科大学附属病院産婦人科分室で誕生。九日、歌集の名を『一握の砂』とすることを西村陽吉に通知。二七日、長男の真一死去。二九日、間借りしていた新井家の菩提寺である浅草の了源寺で葬儀。

一二月一日、処女歌集『一握の砂』東雲堂から刊行。

明治四四年（一九一一）　二六歳

一月三日、年始に友人で大逆事件の特別弁護人である平出修を訪ね、裁判の内容を聞き、幸徳秋水が獄中から弁護人に送った陳弁書を借りる。四日から五日にかけて筆写。一八日、大逆事件裁判の判決。被告二六名中、二十四名死刑という判決に啄木は衝撃を受ける。一九日、二四名の死刑のうち一二名が無期懲役と減刑。一三日、読売新聞社に土岐哀果（善麿）を訪ね、初めて会う。自宅に伴って歓談、雑誌「樹木と果実」創刊を決める。三正舎という印刷所に印刷費を前払いで支払ったが、印刷所の倒産や啄木の発病のため、二人の合議で発行を断念、雑誌発行は実現しなかった。

二月一日、東京帝国大学医科大学附属病院三浦内科で診察を受け、慢性腹膜炎と診断され、四日に入院、七日に手術。

三月一五日に退院、自宅療養。

六月三日、節子が、父の堀合忠操（ちゅうそう）が函館の会社に就職したため、函館に移住するので、一家を見送るために帰省したいというのを啄木が許さずトラブルとなり、堀合家と義絶。

七月中旬、四〇度を超す発熱、食欲もほとんどなく、病状悪化。節子も東京帝国大学医科大学附属病院青山内科での診察の結果、肺尖カタル、伝染の危険ありといわれる。

八月七日、家主より部屋の明け渡しを要求され、小石川区久堅町七四の四六号（現、文京区小石川五の一一の七）へ転居。母のカツも喀血するようになり、一〇日、妹の光子が旭川から上京、九月一四日まで家事をする。

九月三日、一家の困窮と感情の行き違いから、父の一禎が次姉の山本トラ（夫の千三郎は当時、北海道の手宮駅長）を頼って家出。この月、宮崎郁雨が節子に送った手紙の字句のことから啄木と節子とトラブルになり、節子の妹ふき子の婿で、長年の経済的支援者であった宮崎郁雨と絶交。

明治四五年（一九一二）　二七歳

一月二三日、近所の開業医の代診による診察で、母カツが肺結核であることが判明。

三月七日、母カツ肺結核のため死去。啄木が寝たきりなので、友人の土岐哀果と丸谷喜市が一切の世話をし、葬儀は九日に哀果の生家、浅草区松清町（現、台東区西浅草）の等光町で行なわれた。

四月五日、啄木が重態との知らせを受けて、父の一禎が室蘭の次姉トラ宅から上京。九日、土岐哀果の尽力で、東雲堂と第二歌集出版の契約が成り、原稿料二〇円を受け取る。一三日、朝から危篤。午前九時三〇分に結核のため自宅で、妻節子、父一禎、友人の若山牧水にみとられて死去。一五日、土岐哀果の生家、浅草区松清町の等光町で行なわれた。法名、啄木居士。

〔啄木の死後〕

明治四五年・大正元年（一九一二）

五月二日、節子は京子を伴って千葉県安房郡北条町（現、館山市）八幡の片山カノ方に転地。

六月一四日、次女の房江、千葉県北条町の片山カノ方で誕生。

〔大正元年〕六月二〇日、第二歌集『悲しき玩具』東雲堂から刊行。

九月四日、節子、京子・房江の二人の遺児を連れて、函館の実家に身を寄せ、やがて近くの青柳町三二番地に移る。

大正二年（一九一三）

三月一三日、節子の意志で、啄木の遺骨は函館の立待岬の墓地に葬られる。

五月五日、午前六時四〇分、節子が肺結核のため二八歳で二児を遺して函館市内の豊川病院で死去。法名、貞安妙節信女。

大正一五年（一九二六）

八月一一日、宮崎郁雨により函館の立待岬に「啄木一族の墓」が建立される。